ISSN 0916-3425

彩の国さいたま

第16号

調査研究報告

目　次　CONTENTS

1　資料報告　武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪Ⅰ
若松　良一　1

2　稲荷山古墳外堀の陸橋部について　中山　浩彦　27

3　「武蔵国造の乱」はあったか
－6世紀前半以降の上野・武蔵地域の政治勢力の所在－
利根川章彦　39

4　職人の笊と農家副業の笊
－流通の違いに焦点をあてた製造法の比較－
服部　武　55

5　「太平記絵巻」と寛文期文化の一側面
－絵入り版本と幸若舞「新曲」－
谷澤　孝　63

平成15年3月

埼玉県立さきたま資料館

はじめに

さきたま資料館は昭和44年に開館し、以後埼玉古墳群を中心とする古墳時代の考古資料、及び県北地域を中心とした有形民俗資料に関する調査研究・収集保管事業を手がけ、さらにそれらを活用した展示・教育普及事業を行ってまいりました。

本館では、金錯銘鉄剣をはじめとする国宝「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」や重要有形民俗文化財「北武蔵の農具」などの貴重な資料を中心に展示し、また将軍山古墳展示館では復原された古墳内部の横穴式石室に当時の埋葬のようすを再現しています。

当館では、このような常設展示のほかにも、埼玉の古墳文化や民俗文化をよりよく理解していただくため、当館の特徴を生かした展示・教育普及活動を豊富にしようと事業の企画・実施を工夫しております。

平成17年度の完成をめざして取り組んでいる稲荷山古墳復原整備事業は、昭和初期に失われてしまった前方部の復原を目的に本年度も盛土工事を中心として継続しています。

ハニワ作り・まが玉作り・七夕馬作りなどを行う「さきたま夏休み風土記の丘教室」、クイズや体験学習によって遊びながら学習する「土曜おもしろ博物館」は児童・生徒向けの事業として実施しています。一般の方向けには、古墳や歴史・民俗に関する講義を行う「さきたまアカデミア」、四季折々の展示である「さきたまの年中行事」、県内発掘調査出土品中の優品を展示する「今！注目の出土品」等々の多彩な事業を行ってきました。

「総合的な学習の時間」が本年度から本格実施されたことに伴い、当館での学習活動や電話・ファクシミリ・手紙等による質問が増加しています。当館としての対応について、日々の実践と「さきたまアカデミア『博学連携』」の研修会の報告・討議などを通じて検討を重ねております。

このような館の事業運営は、学芸員の日ごろの地道な調査・研究が基礎となっております。本書は平成14年度の職員の調査研究活動や事業実施に関する成果の一端をまとめたものです。本書が生涯学習や学校教育の場などで広く活用され、県民のみなさまが埼玉の古墳文化や民俗文化を理解するための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、当館の運営に日ごろから格別の御指導、御協力いただきました関係者各位に対し、厚くお礼を申し上げますとともに、今後とも一層の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年３月

埼玉県立さきたま資料館
館長　谷澤　孝

〈資料報告〉

武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪 Ⅰ

若　松　良　一

はじめに

埼玉県行田市にある埼玉古墳群中の稲荷山古墳は墳丘主軸長120mの大型前方後円墳で、主体部の礫槨から出土した金錯銘鉄剣をはじめとする副葬品（国宝）の数々で有名である。また、人物、動物、家、器財、円筒、朝顔などの各種埴輪類が豊富に出土しており、関東地方における人物埴輪出現期の埴輪組成と埴輪が再現する葬送儀礼を知る上で第一級の資料といえる。

今日の発掘調査からすると、埴輪類がトレンチ法による部分調査であったことは、残念であり、今後の追加調査を待たなければ、その全体像を確定することはできないが、古墳の保存状態を把握することと副葬品及び埴輪類の検出を目的とする純然たる学術調査であり、昭和40年代の発掘調査の与条件からすれば、やむを得なかったことである。

すでに大部な正式報告書が刊行され、副葬品のほぼすべてが、詳細に公表されているほか、埴輪類についても、主要なものについては懇切な報告がなされているが、後者は小破片を含む全点の接合には莫大な時間を要することや紙面の都合によって、やむなく割愛された資料もある。

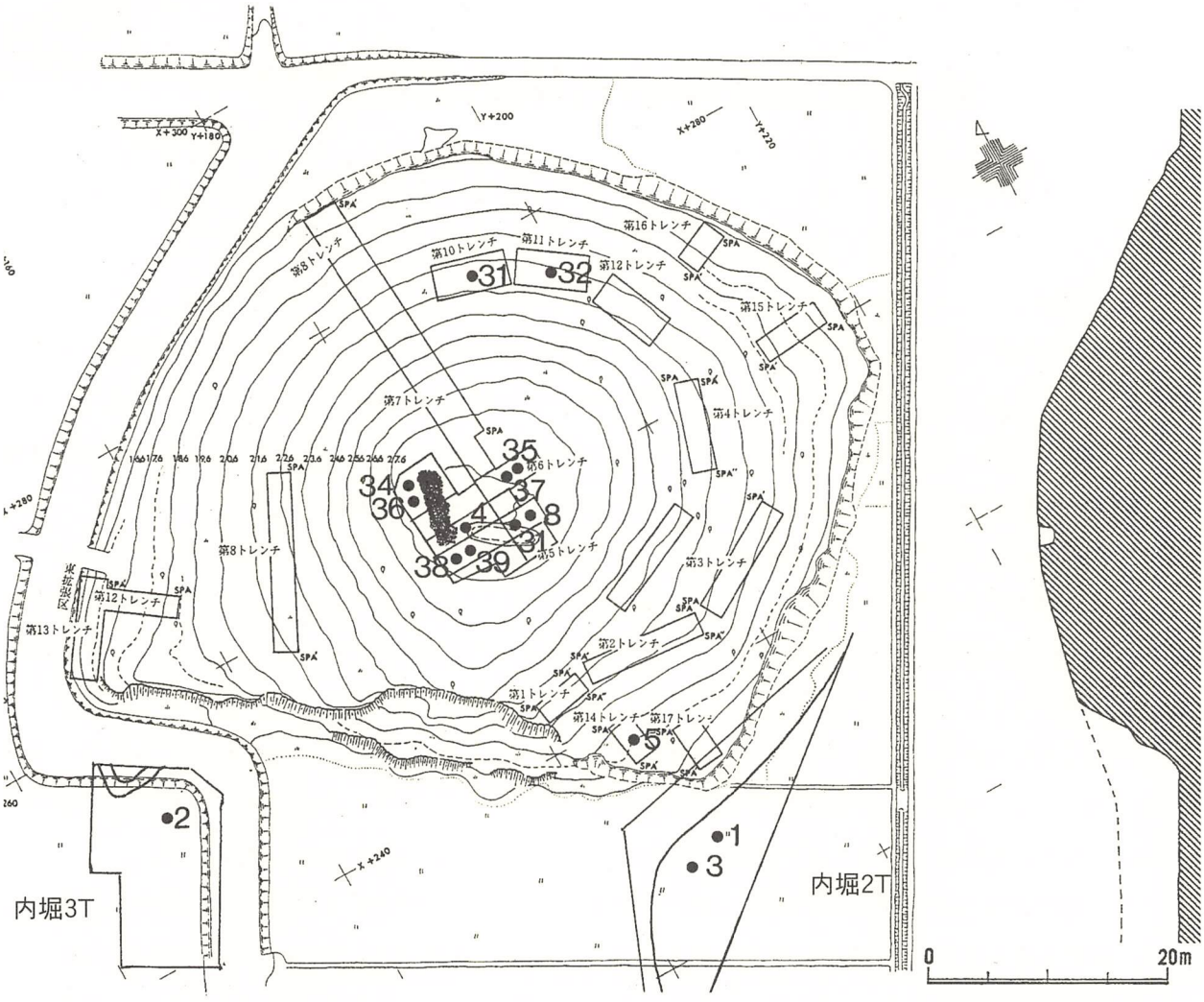
この資料報告は、県立さきたま資料館の常設展示の充実を目的とする日常の収蔵資料の整理、復原、修理過程において、新たに確認できたものと報告書に掲載されているが、復原作業が進展し、形状を大幅に変更したものを公表し、今後の活用と研究に資することを目的とするものである。数量が多く、整理に時間を要するため、今回は家形埴輪を報告し、次回以降、逐次、人物・動物などの形象埴輪を報告することにしたい。

Ⅰ　家形埴輪

1　家形埴輪の出土状況

今回報告する家形埴輪は原形のまま元の位置に留まっていたものはなく、破片になって墳丘や周堀の各所から出土している。取上げはトレンチ単位であり、ドット図も作成されていないが、出土位置と出土状況（第1・2図）を把握し、接合関係を追究すれば、原位置の推定も可能となろう。

墳丘部では、昭和43年度に主体部を検出する目的で設置された墳頂部の第6トレンチから家形埴輪片が５点出土している。第6トレンチは東西方向に設定しており、1区（資料番号35･37）はその東半部で墳頂部中央の稲荷祠のあった位置、2区北拡張区（34・36）は礫槨の北半部、2区南拡張区（4）は礫槨南端付近にそれぞれ対応している。第6トレンチと2mの間隔を空け、南側に平行して設置した第5トレンチでも４点の家形埴輪片が出土している。1区（8･31）はその東半部で粘土槨東側部と槨外東側に、2区（38･39）はその西半部で粘土槨中央部及び槨外西側に対応している。



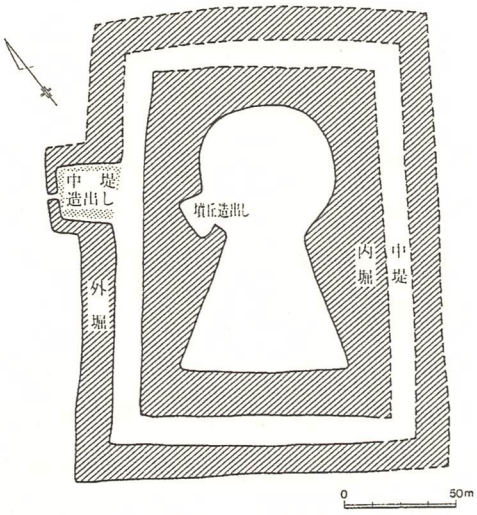
第１図　稲荷山古墳家形埴輪出土位置図（墳丘部）

このほか、墳頂部では昭和58年5月に家形埴輪片が2点（7･30）採集されている。墳丘斜面部では北側中段テラスに設置された第10トレンチ（31）と第11トレンチ（32）で各1点、東側くびれ部に設置した第14トレンチで1点（5）の家形埴輪片が出土している。このうち資料番号31は墳頂部第5トレンチ1区出土資料と接合して完形の堅魚木となった。稲荷山古墳の主体部の覆土はわずか30ないし50cmほどしかなかったことから、墳頂部の盛土は雨水や季節風などの影響で大量に流失し、家形埴輪も斜面部へ転落したと考えて誤りないであろう。

墳丘裾部に接した位置では、東側くびれ部外側の内堀第2トレンチから２点（1･3）、西側くびれ部外側の内堀第3トレンチから1点（2）の家形埴輪片が出土しているが、くびれ部への形象埴輪の設置はないようなので、これらも墳頂部からの転落である可能性が高い。

家形埴輪片が集中して出土したもう一つの地点は後円部の西側にある中堤造り出し部付近である。第4トレンチの造り出し部に対応する部分からは４点（12･15･18･29）、外堀に対応する位置からは３点（13･17･21）、内堀に対応する部分からは２点（10･14）の家形埴輪片が出土している。この中堤造り出し部周辺からは稲荷山古墳出土形象埴輪の大部分が出土しているので、これらは人物や動物埴輪と一緒に中堤造り出し上に配置されていた家形埴輪の破片と見て誤りないであろう。

第１図　稲荷山古墳家形埴輪出土位置図2（中堤造出し）



稲荷山古墳中堤造出しの位置

残念ながら、中堤造り出し部は発掘調査に先立って行われた園池の造成工事によって、西側の部分が掘削されたため、大幅な損傷をこうむり、橋掛かりの中島部分で一部が保存されている状況である。工事中に池から出土した埴輪は一括で扱われ、正確な出土地点は知るべくもないが、前記したように、もともとは中堤上に配置されていた可能性が高い。今回報告する資料には池出土品（11・19・23～28）の割合が高く、これらのなかに第4トレンチ造出部、同外堀、同内堀の各出土品との接合関係を有するものがあることは、この仮定の妥当性を証明するものであろう。

2　家形埴輪の特徴

稲荷山古墳出土埴輪はコンテナ箱に合計250箱あり、の中から形象埴輪を注意深く抽出して、分類作業を行った結果、家形埴輪片は合計50点ほどあった。根気強く接合作業を行った結果、これらのうちの一部は入母屋造りの家形埴輪上屋根部分2棟分として立体的に組み上げることができた。実測に耐えない小破片と特徴の乏しいもの若干を除いて、合計40点の実測図作成と写真撮影を行ったので、観察記録と合わせて、逐一報告することにする。

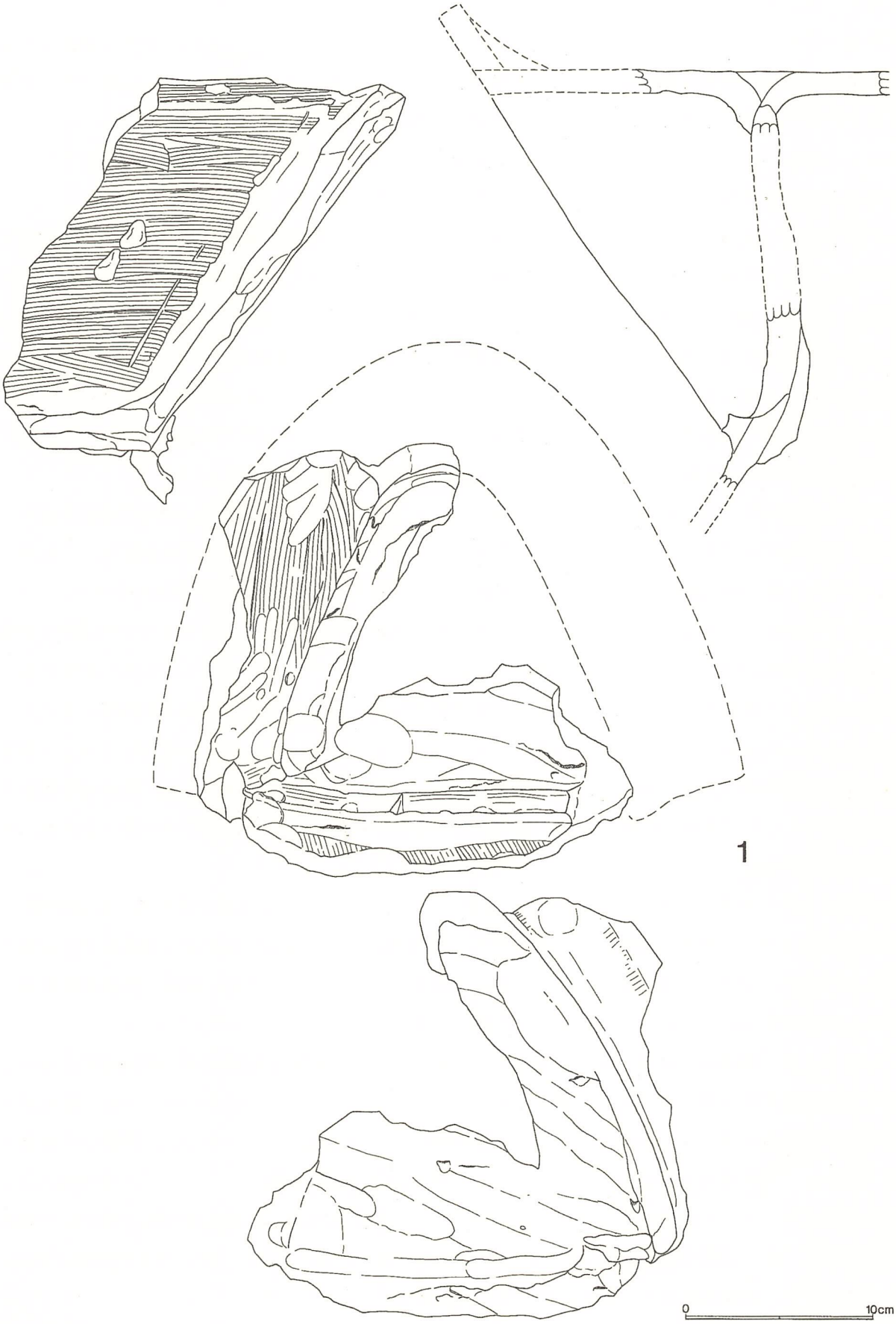
１は入母屋造りの上屋根切妻部分である。報告書には屋根部が掲載されているが、今回、妻の壁体から下屋根にかけた内堀２Ｔの注記がある破片が接合した。屋根の横断面形は大棟の部分が丸く、斜辺が内湾するため、ほぼ隅丸三角形を呈する。下屋根から連続的に母屋を成形し、その外側に切妻部を接合している。切妻部の張り出す角度は54度である。下屋根と上屋根の境界部は内面を幅の広い粘土帯で補強し、外面は妻側と平側の両方に凸帯を水平に貼りつける。凸帯は円筒埴輪に伴うものと共通しており、断面形は上面と両側面の内湾する台形である。切妻端部の側面には幅7.3cmの粘土板を貼りつけて、破風板を表現する。破風板を含む屋根最大幅の復原値は31.7cmである。棟木の表現は行われていない。下屋根と母屋は非板造りであり、平面形で隅丸方形に粘土紐を積み上げて成形している。調整は内面及び妻部外面はユビナデ、上屋根外面はヨコハケ（7本／1.2cm）、破風板外面はタテハケ（7本／1.4cm）、破風板内面はヨコハケ後、ナデ消し、下屋根外面はナナメハケ（8本／1.3cm）である。胎土には粗砂を少量含み、長石、白色パミス、酸化鉄粒、黒色軟質粒、輝石が観察される。焼成は良好で、橙褐色を呈する。

２は１と同一個体の大棟部破片である。３Ｔ内堀の注記がある。横断面形は弧を描く。一方の端面にほぼ垂直な剥離痕があり、反対側で徐々に薄くなるので、母屋に取り付き、切妻部を形成していたとみられる。上面には幅2.1cmの直線的な剥離痕があり、鰭飾りが取り付いていたと推定される。外面調整はヨコハケ（7本／1.5cm）、内面調整は棟方向と直交するユビナデである。

３は1と同一個体の、鰭飾りの付いた大棟部破片である。内堀２Ｔの注記がある。内面調整が雑で、粘土紐が十分綴じ合わされていないことから、外から手を差し入れられない母屋の部分に対応し、最後に閉塞を行った部分であることがわかる。鰭飾り板は厚さ1.2cmの平板なもので、ヘラ切りによって、斜辺が造られている。大棟の外面調整はヨコハケ（7本／1.2cm）、内面調整はユビナデ、鰭飾り板は横位のユビナデである。

４は１と同一個体の、上屋根母屋隅角部破片である。６Ｔ２区南拡2区の注記がある。端面をヘラ切りした粘土板を小口側に接合し、隅角の内側に補強用の粘土を貼り足している。外面には切妻部を接合した痕跡が残る。上屋根部分の外面調整はヨコハケ（10本／2.0cm）、内面は雑なユビナデである。焼成は良好で、淡い赤褐色を呈するが、器肉はくすんだ灰褐色である。

５は1と同一個体の、大棟部破片である。14T表土の注記がある。横断面形は弧を描く。上面には鰭飾りの剥離痕がある。内面調整が雑なので、3と同じく、母屋部分に対応しよう。外面調整はヨコハケ、鰭の付け根部はナデ、内面調整はハケ調整後、雑なユビナデを加えるが、天井部は補強用粘土を貼り足して、ユビオサエで閉塞を行っている。このことから、母屋部では最後に閉塞する



第3図　家形埴輪実測図1

部分以外は、手を差込んで内面の調整を行っていたことがわかる。

６は1と同一個体の、下屋根軒部破片である。注記は不明瞭で読み取れない。壁体に連続して屋根を成形し、軒部は後で貼り足し、下側に補強用粘土を加えている。外面下端部には幅の広い凸帯を水平に貼りつけて、押縁を表現する。外面調整は左上がりのナナメハケ（7本／1.3cm）で、下端部のみが右上がりのナナメハケである。内面調整は左上がりのナナメハケ後、同方向のユビナデを重ねる。軒部はヨコナデである。焼成は良好で、橙褐色を呈する。

７は１と同一個体の可能性がある、壁体隅角部破片である。墳頂部昭和58年5月表面採取の注記がある。粘土紐の巻き上げ成形であり、内面に５段の接合痕が残る。隅角は丸みを帯び、粘土紐も連続している。隅角には垂直に高さ2.1cmの凸帯を貼り付け、次に水平方向の凸帯（高さ1.5cm）を平側と妻側の両面に貼り付け、最後にナデ調整を加える。外面調整のタテハケ（6本／1.1cm）を施した後に凸帯を貼る。内面調整はナナメハケ（9本／1.7cm）であるが、上部に行くにつれ、傾斜が緩くなり、雑なナデと指オサエを部分的に加える。焼成は良好で、外面がくすんだ橙褐色、内面が濃い赤褐色、器肉は淡い灰褐色を呈し、１とは内面の色調が異なる。

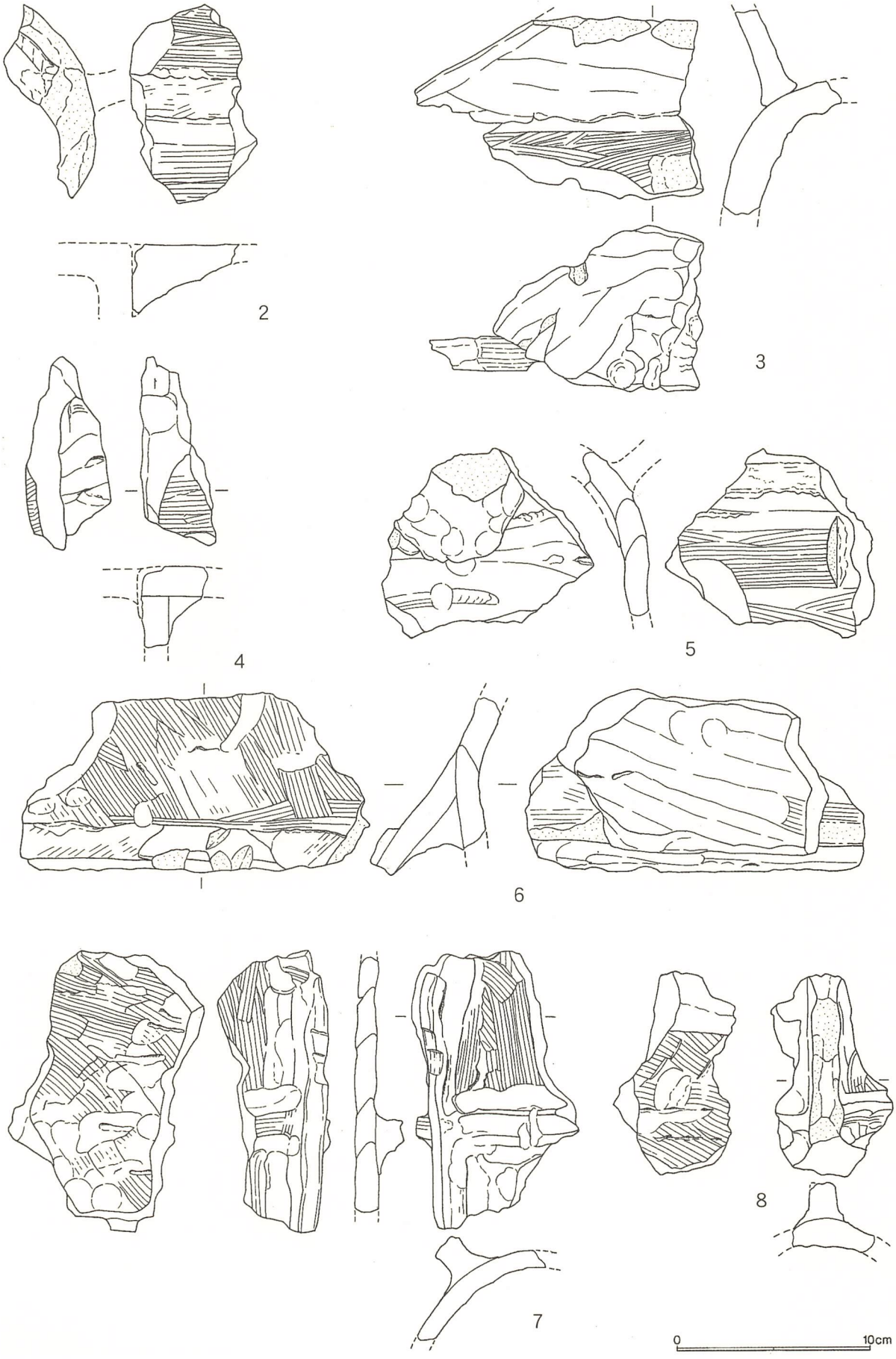
８は７と類似性の高い壁体隅角部の破片である。５T1区表土の注記がある。隅角に垂直の高い凸帯を、妻側と平側に直交するやや低い凸帯を貼り付けている。胎土には粗砂を少量含み、白色パミス、チャート礫、酸化鉄粒が観察される。色調は表面が淡い赤褐色、器肉は茶褐色を呈する。

９は千木の破片である。外堀２Tの注記があるが、実在しないトレンチ名であり、外堀４Tの誤りである可能性が高い。幅4.5cmの破風板の頂部が交差して、そのまま千木となるが、左側の板を右側の板の上に重ねて立体交差する状態を忠実に表現している。交差部の下側は軒内側の頂点となるため、丸く成形されている。交差部裏面には大棟との接合痕らしき粘土塊が付着している。外面調整はハケ調整後、ナデを加える。千木先端部はヘラ切りが施され、平坦である。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、長石、白色パミス、酸化鉄粒が観察される。色調は表面がやや淡い赤褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

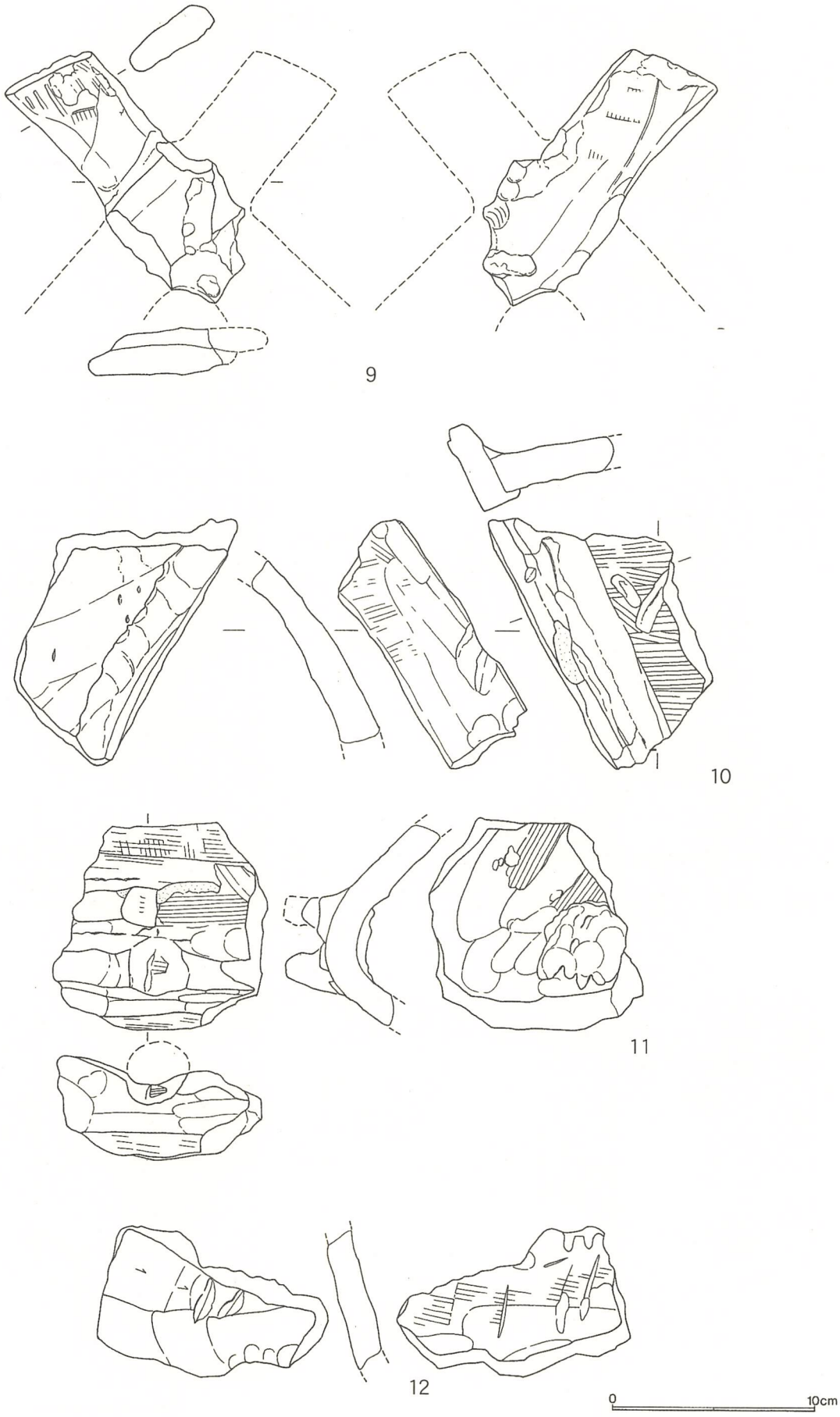
10は９と同一個体の屋根切妻部である。内堀４Tの注記がある。切妻部の張り出しは直線的で、角度は60度を測る。屋根は横断面形が内湾する。切妻側端面には幅4.5cm前後の破風板が貼り付けられているが、内側にも接着面を作り、外側には補強用粘土を加えている。屋根の外面調整はヨコハケ、内面調整は斜位の雑なナデである。破風板の調整はハケ調整後にナデを加える。

11は９と同一個体の可能性がある、屋根大棟部破片である。池の注記がある。横断面形はへの字形で、頂部は丸みを帯びている。大棟上に平行して2列の障泥板が貼り付けられている。堅魚木の脱落痕が半円形に残り、これに接する部分で障泥板頂部は斜辺となっているので、平側から見た場合、障泥板は鋸歯状を呈していたことになろう。屋根の外面調整はヨコハケの後にナデを加える。内面調整はナナメハケの後にユビナデを加える。また、天井部内面には補強用の粘土塊が貼り付けられている。胎土は礫と粗砂をやや多く含み、チャート礫、白色パミス、長石、輝石が観察される。焼成は良好で、表面は橙褐色、器肉はオリーブ灰色を呈する。

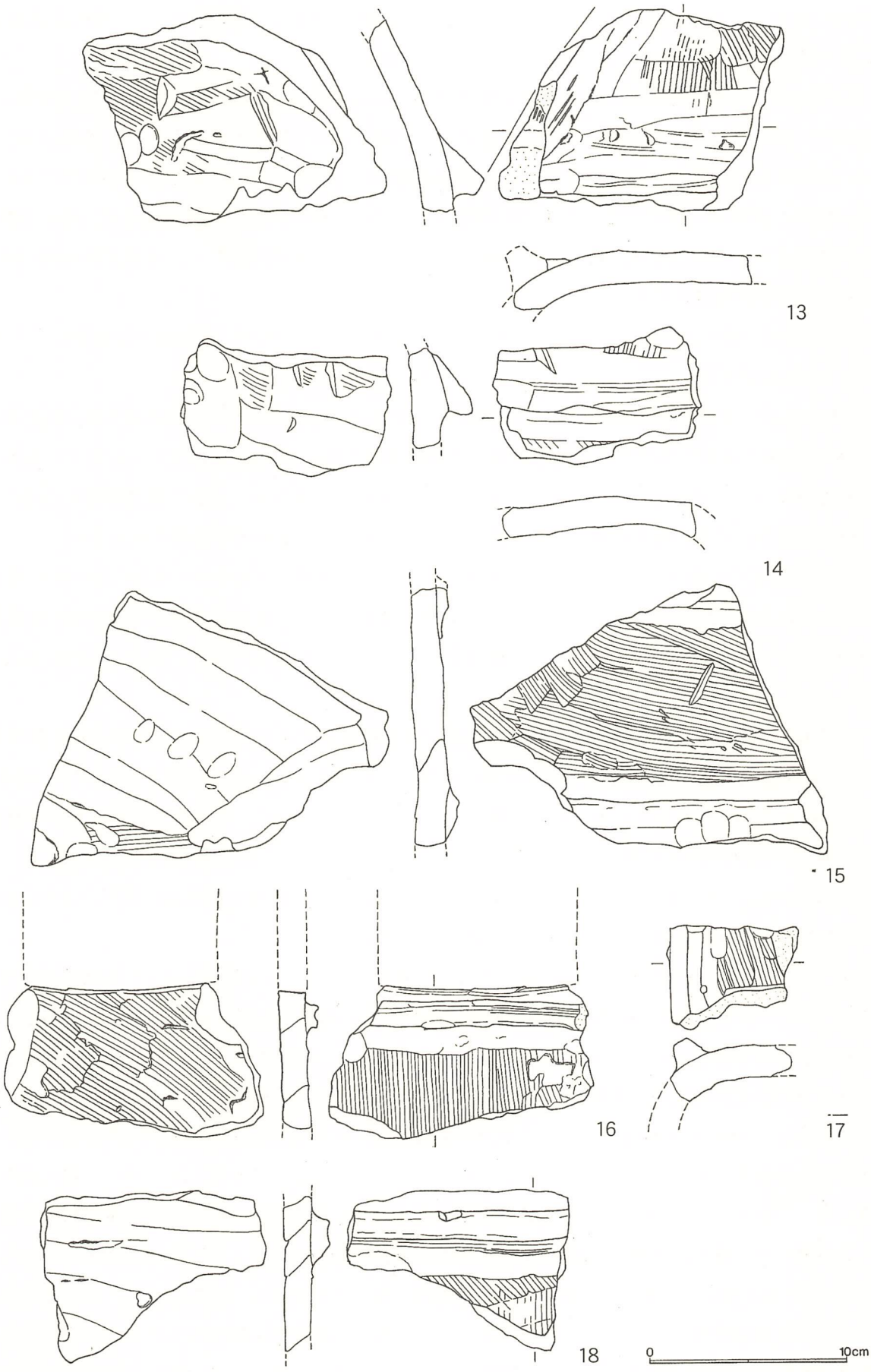
12は９と同一個体の可能性がある、上屋根部片である。造出部４Tの注記がある。外面調整は簾状文的なヨコハケ（5本／0.8cm）、内面調整はヨコナデ及び横位ヘラケズリである。胎土は粗砂を



第4図　家形埴輪実測図2



第5図　家形埴輪実測図3



第6図　家形埴輪実測図4

やや多く含み、チャート礫、長石、白色パミス、酸化鉄粒、角閃石が観察される。焼成は普通で、少し粉っぽい。表面が淡い橙色、器肉は暗灰褐色を呈する。

13は９と同一個体の可能性がある、下屋根隅角部である。外堀４Ｔの注記がある。粘土紐巻き上げ成形で、隅角は丸みを帯びる。壁体から連続して勾配のきつい屋根を成形し、粘土を貼り足して出の小さな軒を表現する。隅角の稜線上には凸帯を貼って、押縁を表現する。外面調整はタテハケ（8本／2cm）後にヨコナデを加える。内面調整はナナメハケ後、斜位のナデを加える。胎土は粗砂をやや多く含み、白色パミス、酸化鉄粒、輝石が観察される。焼成は良好で、表面がやや淡い赤褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

14は13と同一個体の下屋根部であり、胎土、焼成、色調のほか成形、調整技法も共通している。内堀４Ｔの注記がある。

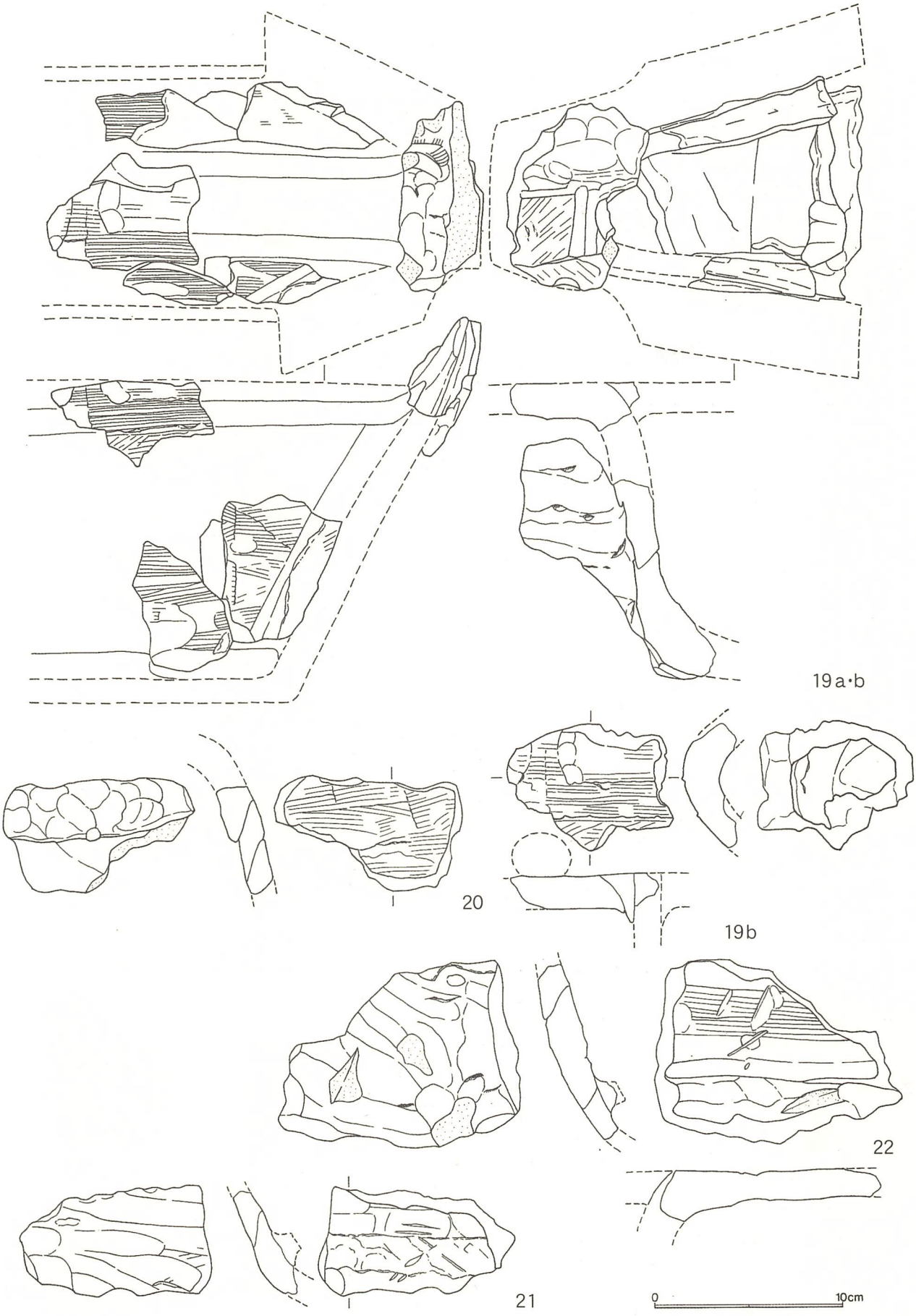
15は壁体部である。造出部４Ｔの注記がある。やや厚手の製作で、外面には2条の低凸帯が11.2cmの間隔で水平に貼り付けられている。外面調整は傾斜の緩いナナメハケ（12本／2.6cm）、内面調整はヨコハケ後に斜位のナデを加える。胎土は粗砂を少量含み、長石、酸化鉄粒、白色パミス、輝石が観察される。焼成は良好で、表面がくすんだ赤褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

16は方形窓を伴う壁体部である。注記が明瞭でない。粘土紐巻上げ成形で、内面に接合痕が残る。水平に貼られた凸帯の上方に接して方形窓がヘラ切りされている。窓の幅は現存値で10cmを測る。外面調整はタテハケ（13本／2.8cm）、内面調整はナナメハケである。胎土、焼成、色調は15と共通する。

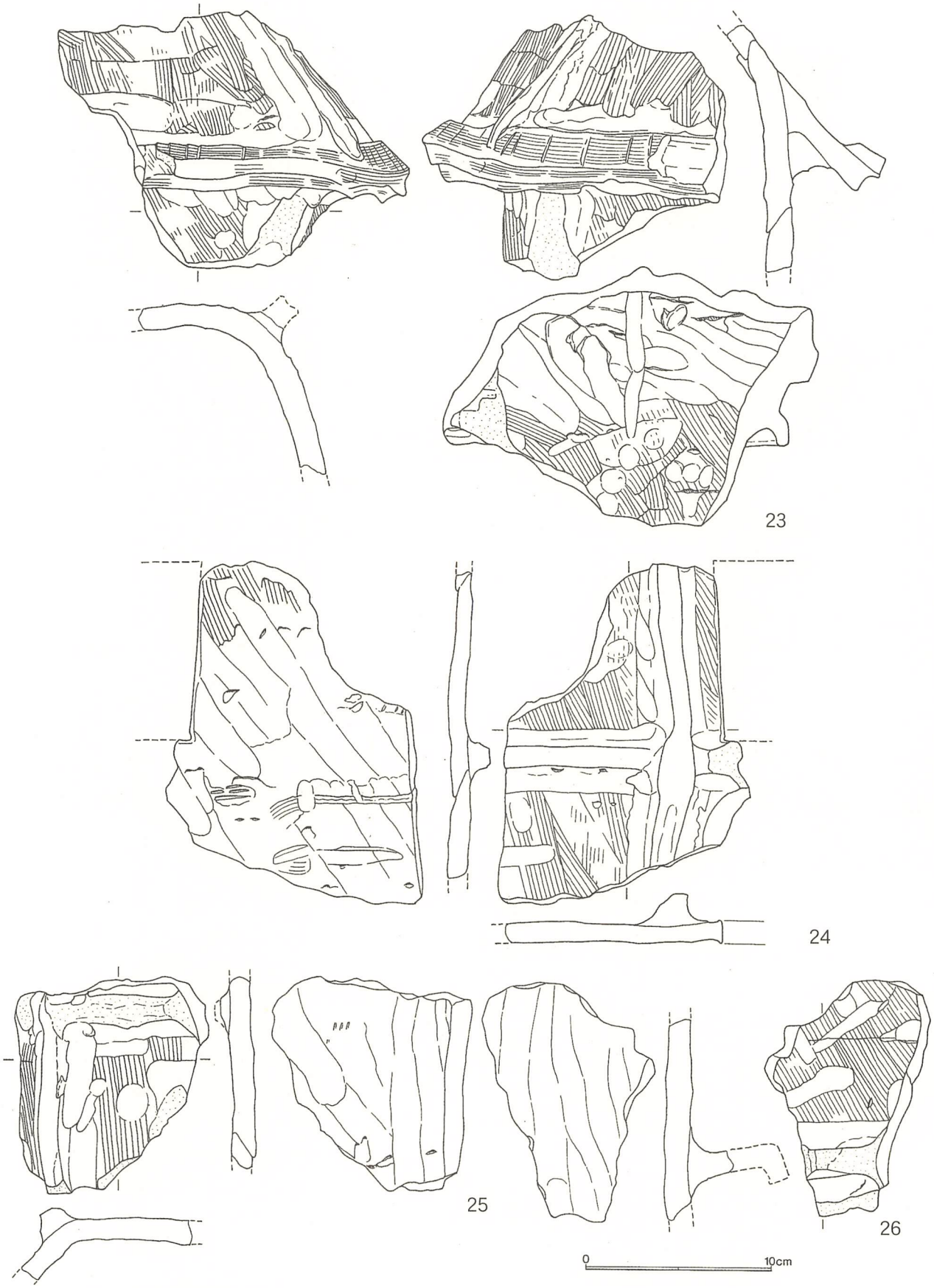
17は壁体隅角部である。外堀４Ｔの注記がある。粘土紐巻上げ成形であり、隅角は丸みを帯びる。隅角上には垂直に凸帯が貼られている。これに直交してヨコナデの一部が確認できるので、水平な凸帯も貼られていたことがわかる。外面調整はタテハケ（4本／1cm）、内面調整は横位ナデである。胎土、焼成、色調は15と共通する。

18は15と同一個体の壁体部である。造出部４Ｔの注記がある。外面には断面M字形の水平な凸帯が貼られている。調整技法と胎土、焼成、色調は15と共通する。

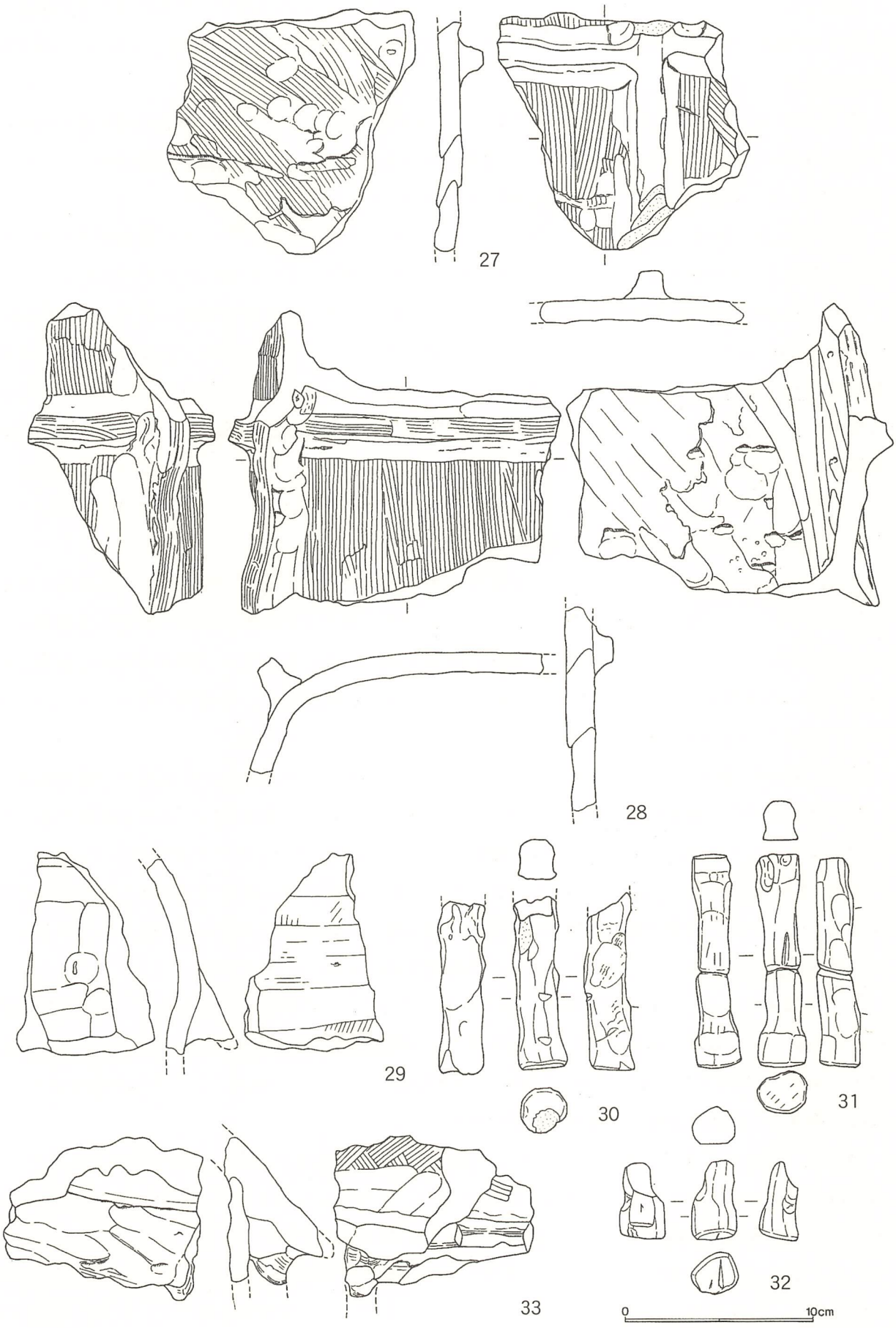
19ａ・ｂは入母屋造りの家の上屋根部である。切妻部分（ａ）と大棟部分（ｂ）を組み合わせて復原を行った。ともに池の注記がある。下屋根に連続して上屋根母屋部分を粘土紐巻上げで成形し、妻側の穴から手を差し入れて、内側の隅角部を粘土で補強し、最後に穴を粘土板で閉塞する。次に、端部をヘラ切り整形した三角形の板2枚を妻側に接合し、天井部を掛け渡して切妻部（張り出し角は60度）とし、端面に破風板を取り付ける。破風板は上部しか残存していないが、平面形が琴柱形になることが推測される。その上端部は粘土をユビオサエで伸ばして整形したもので、縁に向かって薄くなっている。中心部には幅4cmの長方形板を貼って、2材からなる破風板の継ぎ板を表現する。この継ぎ板の直下には棟木の脱落痕が半円形に残る。また、大棟上には3cmの間隔をおいて平行する2枚の障泥板と1個所の堅魚木の剥離痕が残る。屋根の横断面形は逆U字形で、扁平気味である。屋根の外面調整はヨコハケ（13本／2.2cm）、母屋の内面調整は雑なユビナデ、切妻部はハケ調整後にナデを加える。胎土は粗砂を少量含み、チャート礫、白色パミス、輝石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で、器肉は還元がかっている。表面が橙色、器肉は暗灰褐色を呈する。



第7図　家形埴輪実測図5



第8図　家形埴輪実測図6



第9図　家形埴輪実測図7

20は19と同一個体の、上屋根部である。４Tの注記がある。大棟に近く、内面には天井部閉塞用の粘土が内側からユビオサエで貼り付けられている。外面調整はヨコハケ（7本／1.2cm）、内面調整は斜位のナデである。

21は19と同一個体の、上屋根下半部である。外堀４Tの注記がある。下屋根との境界部に凸帯の剥離痕があり、接着効果を増すためにヘラ先刺突が加えられている。下屋根は勾配が緩い。外面調整は横位ナデ、内面調整はヨコハケ後に横位ナデを加える。

22は19と同一個体の、上屋根下半部である。粘土紐巻上げ成形で、コーナー部を持つので、母屋部分となる。外面調整はヨコハケ（5本／0.8cm）、内面調整は斜位の強いユビナデである。

23は19と同一個体の下屋根隅角部である。池の注記がある。報告書に掲載があるが、便宜的に実測図を掲げておく。粘土紐巻上げ成形であり、隅角部は丸みを帯びている。壁体部に連続して屋根を成形し、軒部を貼り付け、粘土塊を挟み込んで補強する。軒の縁には幅2.5cmの凸帯を貼り付けて押し縁を表現する。その上面は簾状文的なヨコハケによって装飾が施される。また、屋根の隅角稜線上と壁体隅角部には幅の狭い凸帯を貼り、押し縁と隅柱を表現する。屋根部の外面調整はナナメハケであるが、傾斜方向の異なるものを交互に施した部分がある。内面調整は壁体部ではナナメハケ（9本／1.8cm）、屋根部では斜位の強いユビナデである。

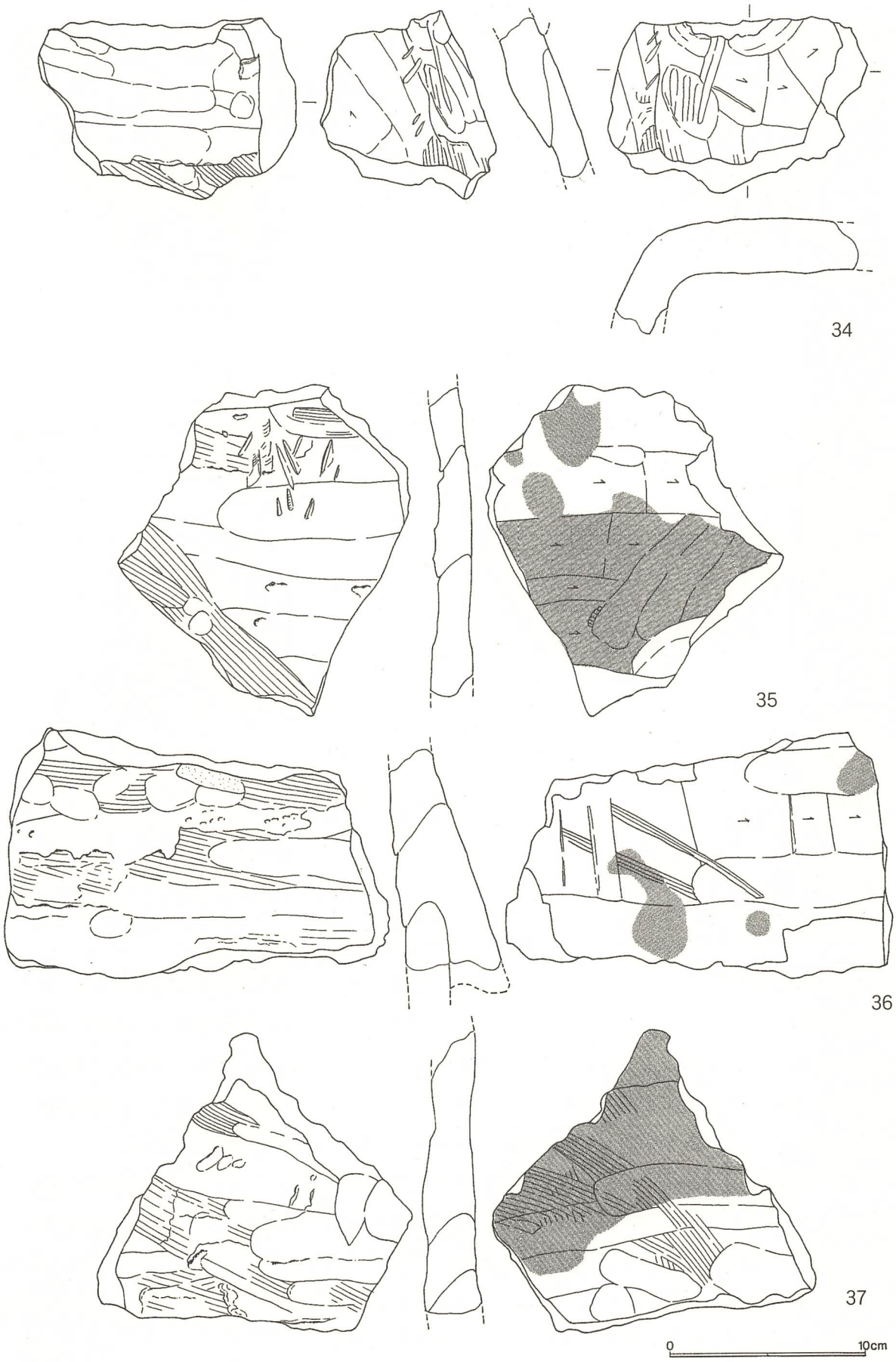
24は19と同一個体の、方形窓を持つ壁体部である。池の注記がある。粘土紐を何本か貼り合わせ板状にしたものを接合する板造りである。内面にはその接合痕が明瞭に残る。直交して縦横に凸帯が貼り付けられるが、縦方向が高く、横方向が低いので、柱に臍を切って横木を組んだ表現と推定される。方形窓はヘラ切りで、角から縦方向に8.5cmが残存する。外面調整はナナメハケ（9本／1.9cm）、内面調整は斜位のユビナデで、上部にはナナメハケが残る。

25は19と同一個体の、壁体隅角部である。池の注記がある。粘土紐巻上げ成形で、隅角は鈍角に曲がる。隅角に凸帯を貼って隅柱を表現し、水平方向にも低い凸帯を貼って横木を表現する。外面調整はタテハケ（10本／1.8cm）、内面調整はタテハケを斜位のユビナデで擦り消している。

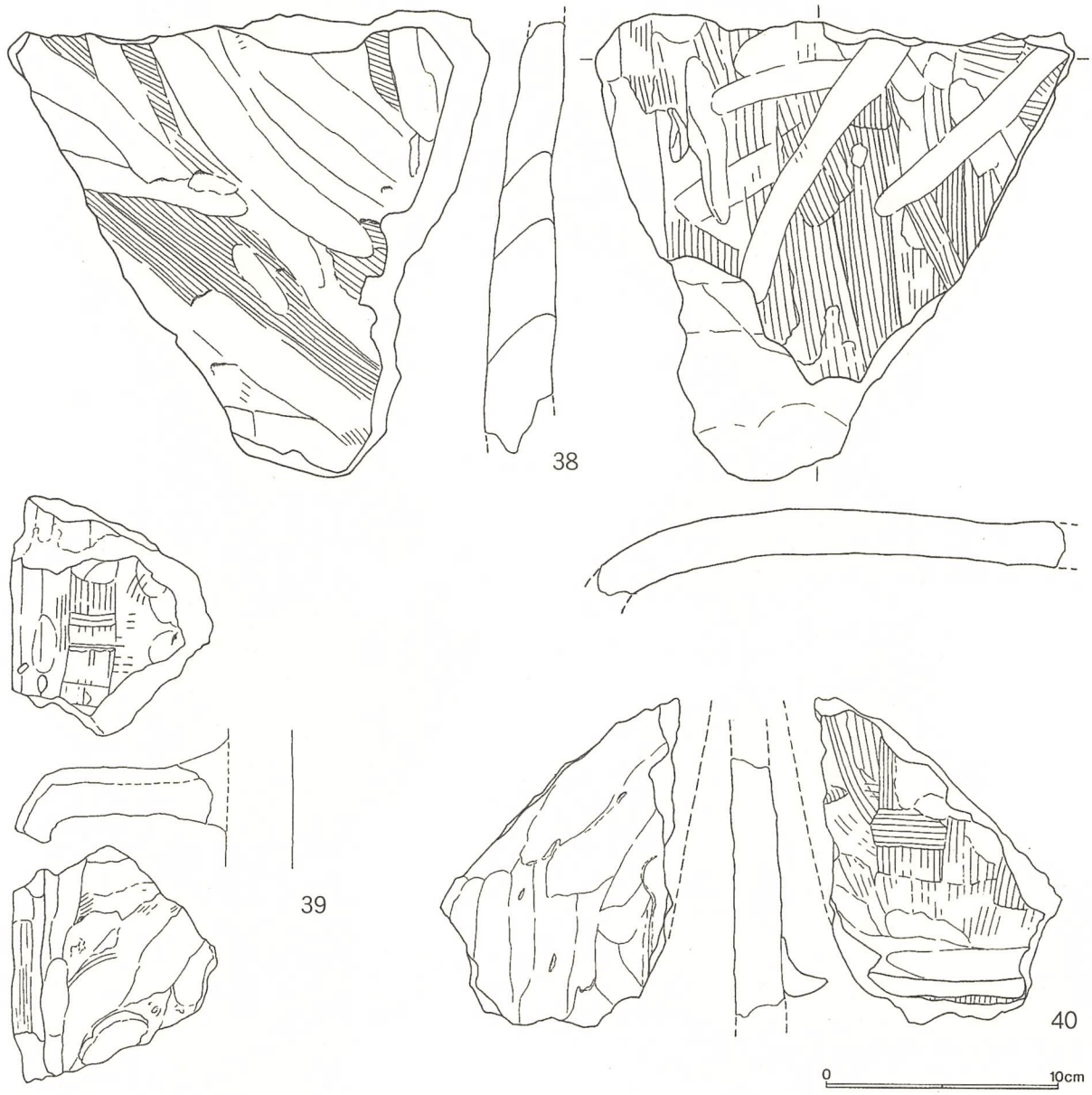
26は19と同一個体の、壁体部である。池の注記がある。24と同じ板造りであり、外面に接合痕が残る。下部に高い凸帯が貼り付けられており、器台部との境界を示す幅の広い張り出し部となろう。外面調整はナナメハケ（8本／1.7cm）、内面調整は縦位のユビナデである。

27は壁体部である。池の注記がある。粘土紐巻上げ成形で、内面に接合痕を残す。外面には縦横に凸帯を貼り付けるが、順序は縦方向が先である。外面調整はタテハケ（8本／1.5cm）、内面調整はナナメハケ（6本／1.5cm）である。胎土には粗砂を少量含み、白色パミス、長石が観察される。焼成は普通で、色調は表面が赤褐色、器肉が灰褐色を呈する。

28は壁体隅角部である。池の注記がある。報告書に掲載されているが、天地が逆であったので、再実測して訂正しておく。粘土紐巻上げ成形であり、隅角部は丸みを帯び、内面に接合痕が残る。外面には水平方向の凸帯を貼り付けて調整した後に、隅角部に縦方向の、より高い凸帯を貼り付けている。隅柱と横木を表現すると推測される。水平凸帯の上側に接して1個所の方形窓がヘラ切りされている。外面調整はタテハケ（7本／1.5cm）を2回施す。内面調整は斜位ユビナデである。凸帯の調整は粗い布目条線を伴う。胎土は小礫と粗砂をやや多く含み、チャート礫、白色パミス、長



第10図　家形埴輪実測図7



第11図　家形埴輪実測図7

石、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で、色調は表面が橙褐色、器肉は暗灰色を呈する。

29は屋根軒部である。造出部４Ｔの注記がある。壁体に連続して屋根を成形し、断面三角形の粘土を貼り付けて出の小さな軒を表現する。外面調整はナナメハケ後に、横位ナデを加えて擦り消す。内面調整は横位ナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート礫、白色パミス、酸化鉄粒、長石が観察される。焼成は良好で、外面は橙色、内面は赤褐色、器肉は茶褐色を呈する。

30～32はよく似た特徴を持つ堅魚木で同一個体に伴うものであろう。30は昭和58年表面採取、31は10Tと5T1区2層、32は11T表土の注記がある。31のみが完形品で、長さは11.3cmある。両端部は断面形が円形で、中ほどがやや細く、大棟との接合面は緩やかな曲面をなしている。粘土棒を転がして円筒形にし、両端を板に押しつけて整形し、ユビナデ調整で仕上げている。胎土は細砂を少量含む。焼成は不良で、軟質である。淡い赤褐色を呈する。

33は屋根軒部である。内堀の注記がある。壁体部に柱を表現したと見られる凸帯を貼り付け、水

平方向にも補強用粘土を貼り付けてから、軒部を接合している。外面調整は斜格子状の装飾的なナナメハケ（7本／1.2cm）、内面は強い横位ユビナデである。胎土には粗砂を少量含む。焼成は良好で、淡い赤褐色を呈するが、器肉は灰色である。

34は寄棟造り家の屋根隅角部である。６Ｔ２区北拡の注記がある。粘土紐巻上げ成形であり、隅角部は丸みを帯びる。外面上部に弧状のユビナデ痕があり、上端には妻隠し板が付いていたと推測される。外面調整はタテハケ後に、斜位のヘラケズリを加える。内面調整はナナメハケ（8本／1.3cm）で、天井部には閉塞用の粘土を貼り付けている。胎土は粗砂を少量含み、白色パミス、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で、外面は乳白色、内面は灰褐色、器肉は暗灰色を呈する。

35は34と同一個体の屋根部である。勾配不明のため、平置き実測した。６Ｔ１区表土攪乱の注記がある。分厚い造りで、外面調整はナナメハケ後に横位ケズリを加える。内面調整は強いユビナデ後にナナメハケを部分的に施す。外面に赤彩が残る。

36は34と同一個体の屋根軒部である。６Ｔ２区北拡の注記がある。器肉2cmを超える分厚い製作である。壁体の上端部を挟むように軒を接合し、連続的に勾配の急な屋根を成形する。外面には赤彩が部分的に残る。外面調整は横位ヘラケズリ、内面調整はヨコハケ後、横位ユビナデである。

37は34と同一個体の壁体部である。６Ｔ１区表土攪乱の注記がある。粘土紐巻上げ成形で、内外面調整はナナメハケ後、横位ナデである。外面には赤彩が残る。

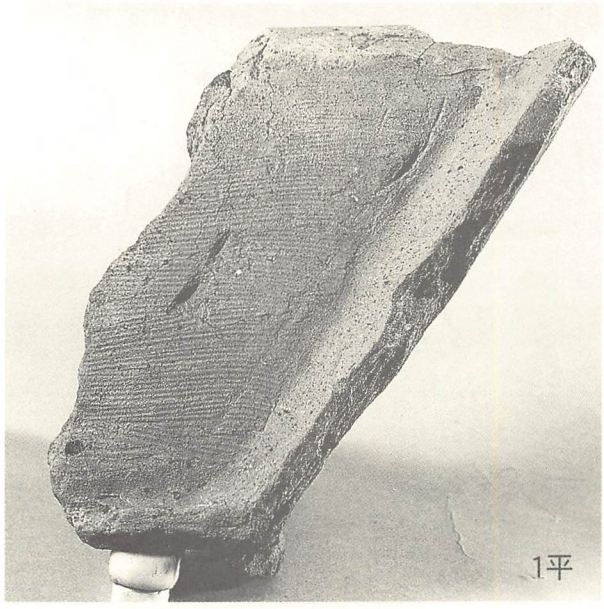
38は34と同一個体の壁体部である。５Ｔ２区表土の注記がある。粘土紐巻上げ成形であり、隅角付近では丸みを帯びている。外面調整はタテハケ（10本／2.2cm）後に部分的なユビナデを加える。内面調整はナナメハケ後、斜位の強いユビナデを加える。現存部下端は厚さが3cmに増しているので、基底部付近となろう。

39は34と同一個体の基底張り出し部である。５Ｔ２区表土の注記がある。壁体への接着部を欠くが、残存長は8.5cmあり、先端部は下方へ屈曲する。外面調整はヨコハケ、内面調整は斜位ユビナデで、端部はヨコナデである。ユニットとして製作したものを取り付けたと推測される。

40は入母屋造り家の上屋根部である。無注記である。勾配不明のため、平置き実測した。下端に補強用粘土が水平に貼られており、下屋根との境界に付く凸帯がこの下にあったと推測される。左側端面には接合面が残っており、破風板が取り付いていた可能性が高い。外面調整はタテハケとヨコハケが組み合わされており、網代表現と推測される。内面調整は縦と斜位のユビナデである。胎土には少量の砂を含む。焼成は良好で、外面は黄色味を帯びた淡褐色、内面は茶褐色を呈する。

おわりに

今回報告した家形埴輪については、少しずつ復原作業を進めており、今年度最後の収蔵品展には、とりあえず1棟を公開する予定である。他の個体についても、引き続き復原を行う計画なので、家形埴輪の復原案を次号に公表したい。稲荷山古墳にはほかにも、未公表の人物埴輪や動物埴輪が多数残されているので、その資料化についても今後の課題として努力していきたい。

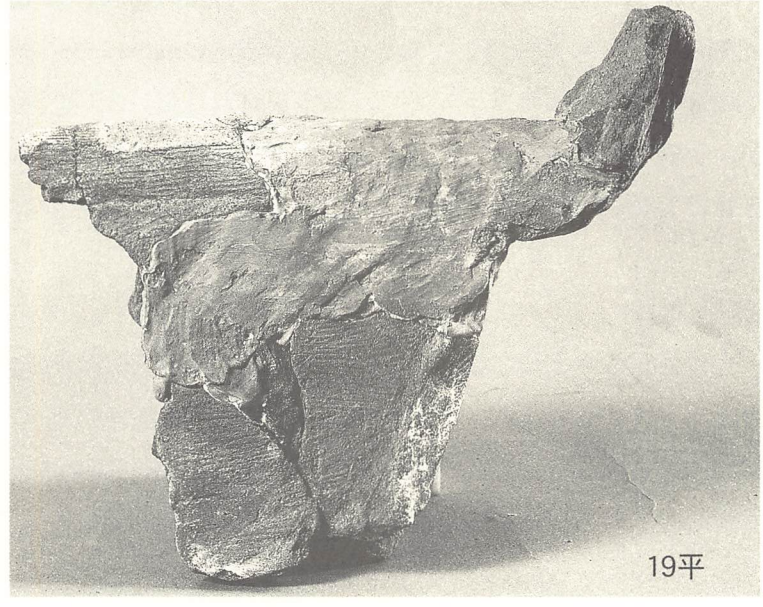

1平

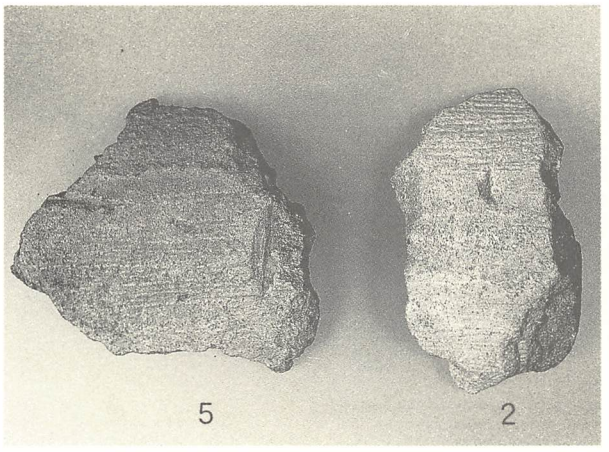
1妻

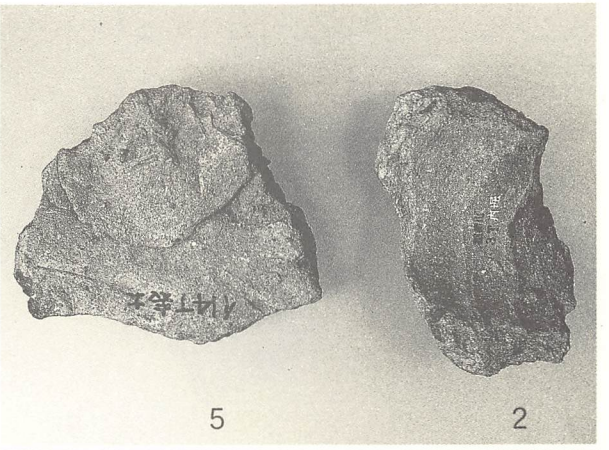
1妻内面

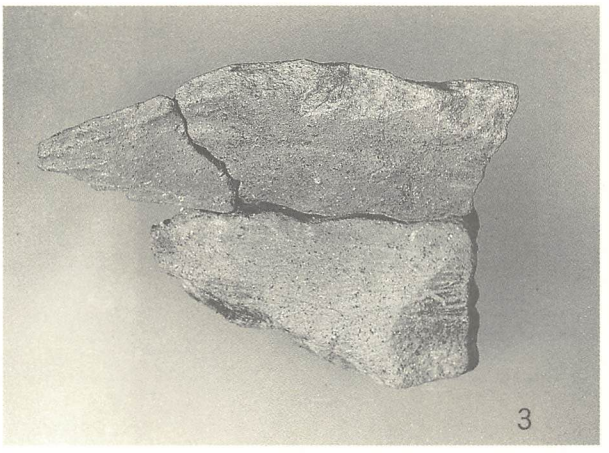
19妻

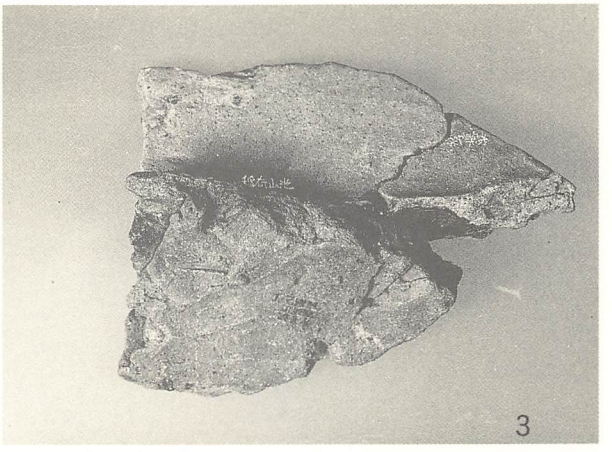
19棟

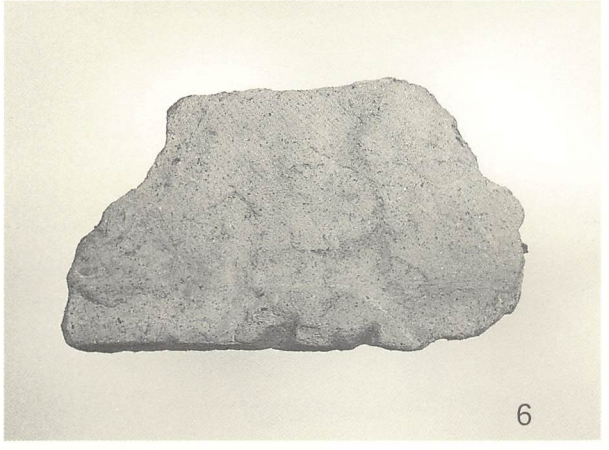

19平

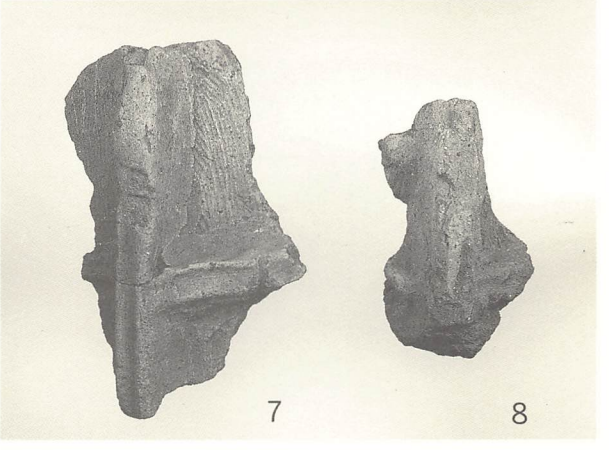

5
2

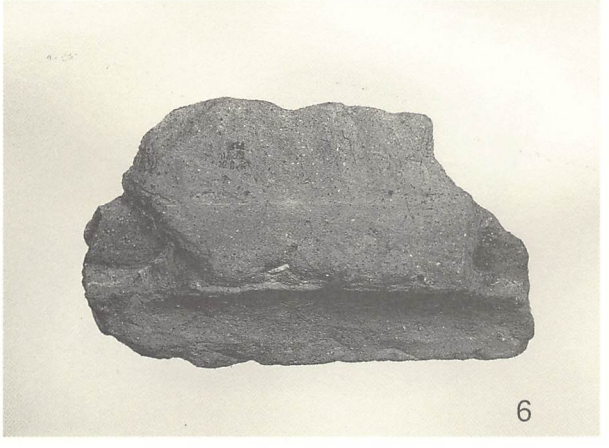

5
2

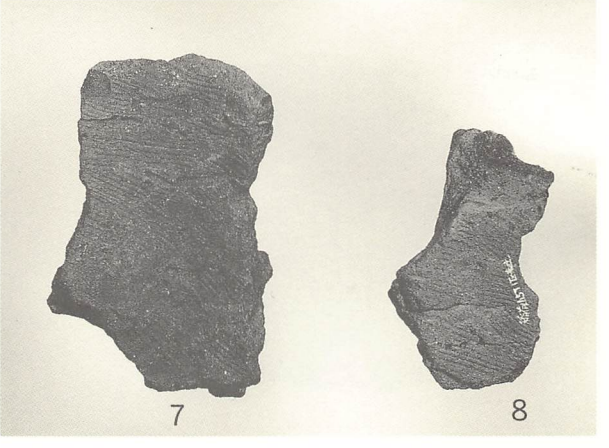

3


3

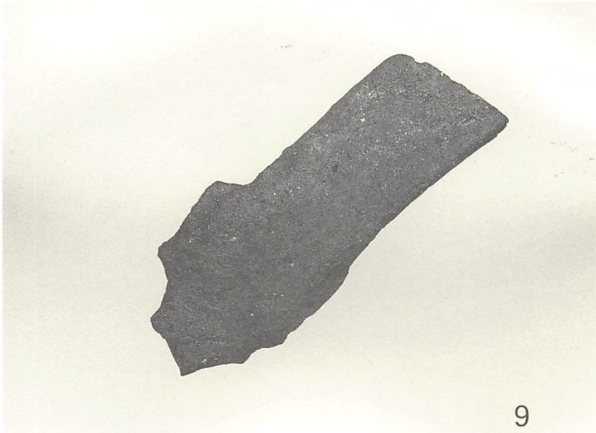

6


7
8


6

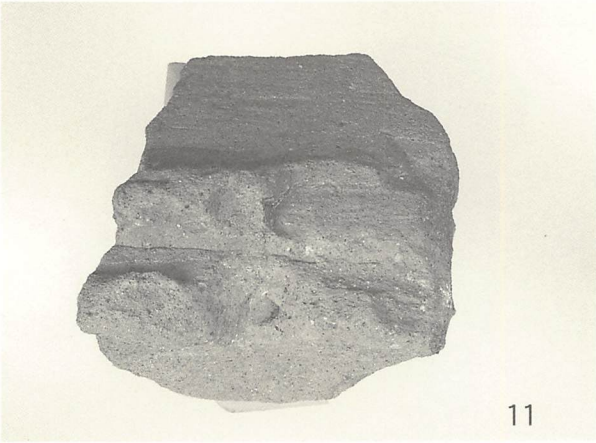

7
8

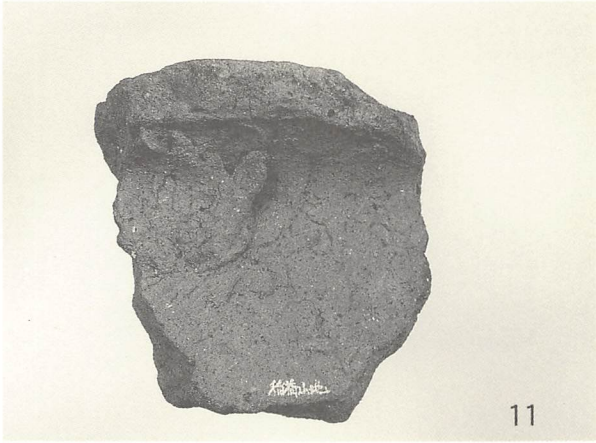
9

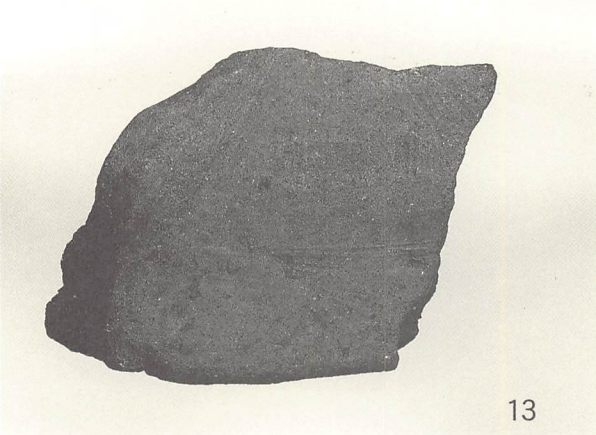

9

10

10

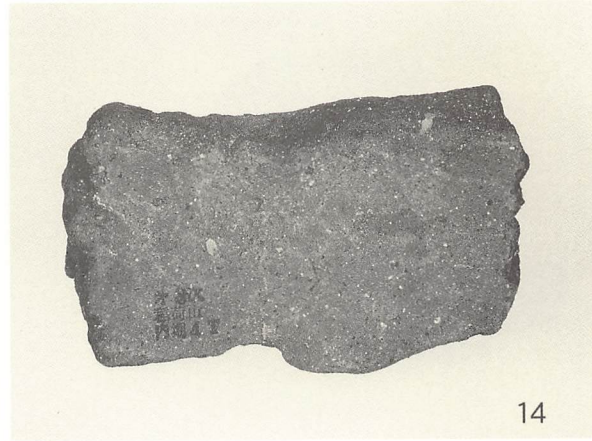

11

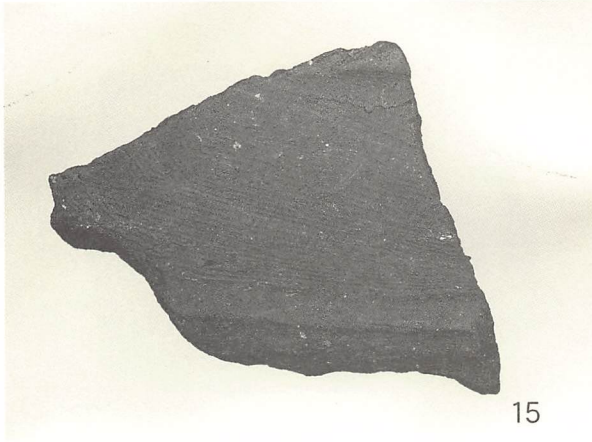

11

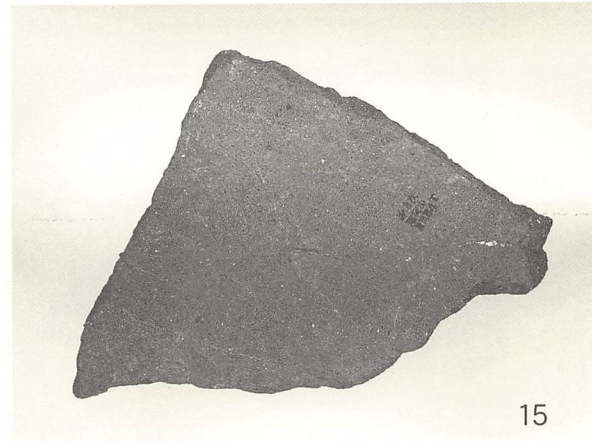

13

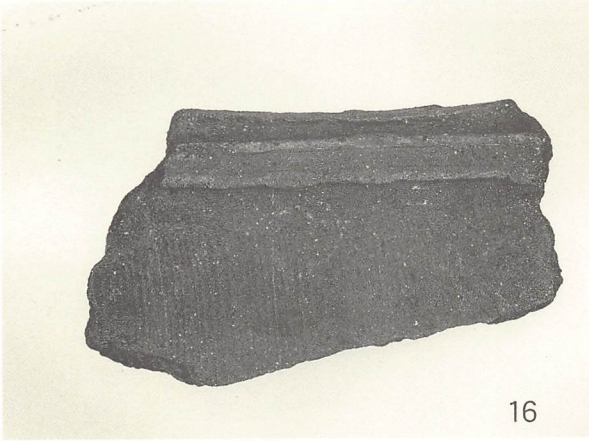
13

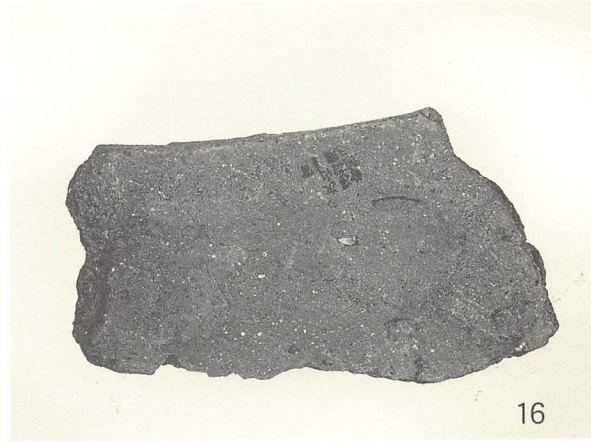
14

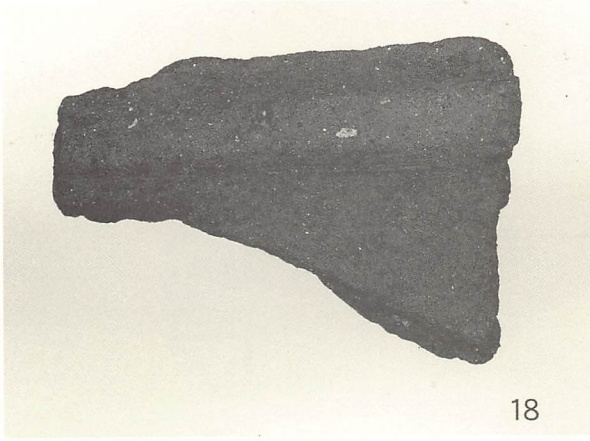

14


15

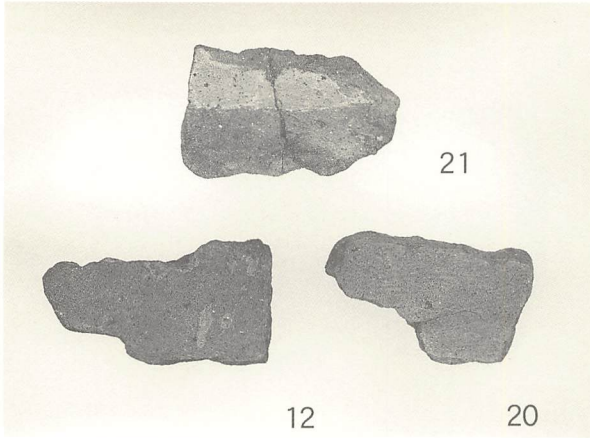

15

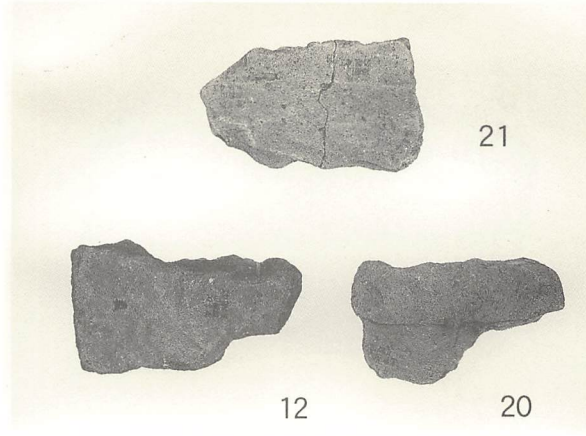

16


16

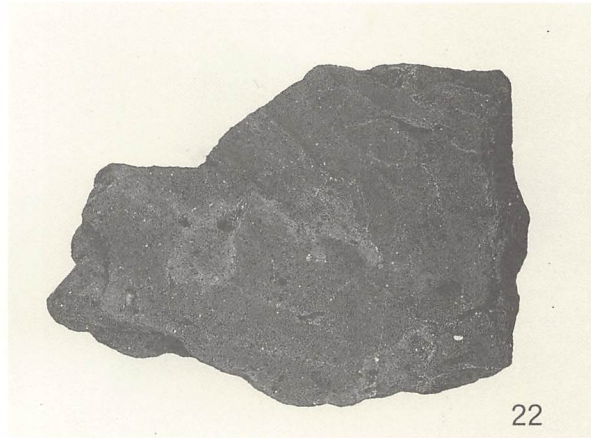

18

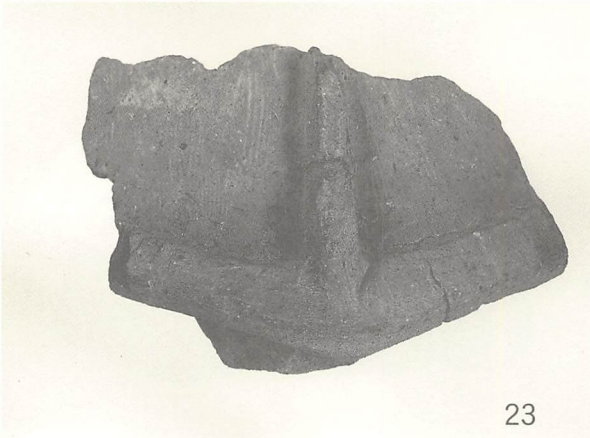
18

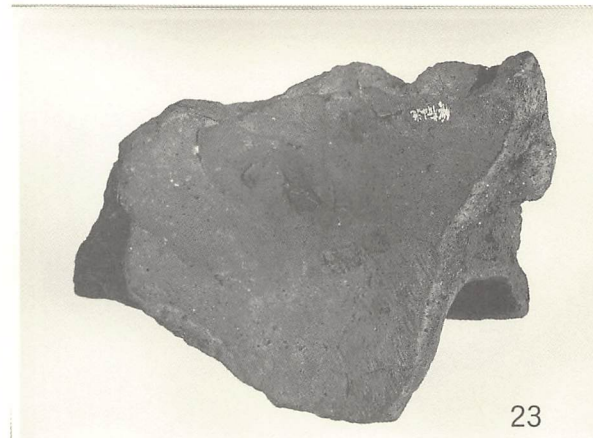

21
12
20


21
12
20

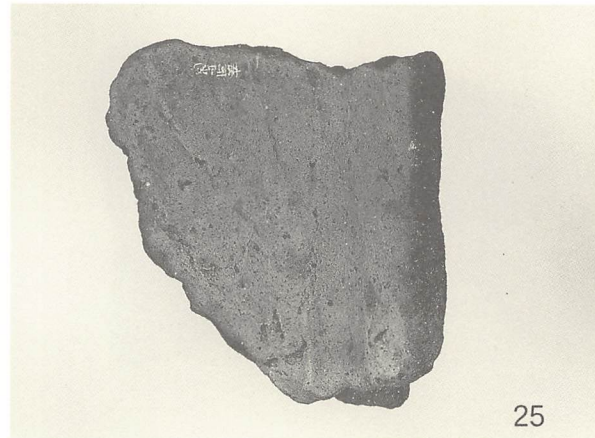
22


22


23


23

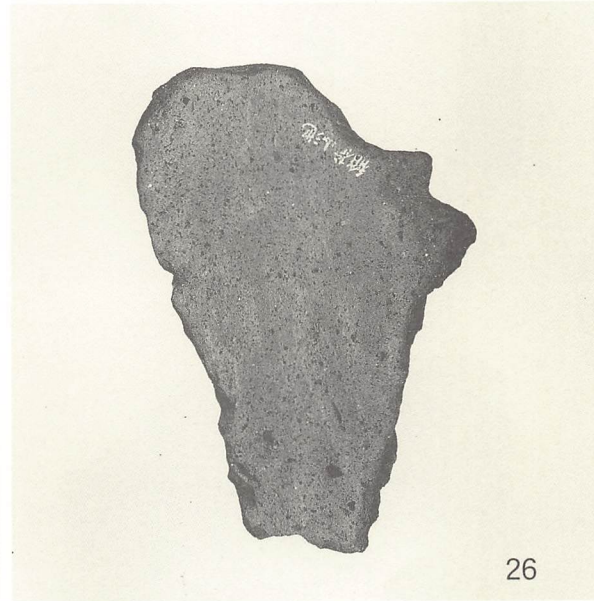
25


25

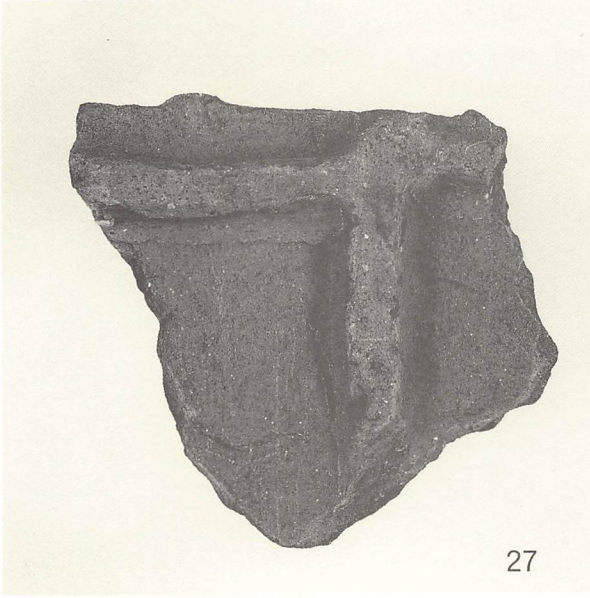
24

24

26

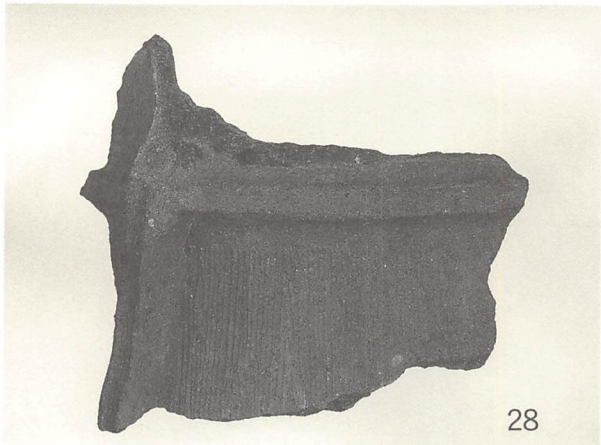


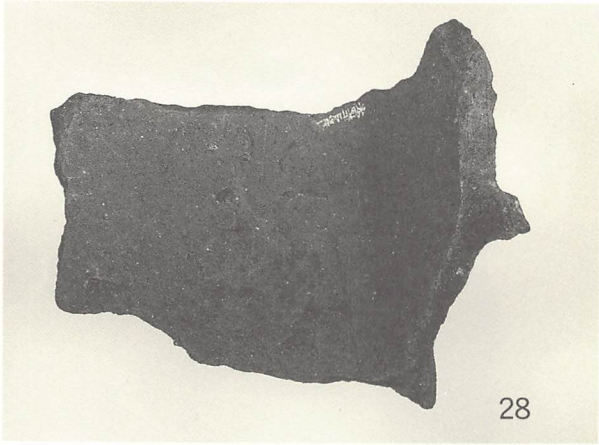
26

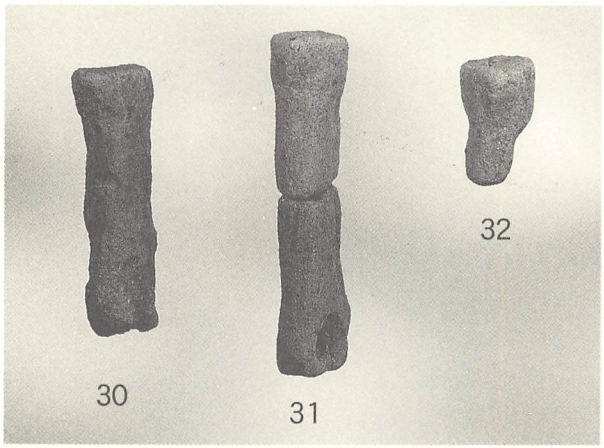


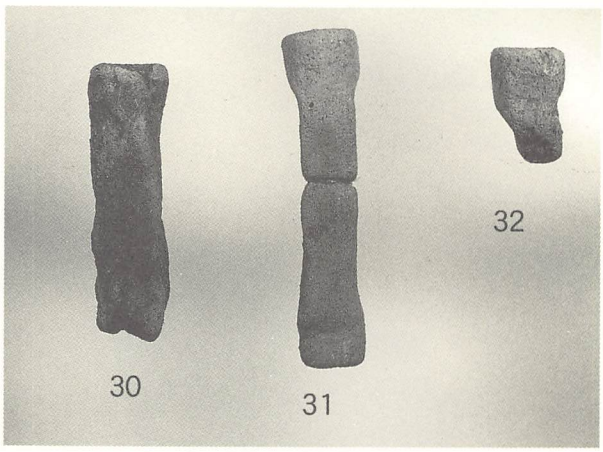
27

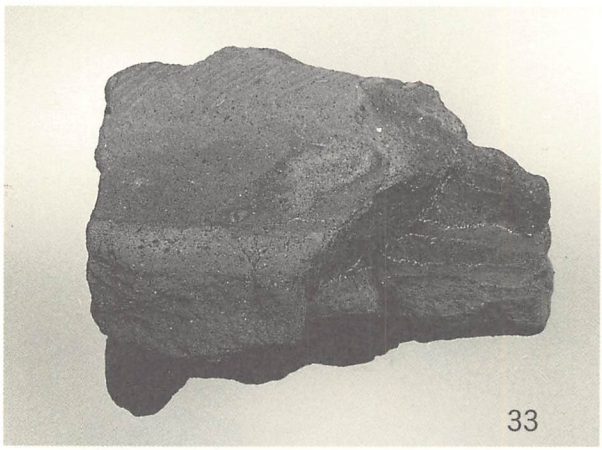
27

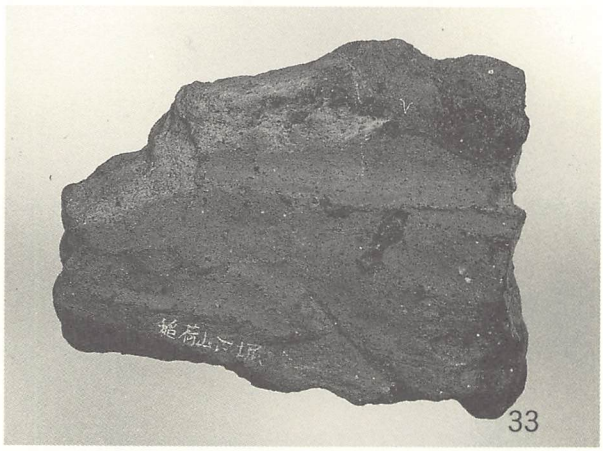

28

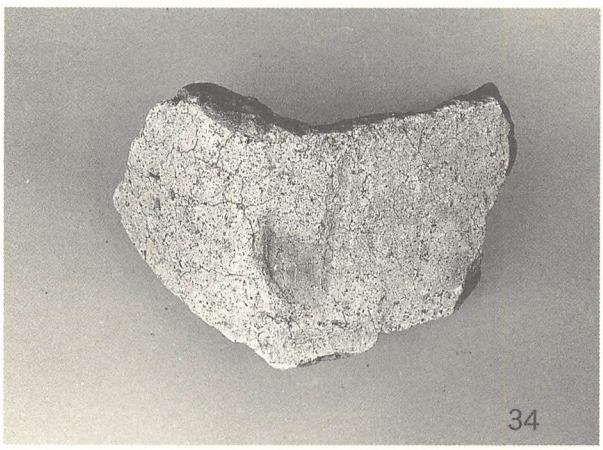

28

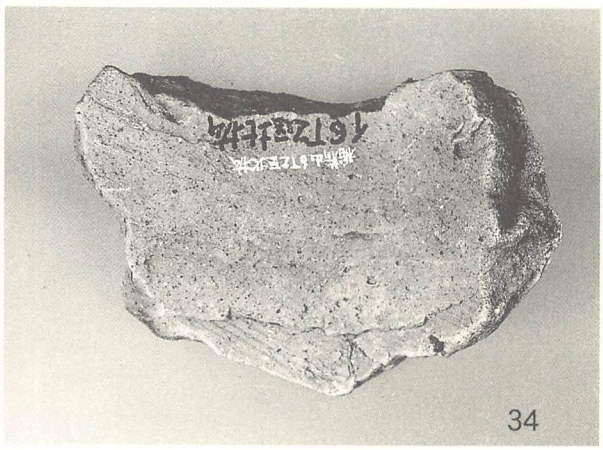

30
31
32

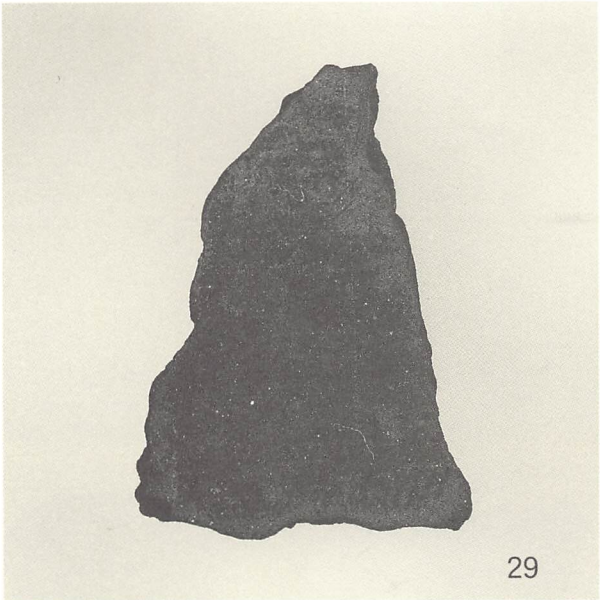

30
31
32


33


33


34

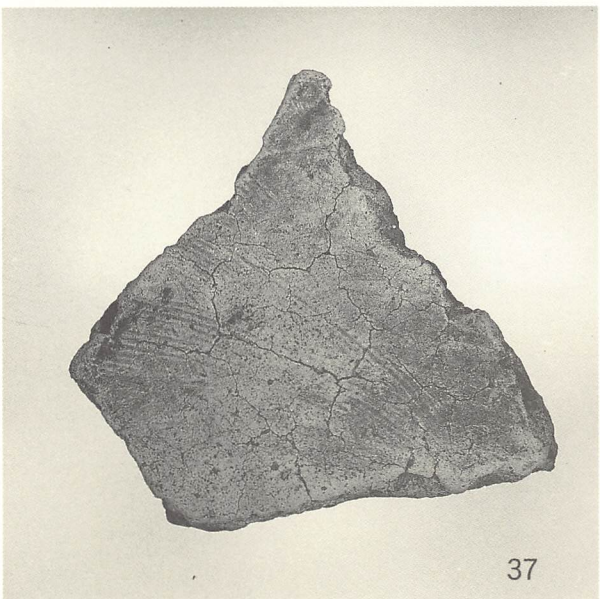

34


29

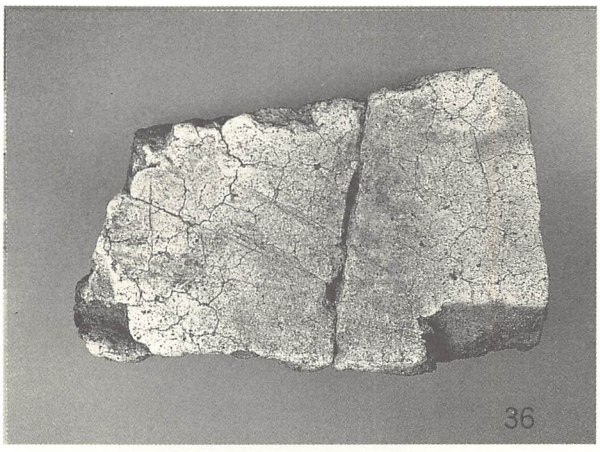
29

35

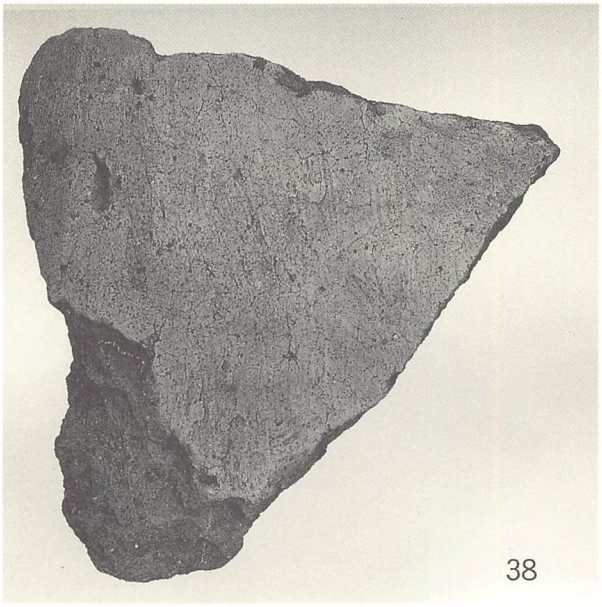
35

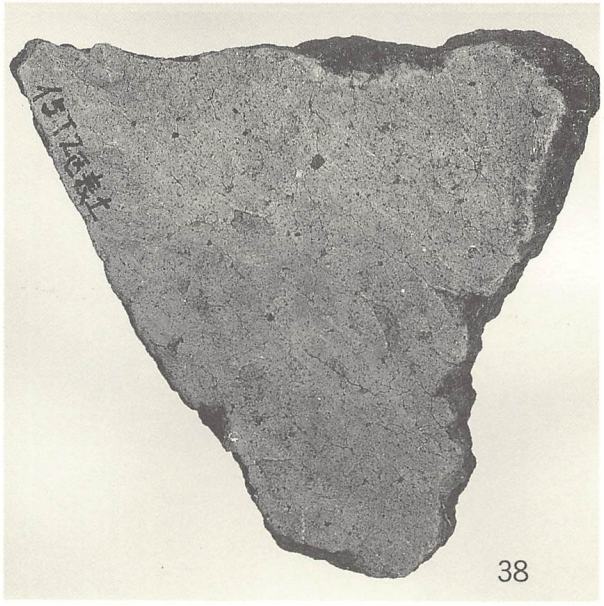

37

37


36

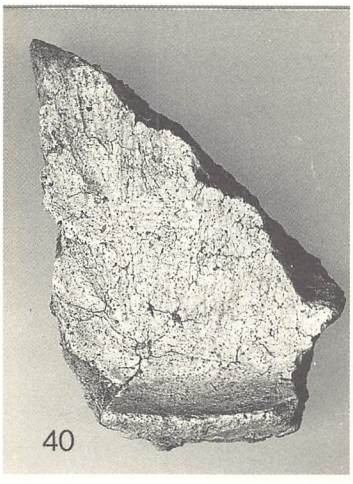
36

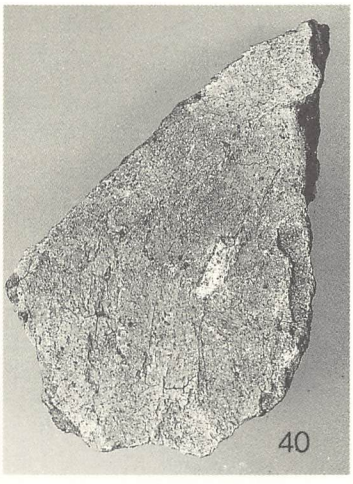

38


38

39

39


40


40

稲荷山古墳外堀の陸橋部について

中　山　浩　彦

1　はじめに

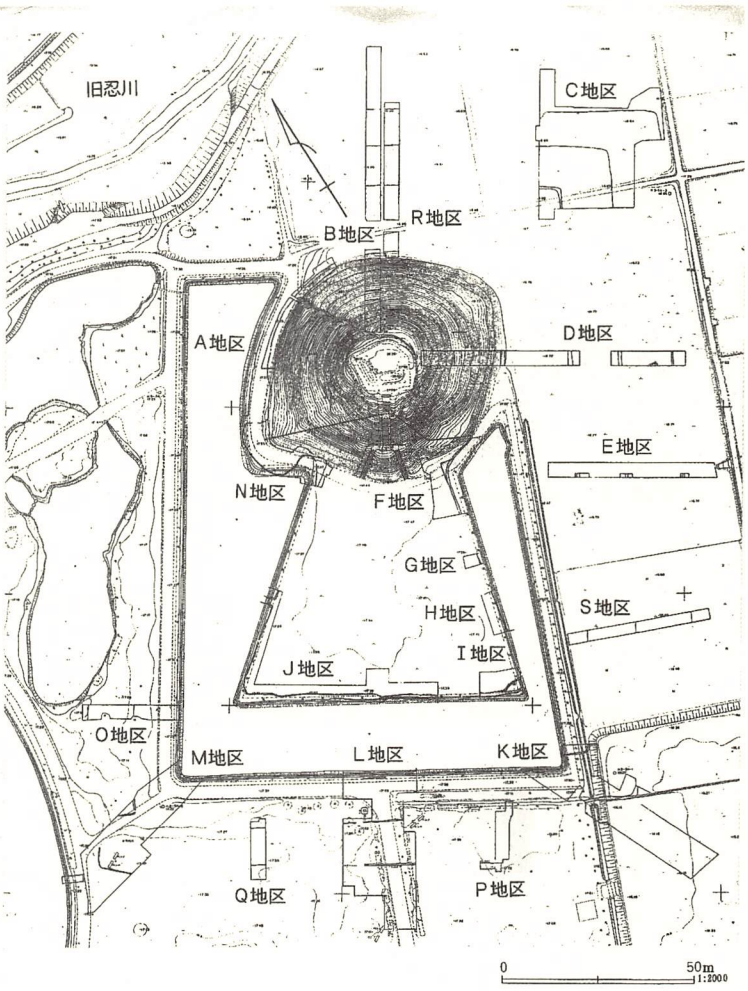
当館では、平成９年度より稲荷山古墳保存整備事業を行っており、昭和13年に削平された前方部が築造当時の姿に戻りつつある。復原整備を実施するに当たり、墳形・堀の形状を確認するため平成９年度から平成11年度の３カ年にわたって範囲確認調査を行った結果、多くの成果が得られ、その調査概要については既に報告がされている（註１）。稲荷山古墳は、昭和48年度の調査で墳丘および中堤に造出しが取り付き、中堤造出しにはブッリジがあることが確認されていた。今回報告するのは、平成11年度の調査において外堀南西コーナー部から新たに検出された陸橋部についてである。近年、各地で古墳の史跡整備が実施されるなか、古墳の周堀に従来のブリッジとは性格が異なる遺構が検出されており、稲荷山古墳の事例と併せてその性格について検討を試みたい。

2　平成11年度の調査概要

(1) Ｍ地区の調査

平成11年度の事業では、主に内堀の形状・範囲を確認するための発掘調査を実施した。調査トレンチは、墳丘の東から南にかけてのＫ・Ｌ・Ｍ・Ｏ・Ｐ・Ｑ・Ｓ地区の７ヶ所と、北側のＲ地区の他に、造出し先端部のＮ地区の計９ヶ所に設定し、全体では2,280㎡の調査を実施した（第１図）。ＯからＲ地区については遺構の調査は行わず、周堀プランの検出だけを行った。全体的に遺構の残存度は悪く、Ｋ地区については撹乱のため外堀外縁プランを確認することができなかった。

新たに検出された陸橋部は、古墳の南西部に設定したＭ地区から検出された。同地区からは、稲荷山古墳の中堤と外堀、近世以降の溝１条、井戸跡１基が検出された（第２図）。



第1図　稲荷山古墳調査区位置図

内堀コーナーについては、昭和51年度に内堀までの整備を既に実施していたことから再確認することは出来なかった。また、本トレンチ西には、丸墓山古墳と周堀が接していることから、堀が切り合うことも考えられたため補足トレンチを設定したが、稲荷山古墳周堀との重複関係は認められなかった。

中堤と外堀は、水田耕作と公園の上水道工事による撹乱が著しい上、昭和48年度の調査トレンチのため残りは良くなかった。外堀覆土は残りの良い所で厚さ30～40cmしか残っていなかったため、ＦＡ（榛名二ツ岳渋川テフラ）の確認は出来なかった。今回の調査でＦＡはどの調査区からも確認することが出来なかったことから、耕作等で削平されてしまった覆土上層部に堆積していた可能性が高い（第３図）。

外堀内縁コーナー部は、第１号溝と昭和48年度の第11トレンチに壊され、残存状況が悪く、立ち上がりの一部が確認できただけであった。そのため、陸橋部が屈曲部のどの位置に取り付いていたのかは不明である。

中堤は、幅約12mで、検出面の標高は約16.5mであった。

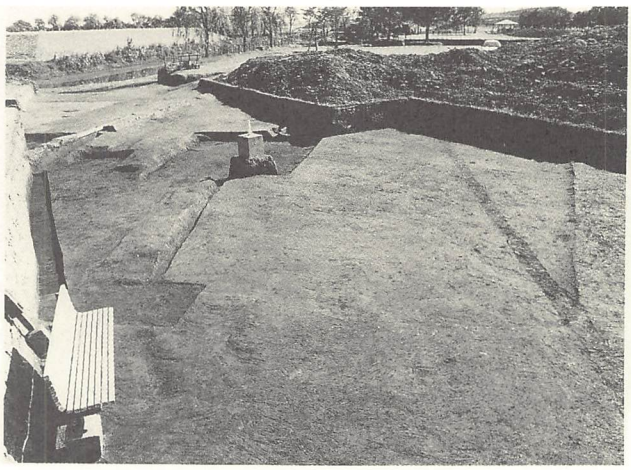
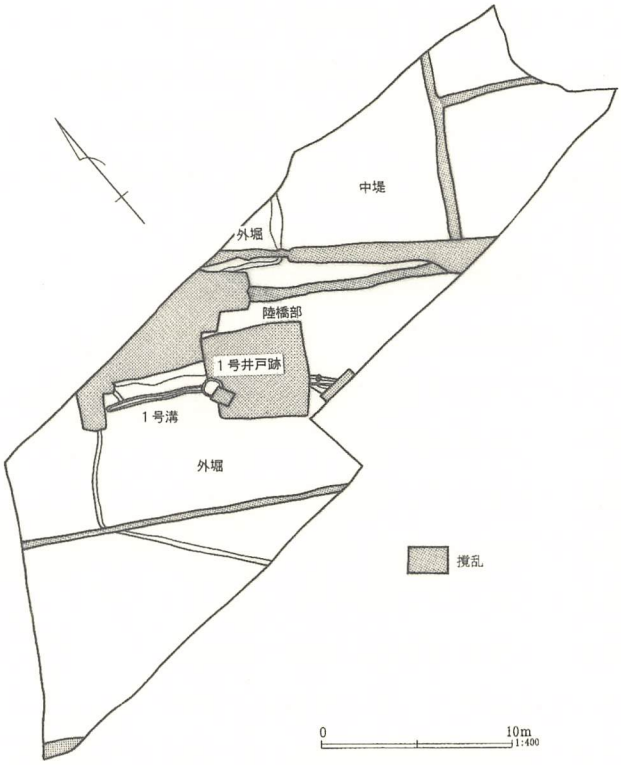


写真1　Ｍ地区完掘状況



第2図　Ｍ地区全体図

（２）稲荷山古墳外堀の陸橋部

昭和43年に撮影された航空写真（写真２）を見ると、周囲との土質や乾燥状態の違いにより、削平された前方部や中堤、長方形に巡る二重の周堀の形状が映し出されていることが読み取れる。また、稲荷山古墳に近接して小円墳が数基存在していたことが、一枚の航空写真により判明したのである。しかし、今回検出された陸橋部部分にあたる墳丘南西部の外堀の途切れについては、他の箇所にも同様の不明瞭な部分があることから、撮影時の状況により堀が切れて写ったものと思われ、これまでは特に注意が払われることはなかった。しかし、平成11年度の確認調査により地山を掘り残した遺構が検出され、航空写真においても当該地点に周堀が切れた状態を示していたことから、本遺構は古墳に付随する施設であることが判明したのである。

外堀陸橋部は、南北幅約５ｍ、東西幅約９ｍにわたり地山のローム層を掘り残した土橋状の遺構として確認された（第４図）。この陸橋部は、昭和48年度の調査トレンチに加え、近世以降の１号

溝、１号井戸跡に壊されていたことから、遺存状態は悪く、前述したように内縁コーナー部にどのように取り付いていたのかを知ることができない。しかし、航空写真から見ると、内堀が屈曲した北側部分に取り付いていたことが読み取れる。また、内縁コーナーから外縁コーナーへと斜めに取り付くのではなく、内縁コーナー部から堀の短辺にほぼ平行するような形で取り付くことがわかる。残りが悪いためはっきりとはしないが、陸橋部北側の立ち上がりは、他の堀の立ち上がりと比較して特に傾斜がきつくなることはないが、南側については立ち上がりが僅かに緩やかになっていたものと思われる。

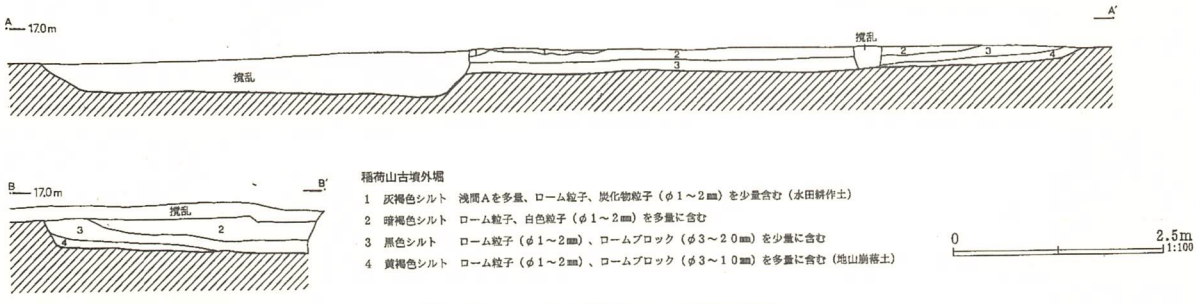
写真2　昭和43年撮影航空写真

（３）出土遺物

Ｍ地区外堀覆土内からは、人物埴輪頭部、器財埴輪、円筒埴輪の埴輪片が少量出土した。埴輪列については、覆土の残りが良かったＫ地区の埴輪の出土状態から、中堤内外の両側にあった可能性が高いが、外堀外縁部については埴輪列の存在を明確にすることは出来なかった。埴輪以外には、坏、甕などの土師器片が約40点、用途不明の土製品が５点出土した。今回の調査では、全体的に土器類の出土量は多いものではなかったが、他の調査区に比べ土師器出土量の多いのが当区の特徴である。土師器は細片が多く、現状で実測可能な遺物は出土しなかった。

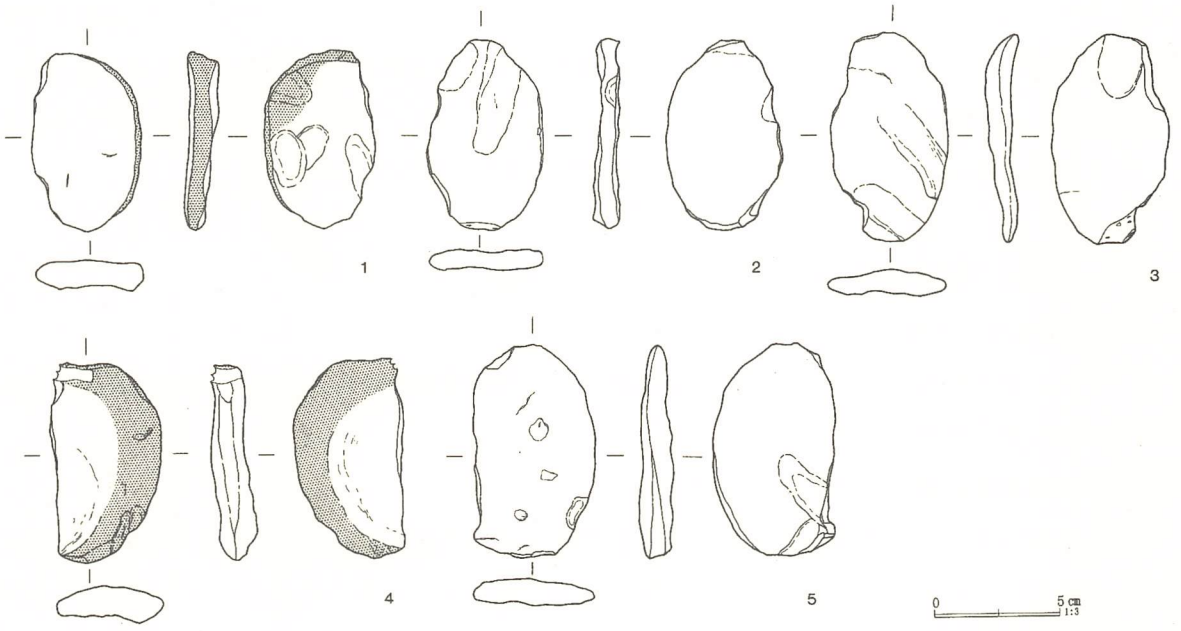
用途不明の土製品は、外堀外縁コーナーの屈曲部の地点から、５点全てが一ヶ所にほぼ重なったような状態で出土した（写真３）。土製品は、堀底直上レベルより出土していることから、古墳築造段階に伴う遺物と考えられる。また、土製品が出土した近くの範囲では土師器片の出土量が他より多い傾向がみられた。

写真3　Ｍ地区遺物出土状況



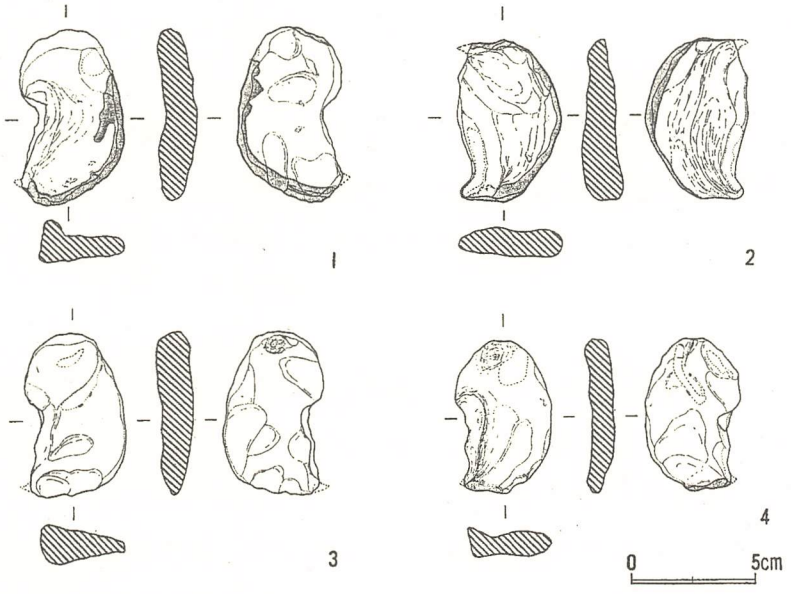
第3図　Ｍ地区外堀土層断面図

第4図　Ｍ地区外堀平面図及び遺物出土状況図



第5図　M地区出土遺物

第５図１～５は、何れも薄い板状の手捏土製品で、やや歪んだ半円形を呈している。調整は、両面とも指頭圧痕とナデによる。両面ともあまり丁寧な調整を施していないため、表裏・上下とも判別は難しい。弧を描く周縁部は、面取り状になるもの（１・２）と緩い稜を持つもの（３～５）がある。１・４には部分的に赤彩痕が認められる。２・３・５についても、摩滅が著しいため明言できないが、赤彩されていた可能性が考えられる。４から判断すると、赤彩されていない部分が未調整で、剥離した接合痕が明瞭であることから、他の土製品が貼付されていたと推測される。胎土には砂粒、小礫、赤色粒子を少量含む。焼成は良好で、色調は淡橙褐色を呈する。



第6図　昭和48年度出土土製品実測図

１は、長さ7.0×幅4.4×厚さ0.8～1.2cmである。２は、長さ7.6cm×幅4.6cm×厚さ0.6～1.1cmで、片面に接合痕が認められる。３は、長さ8.2cm×幅4.7cm×厚さ0.5～1.1cmで、下端にくの字状の窪みをもつ。４は、長さ7.9cm×幅4.4cm×厚さ1.1～1.5cmである。５は、長さ8.4cm×幅4.8cm×厚さ0.9～1.4cmで、下端にくの字状の窪みをもつ。

第６図は、昭和48年度調

査で中堤造出しの陸橋部から出土した土製品である（註２）。調査当時には神饌形埴輪とも呼ばれていたものである。中堤造出しの陸橋部からは、この土製品と一緒に人物埴輪や家形埴輪などの形象埴輪が多数出土しており、墓前祭祀を行った場所である可能性が高いとされている（註３）。この土製品は、他の製品の付属品ではないかと考えられていたが、今回出土した土製品とも比較すると、この土製品が４～５枚で一組となる単体の遺物である可能性が高い。

３　周堀に陸橋部を持つ前方後円（方）墳

（１）陸橋部を持つ主な前方後円（方）墳

以下には、史跡整備等に伴う発掘調査が実施され、周堀陸橋部の全体像をある程度把握できる前方後円（方）墳の事例をあげることにする。

埼玉県行田市瓦塚古墳（第７図左上）（註４）

稲荷山古墳の南西に位置する墳長73mで、前方部前面が剣菱形になると推測される前方後円墳である。昭和63年から平成３年度にかけて復原整備のための確認調査が実施された。墳頂部は未調査のため埋葬施設は不明であるが、出土した埴輪から６世紀前半と考えられている。

陸橋部は、外堀で２ヶ所検出された。造出し西側で検出された陸橋部は、上幅1.6～２m、下幅2.1～2.5mで、地山のロームを掘り残して作られていた。この陸橋部周辺からは、人物埴輪、家形埴輪、器財埴輪などの豊富な形象埴輪が出土し、墓前祭祀が執り行われていたことがわかった。また、前方部南の主軸からやや東寄りからも地山が掘り残された幅約２m、高さ0.4mの陸橋部が検出されている。調査の結果、西側の陸橋部と比較して不整形でもあることから、古墳築造時に外堀の掘削土を搬入するための道が、取り残されたものと考えられている（註５）。

埼玉県行田市将軍山古墳（第７図右上）（註６）

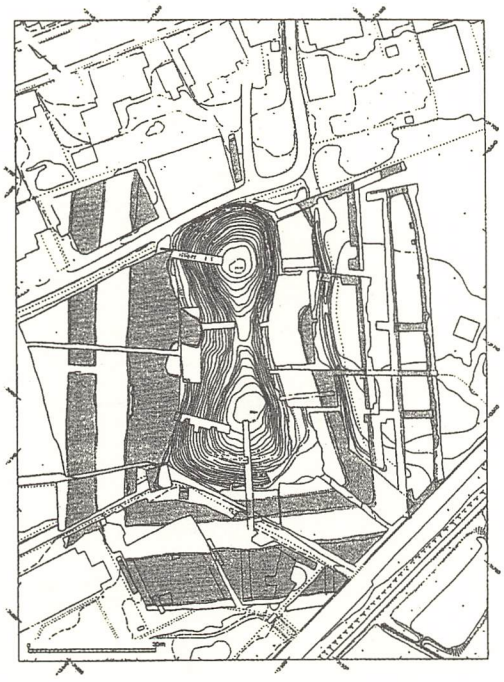
稲荷山古墳の南に位置する墳長90m、２段築成の前方後円墳である。平成３年から７年度にかけて復原整備のための確認調査が実施された。埋葬施設は、後円部から片袖型横穴式石室、前方部から木棺直葬の２基の主体部が検出された。石室内の出土遺物には、武器・武具、馬具、玉類に加え銅鋺３などがあり、築造時期は６世紀後半と考えられている。

周堀は二重の長方形を呈し、陸橋部が内堀と外堀にそれぞれ検出された。内堀陸橋部は、後円部の北から西にかけて15～20m間隔で４ヶ所検出されている。造出しの陸橋部は、造出し側に段差を持たず墳丘へ平坦に取り付いていた。また、前方部南東の中央からも陸橋部が検出されている。外堀では、後円部北側の中堤造出しのすぐ西から幅約２mの陸橋部が検出されている。

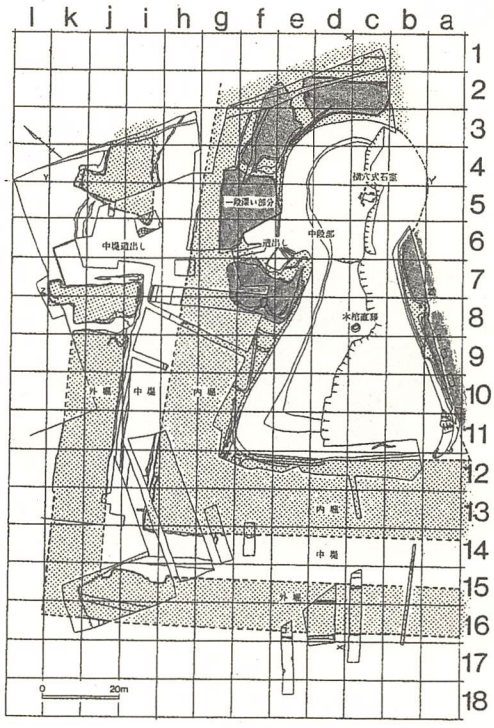
群馬県高崎市綿貫観音山古墳（第７図左下）

墳長97mで、前方部を北に向ける２段築成の前方後円墳である。埋葬施設は後円部下段に横穴式石室が構築され、獣帯鏡、金銅鈴付大帯、金銅装頭椎大刀、銀装刀子、銅水瓶、玉類など豪華な副葬品が出土した。築造時期は、６世紀後半と考えられている。

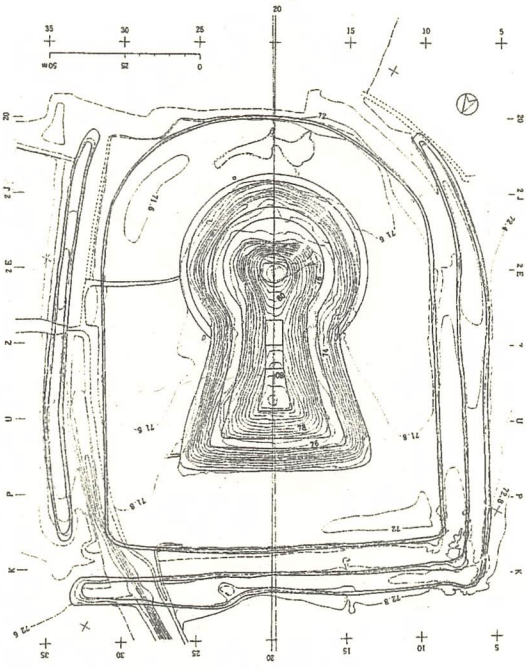
周堀は、二重の盾形を呈し、外堀に比べ内堀が広くなっている。外堀は、後円部南側の約100mにわたり途切れている。昭和51年度の調査結果から、外堀北東コーナーに陸橋部が存在すると考えられていた（註７）。しかし、その後の発掘調査により、底面が浅くなりブリッジ状を呈する堀底



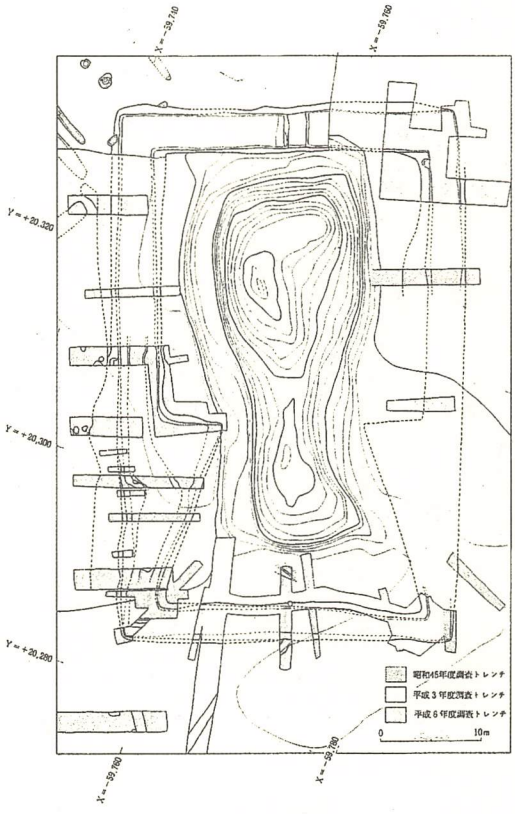
瓦塚古墳



将軍山古墳

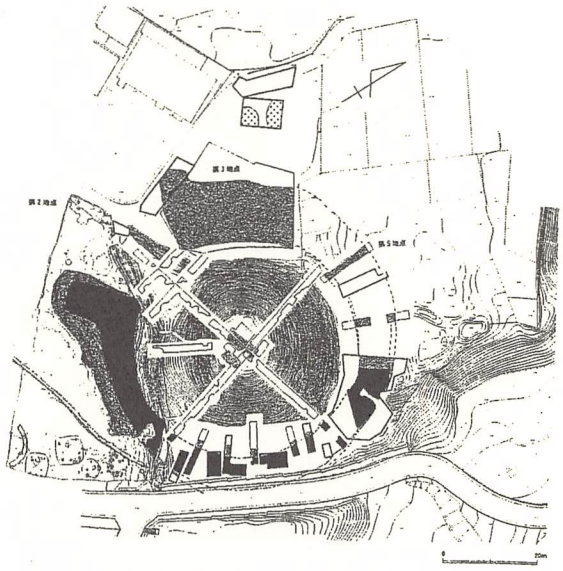


綿貫観音山古墳

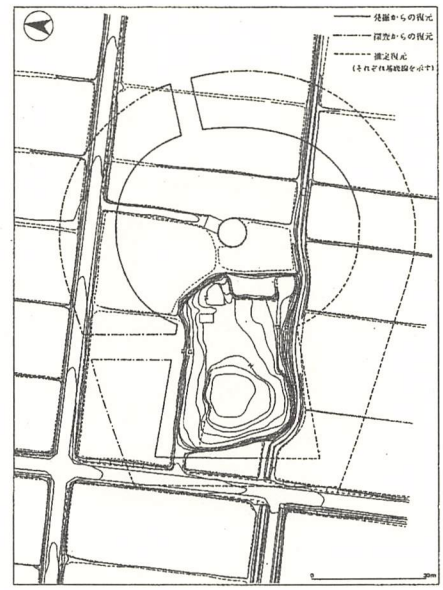


六孫王原古墳

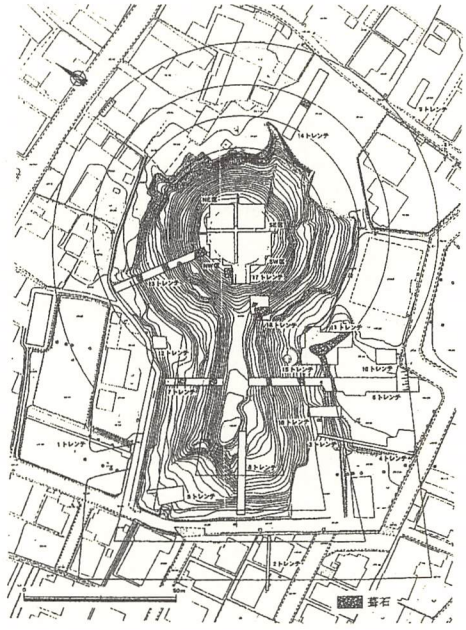
第7図　陸橋部をもつ主な前方後円(方)墳（1）



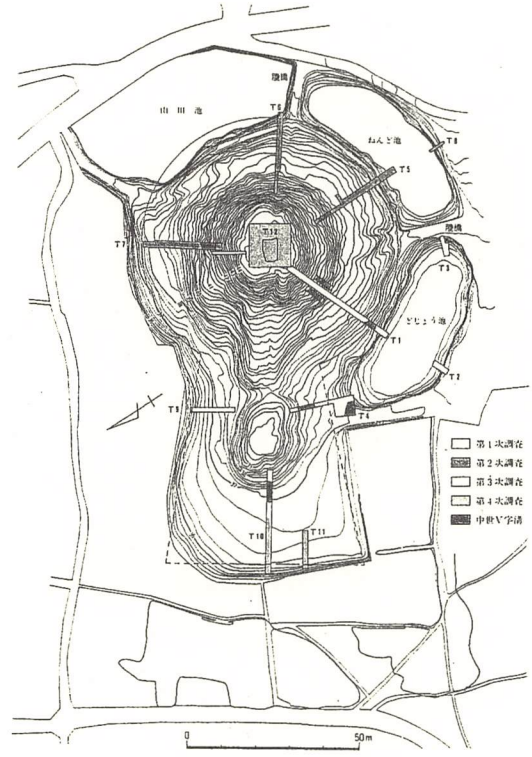
柊塚古墳



長塚古墳



昼飯大塚古墳



貝吹山古墳

第8図　陸橋部をもつ主な前方後円（方）墳（2）

が検出されたため、陸橋部の存在は否定された（註８）。８世紀代の須恵器がまとまって出土したことから、祭祀が行われていた可能性が指摘されている（註９）。

千葉県市原市六孫王原古墳（第７図右下）（註10）

姉崎古墳群中唯一の前方後方墳で、墳長は44.6mを測る。後方部の中腹にテラス状の平場があることから、２段築成の可能性がある。埋葬施設は、凝灰質砂岩截石積みの横穴式石室と推測されている。出土遺物には、金銅製馬具３、直刀１、鉄鏃などがあり、７世紀後半と考えられている。

周堀は、長辺52.5m、短辺35.0mの長方形を呈する。墳丘のほぼ主軸上にあたる後方部中央部に上幅約1.5m、下幅3.1mの陸橋部が検出されている。この陸橋部は、周堀壁中段に墳丘への取り付きがあることから、ブリッジとしての性格ではなく、築造企画にかかわる施設と考えられている（註11）。同様の陸橋部が付く前方後方墳としては、福島県原町市の桜井古墳がある（註12）。

埼玉県朝霞市柊塚古墳（第８図左上）（註13）

前方部を西に向ける墳長約66mの前方後円墳である。後円部はほぼ原形をとどめているが、前方部の大半が削平され遺存状態が悪い。後円部は、径約48m、高さが約8.5mを測る。発掘調査を実施していないため詳細は不明であるが、後円部墳頂のトレンチから、木炭槨と粘土槨と推測される２基の主体部が確認された。木炭槨の直上からは、内開きの扉を持つほぼ完形の家形埴輪と赤彩された土師器壺が出土した。これらの出土遺物から、築造時期は６世紀前半と考えられている。

周堀は古墳を全周せず、前方部の前面で途切れる形態で、幅約11mを測る。後円部周堀の墳丘主軸のやや北寄りと短軸南側から、周堀の外から内に向かうスロープが２ヶ所検出されている。埴輪の出土状況から、周堀両側に円筒埴輪列が存在していた可能性が高いと考えられている（註14）。

岐阜県大垣市長塚古墳（第８図右上）（註15）

昭和初期に粘土採掘のため後円部が削平され、前方部のみが残存している。平成２年度に範囲確認調査が実施され、その結果、墳長87mの前方後円墳であることが判明した。昭和４年の調査で、後円部から２基の竪穴式石室が検出された。東槨は、割竹形木棺を粘土で被覆した粘土槨で、西槨の詳細は不明である。出土遺物には、三角縁神獣鏡５、鍬形石、石釧、石製合子、玉類などがあり、時期は４世紀末と考えられている。

周堀は盾形を呈し、後円部の主軸からやや北寄りの部分とくびれ部北側の２ヶ所から陸橋部が検出されている。後円部側の陸橋部は、上幅約３m、下幅5.6mで、高さが0.4mであった。壁面に葺石を伴うが、周堀壁面には施されていなかった。くびれ部側の陸橋部は、上幅約４m、下幅約6.4m、高さが0.5mであった。壁面の幅1.3mに葺石を伴い、また、テラス部には５㎝前後の小礫がバラス状に敷かれていた。これらの陸橋部は、周堀を掘削した後に盛土したものではなく、墳丘築造当初から計画的に地山を掘り残して配置されたものであることが調査で判明している。

岐阜県大垣市昼飯大塚古墳（第８図左下）（註16）

墳長約150m、３段築成の前方後円墳である。埋葬施設は、同一墓壙内から主軸に平行して竪穴式石室と粘土槨の２基が検出された。石室の盗掘坑からは、滑石製石釧、滑石製模造品、玉類、鉄製品などが出土した。築造時期は、４世紀後半と考えられている。

周堀は、幅15～27mで、墳丘相似形を呈する。ボーリング調査等の結果から、前方部北側の中央

部に、長さ約16m、幅約９mの陸橋部が存在する可能性が高いと指摘されている。

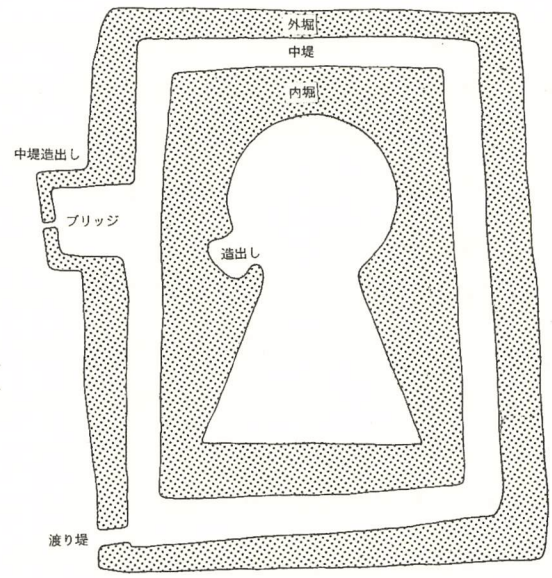
大阪府吹田市貝吹山古墳（第８図右下）（註17）

久米田古墳群に属する前方後円墳で、墳長は約130mである。墳丘は、16世紀頃に陣城として大きく削平されているため遺存状態が悪いが、後円部３段築成の、葺石を伴う古墳である。埋葬施設は、刳抜式石棺を納めた竪穴式石槨が検出された。盗掘にあっているため、遺物は銅鏡、碧玉製腕飾類、銅鏃、小札などの断片が出土しただけである。時期は、４世紀後半と考えられている。

周堀は、江戸時代以降にため池として利用されていたため一部改変されている。発掘調査の結果、後円部の東と西に現存する２ヶ所の陸橋部は、古墳築造時のもので、地山を削り出して作られていることが判明している。

（２）前方後円（方）墳の陸橋部（註18）**について**

古墳の外部施設の一つである周濠、周堀（註19）については、畿内の陵墓指定古墳などの大型古墳を中心に機能、性格について論じられている。白石太一郎は、「構築当初から農業用水としての役割りをはたしていたとは考え難い」とし、「灌漑王的性格を象徴するものであり」、「首長が豊かな水を保障するための呪的な機能をもつものであった」としている（註20）。一瀬和夫は、周濠の変遷を９段階に設定し、その出現から消失期までを考察している。その中で周濠の性格を「灌漑のための水を貯めたのではなく、隔絶・隔離のための呪的行為であった」としている（註21）。両者の見解では、古墳の周濠は従来言われてきた灌漑用としての機能ではなく、呪的なものであったということで一致をみている。



第9図　稲荷山古墳模式図

しかし、古墳の陸橋部については、堰堤、ブリッジ、土橋、渡り堤、渡り土手などのさまざまな名称で呼ばれてきており、近年その調査事例が増えているにも関わらず、その機能、性格を踏まえた議論が活発に行われてきたことがなかった。日本考古学事典（註22）で「ブリッジ」の項を引くと、「墳丘と濠の外とを結ぶいわゆる渡り土手も陸橋・土橋・ブリッジなどと呼ぶことがある。」とあり、古墳のどの部分に取り付くのか、墓前祭祀との関わり等の配置・機能・性格についてあまり考慮されてはおらず、調査担当者により各々の名称で報告されている状況がわかる。小円墳に関しては、白井久美子が全国のブリッジ付き円墳を集成し、配置・規模等から考察を加え、「埴輪、土器類を用いた葬送儀礼に係る行為の場」として「祭祀の道」として意味づけた（註23）。

そこで本節では、陸橋部の機能、性格等について若干の整理を試みたい。

1　畿内の大型古墳に見られる計画的に水を湛えた周濠に数ヶ所の陸橋部をもち、その配置に規則性は認められない。

2　形象埴輪や土器が多数出土し、墓前祭祀等の何らかの祭祀行為が行われた区域で、

造出しに取り付くものや、造出しを意識して計画的に配置される。また、群を構成する集団墓の中ではある程度の規則性が認められる。

3　被葬者埋葬における通路で、埋葬施設が設置される後円（方）部に取り付く。

4　古墳築造における堀を掘削し、盛土を墳丘に運搬するために設けられた作業用の仮設通路で、そのまま掘削されず掘り残されたもので、その配置には規則性が認められない。

1は、奈良県天理市行燈山古墳、同渋谷向山古墳などが挙げられる。2は、瓦塚古墳外堀西側の陸橋部で、従来から言われている「ブリッジ」である。3については、確証が困難であることから判別が難しいが、六孫王原古墳、長塚古墳後円部の陸橋部が相当すると推測できる。4は、稲荷山古墳南西の陸橋部、瓦塚古墳外堀南側の陸橋部、将軍山古墳内堀の陸橋部、綿貫観音山の例が挙げられる。現時点でそれぞれの呼称は、1が「堰堤」、3が「土橋」、4については「渡り土手・渡り堤」が相応しいのではないかと考える。今回例示した陸橋部の中でも、その性格・機能について不明な点がまだ多い。今後、陸橋部の類例の増加や、調査による詳細な遺物出土状況の検証等によりそれぞれの細分が可能になると考える。

4　おわりに

今まで古墳の調査といえば、埋葬施設のある墳丘本体の発掘調査が主体に行われてきた。稲荷山古墳の整備事業を通して感じたことは、今後も史跡整備等で多数の古墳の発掘調査が実施されると思うが、墳丘の外部施設である造出し、周堀（濠）なども加えた総合的な調査を実施すべきであると考える。そうすれば、今回は言及できなかったが、古墳の正面観、築造企画、築造方法、選地、墓前祭祀などの疑問を解決する糸口となるのではないだろうか。

なお、今回の概要報告で提示した遺構・遺物などの数値等は、平成17年度刊行予定の調査報告書をもって代えさせていただきたい。

註

1　宮昌之　1998　「《資料紹介》稲荷山古墳出土の須恵器－平成9年度発掘資料－」『調査研究報告』第11号　埼玉県立さきたま資料館

西口正純　2000　「稲荷山古墳確認調査の概要－平成9・10年度－」『調査研究報告』第13号　埼玉県立さきたま資料館

西口正純　2001　「稲荷山古墳保存整備事業－平成11年度　確認調査の概要と復原設計－」『調査研究報告』第14号　埼玉県立さきたま資料館

2　斎藤忠・柳田敏司ほか　1980　『埼玉稲荷山古墳』　埼玉県教育委員会

3　栗原文蔵・田部井功　1974　「稲荷山古墳・丸墓山古墳周堀発掘調査概要」『資料館報』No.5　埼玉県立さきたま資料館

4　杉崎茂樹ほか　1986　『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第四集　埼玉県教育委員会

若松良一ほか　1989　『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第七集　埼玉県教育委員会

若松良一ほか　1992　『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第八集　埼玉県

教育委員会

5　若松良一ほか　1992　『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第八集　埼玉県教育委員会

6　岡本健一　1997　『将軍山古墳』　埼玉県教育委員会

7　群馬県教育委員会　1982　『史跡　観音山古墳－保存修理事業報告書－』

8　金子智一ほか　1985　『綿貫遺跡』高崎市文化財調査報告書第47集　高崎市教育委員会

大塚初重・梅沢重昭ほか　1998　『綿貫観音山古墳Ⅰ　墳丘・埴輪編』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第242集　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

9　金子智一ほか　1985　『綿貫遺跡』高崎市文化財調査報告書第47集　高崎市教育委員会

10　中村恵次・沼沢豊・田中新史　1975　『古墳時代研究Ⅱ－千葉県市原市六孫王原古墳の調査－』　古墳時代研究会

半田堅三　1997　『姉崎六孫王原遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第58集　財団法人市原市文化財センター

11　市毛勲　1999　「市指定　六孫王原古墳について」『市原地方史研究』第19号　市原市教育委員会

12　原町市教育委員会　1998　『桜井古墳保存整備計画書』

13　照林敏郎　2001　『宮台遺跡第５・６地点発掘調査報告書－柊塚古墳確認調査報告書－』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集　朝霞市教育委員会

朝霞市教育委員会　2002　「遺跡が語る古代の朝霞」６（現地説明会資料）

14　齋藤欣延氏のご教示による。

15　中井正幸ほか　1993　『長塚古墳－範囲確認調査報告書－』大垣市埋蔵文化財調査報告書第３集　大垣市教育委員会

16　中井正幸ほか　1996～1999『昼飯大塚古墳Ⅰ～Ⅴ　範囲確認調査概要』大垣市教育委員会

大垣市教育委員会　1999「昼飯大塚古墳　第７次発掘調査　現地説明会資料」

17　吉井秀夫　1999　『久米田貝吹山古墳－第１～４次調査概報－』岸和田市文化財調査概要25　岸和田市教育委員会

18　本稿では、古墳に取り付く地山掘り残しの遺構を総称して陸橋部と呼ぶことにした。

19　従来よばれてきた呼称を踏襲し、「周濠」は古墳築造時から計画的に周囲に水を湛えたもの、「周堀」を古墳築造時には空堀であったもの、と定義する。

20　白石太一郎　1983　「古墳の周濠」『角田文衛博士古希記念　古代学叢論』平安博物館研究部

21　一瀬和夫　1992　「３－１　周濠」『古墳時代の研究』第７巻　古墳Ⅰ　墳丘と内部構造　雄山閣

22　田中琢・佐原真　2002　『日本考古学事典』三省堂

23　白井久美子　1983　「小規模古墳の一類型について－ブリッジ付き円墳の検討－」『古代』75・76合併号　早稲田大学考古学会

「武蔵国造の乱」はあったか
－６世紀前半以降の上野・武蔵地域の政治勢力の所在－

利　根　川　　章　彦

１　はじめに

『日本書紀』安閑天皇元年閏十二月是月条に、笠原直使主と同族小杵が武蔵国造の地位を争ったことが記されている。小杵は上毛野君小熊を頼んで使主を殺そうとしたので、使主は都に逃げて朝廷に訴えた。朝廷は使主を国造とし、小杵を殺した。使主はその返礼として、横渟・橘花・多氷・倉樔の四か所の屯倉を献上した、とされている。この年の干支は甲寅で、西暦 534年にあたる。この伝承は「武蔵国造の乱」あるいは「叛乱」として有名である（以下、必要のない限り、この伝承については「武蔵国造の乱」と記述する）。

戦前の考古学・歴史学では、神話・伝承と古墳を結びつけて考える傾向が顕著であり、全国的に見ても、古代の天皇・皇族あるいは神話に登場する神（人物？）を各地の古墳の被葬者に想定しようとする論著が多数見受けられた。ここから、自然のなりゆきとして「埼玉古墳群の被葬者＝武蔵国造一族」という考え方の図式ができあがり、1950～70年代においても埼玉古墳群と「武蔵国造の乱」を関連性の深いものとして考える説が考古学者から提示されることにつながった。その後の沈静化を経て、つい最近また、尾野善裕氏から、稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣の「辛亥年」を西暦531年に比定することにより、この考え方を再評価しようとする説が提示されている（註１）。

はたして、学問の現段階から考えて、『日本書紀』安閑紀の記事と実際の古墳群形成を直接的に関連するものとして考えることができるものであろうか。

本稿では、埼玉古墳群内の発掘調査によって知られるようなった土器類を中心とした出土資料および東京・埼玉・群馬の大型古墳の編年についての最近の研究動向から、『日本書紀』安閑紀に相当する時期、すなわち６世紀前半以降の政治勢力のありようについて考えてみようと思う。この問題については本来『日本書紀』安閑紀の読み方と組み合せて理解すべきであるが、紙数に余裕がないので、今回はできるだけ考古学的検討に焦点を絞ることとしたい。

２　埼玉古墳群と「武蔵国造の乱」に関する研究抄史

まず、本論に入る前に、過去の考古学研究の中で、埼玉古墳群や「武蔵国造の乱」がどのように取り扱われてきたか、簡単に記述しておく。ただし、この研究史整理は、すでに清水久男氏による詳細な論文が発表されているので（註２）、必要な範囲で記述するにとどめる。

かつて、甘粕健氏は、和島誠一氏と共著の『横浜市史』での論述、和島氏の『岩波講座日本歴史』掲載論文等の一連の業績（註３）を踏まえて、埼玉古墳群の成立時期に東京の多摩川下流域の有力古墳が衰退する現象から、南武蔵と北武蔵の政治勢力の交替が考えられるとし、この事件を反映するものとしてと考えた（註４）。大塚初重氏（註５）もこの説と同様の見解をとっている。これに

よって埼玉古墳群が武蔵国造笠原直の一族の歴代の奥津城であるという過去の想定が考古学的にも裏付けられるとする考え方が定着したと言える。その後、金井塚良一氏は、東松山市周辺の大型古墳の築造の動向と埼玉古墳群の成立を比較検討することによって、この事件の舞台を北武蔵内部と考え、比企地域と行田市周辺地域の政治勢力の争いであるとし、甘粕説を批判した（註６）。この1960～70年代の議論ののち、稲荷山古墳から出土した金錯銘鉄剣に雄略天皇と考えることができる「獲加多支鹵大王」と考えられる人名が記述されていたことが判明した。それ以後「武蔵国造の乱」を中心とした議論が後退する傾向が見られるようになった。

比較的最近になって、滝沢規朗氏がまとめた南北武蔵の大型古墳の築造動向からみた首長権力の変化に関する論文において、多摩川台古墳群の最近の調査成果による古墳時代後期の首長墓級前方後円墳の存在を位置付けようという考え方が示され（註７）、坂本和俊氏によって埼玉古墳群内に「武蔵国造笠原直使主」も「同族小杵」も葬られている想定がなされて（註８）、「武蔵国造の乱」と埼玉古墳群の関係についての考え方にも若干の変化が見受けられるようになった。

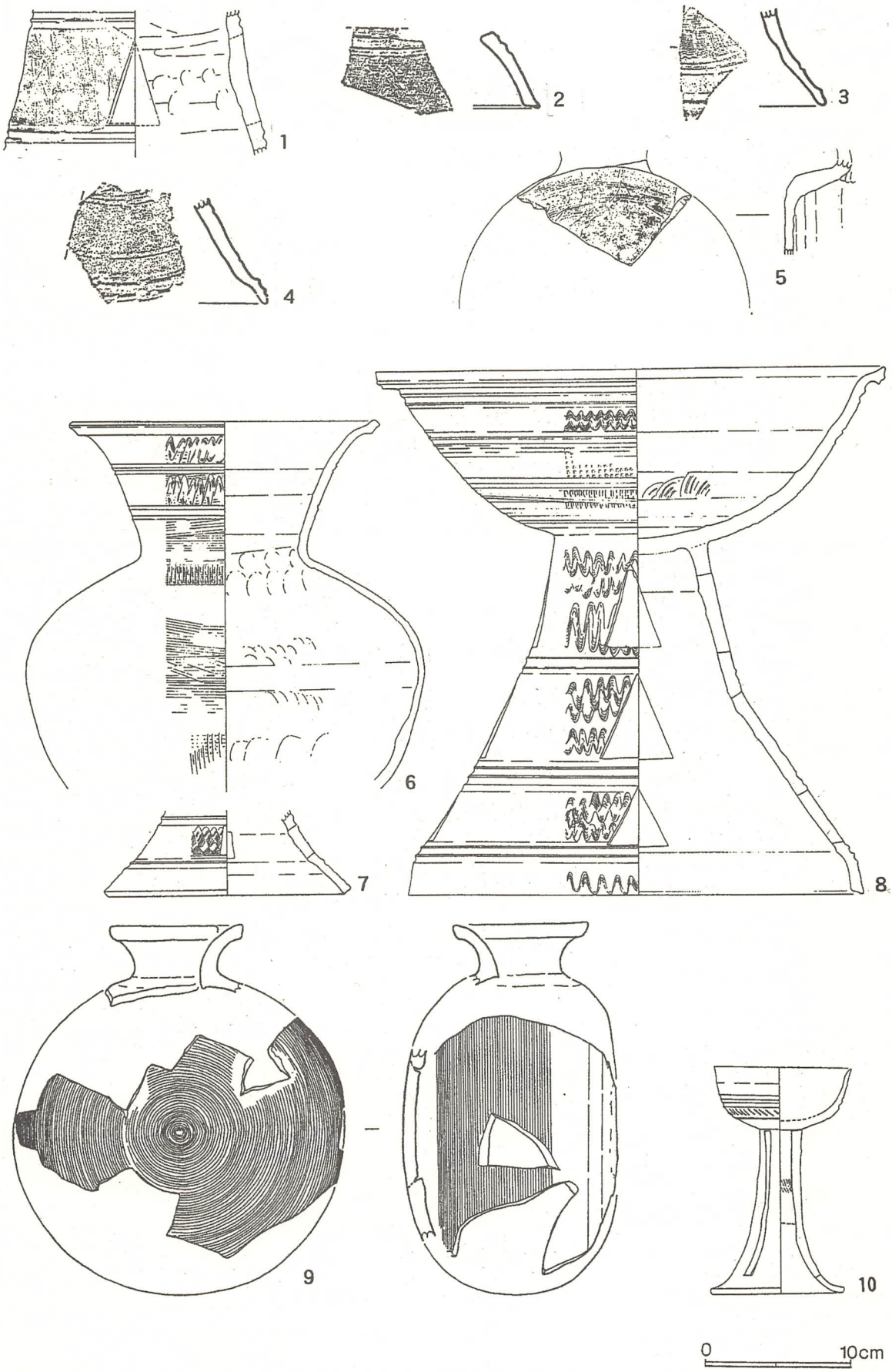
1990年代になって、日本列島全域の前方後円墳の調査研究を集大成した『前方後円墳集成』（以下『集成』と省略する）が刊行され、地域別の前方後円墳研究会も徐々に結成・活動開始という状況が生まれてきた。埼玉・東京・群馬でも古墳の規模や年代が最近の調査により変更されている場合もあるようなので、『集成』刊行時期以後の各地の古墳の検討を参考にして、現段階の見解に基づき「武蔵国造の乱」の時期の大型古墳の推移を考え直すことが必要となっている。

3　出土土器等から見た６世紀前半以降の埼玉古墳群

本章では、埼玉古墳群内の各大型古墳から出土した土器を中心とした遺物群の分析を手がかりに、埼玉古墳群中の大型古墳で６世紀前半以後に築造されたものの年代と築造順序を推定してみたい。土器を主に取り上げて古墳の年代を考える理由は、第一に、ほとんどの大型古墳で墳丘ないし周堀内で土師器・須恵器が出土しているため、古墳群中の古墳の相対年代を考える「ものさし」にするのに土器類が最も適切な資料であること、第二に、遺物の編年細分を試みた場合に、おそらく最も年代幅の小さい、言い換えれば、古墳の前後関係を確実に捉えることができるものは土器であろう、ということである。

稲荷山古墳については本誌前号で検討したが（註９）、ＴＫ47型式（古）段階併行期・猿投窯Ｈ－11型式期の須恵器群が出土している。年代としては、西暦 500年前後を考慮すべきであろうが、古墳に３つ埋葬施設が構築されたと仮定する限り、古墳の年代の上限は 470年頃と想定できる。

これに次ぐ時期の資料としては二子山古墳の資料（註10）があるが、ごくわずかな量の破片しかない。主に造出し付近で採集されたものである。壺・甕・高坏形器台・提瓶がある。高坏形器台は脚部片で、振幅が大きくピッチの短い櫛描波状文・三角形の透孔が特徴である。作りが丁寧であり、瓦塚古墳の器台よりもやや古い段階のものであろう。提瓶は体部の片側を平らに作り、直角に近い形態の肩をもつ。提瓶としては最も古い段階に属するもので、ＭＴ15型式段階とすることは許されよう。壺・甕も口縁部の作りがシャープで、頸部の沈線も鋭い。確実ではないが、ＭＴ15型式段階を中心として、それ以前のものも含むかもしれない。６世紀初頭前後以降の段階と考えておきたい。



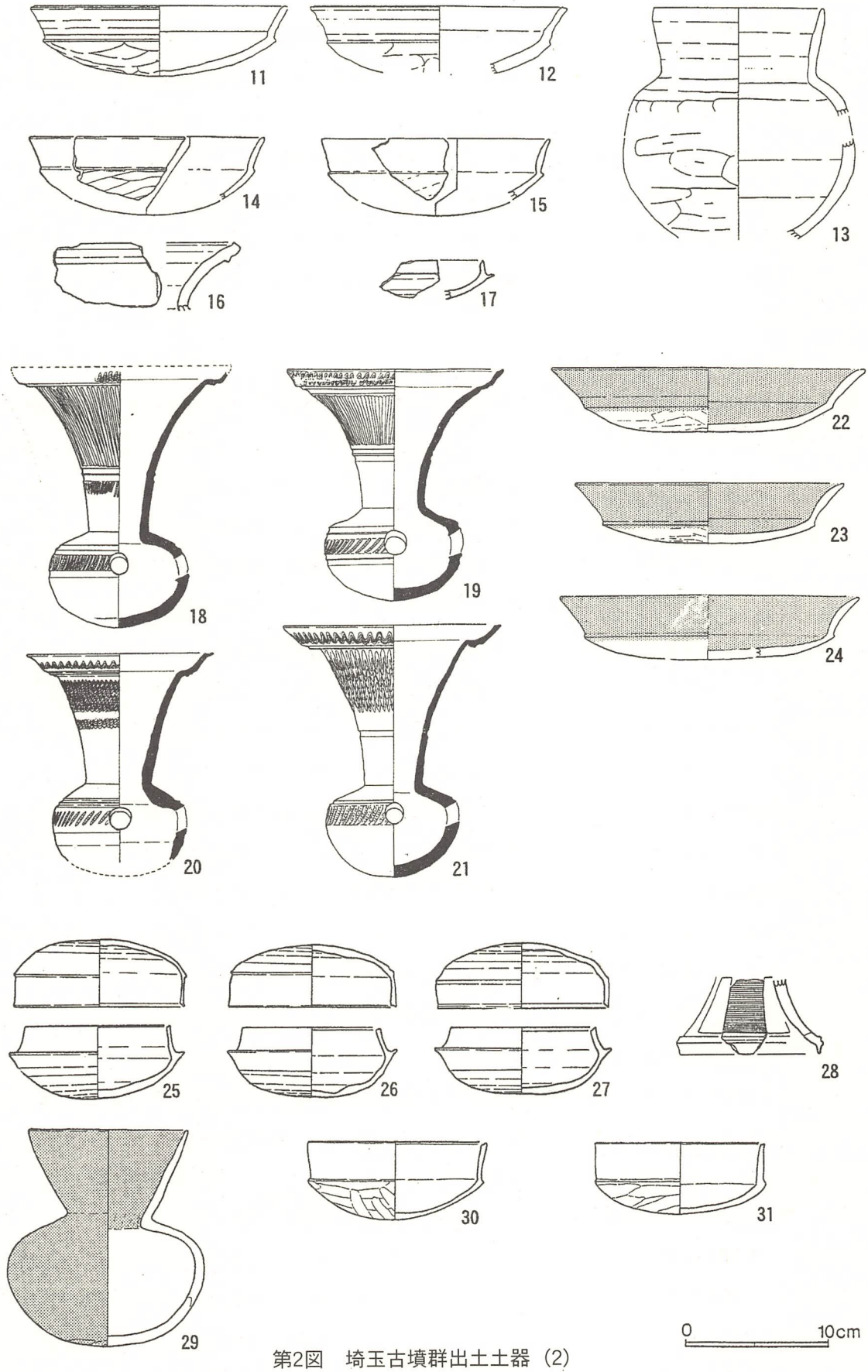
第1図　埼玉古墳群出土土器（1）
1～5　二子山古墳　6～10　瓦塚古墳

現在考えられている後続する時期の資料は瓦塚古墳の出土品であるが、丸墓山古墳出土土器（註11）について若干触れておこう。１点だけ、土師器坏の破片があるが、墳丘の出土品でなく、榛名山二ツ岳火山灰Ｈｒ－ＦＡと考えられる火山灰が含まれている墳丘下の旧地表面の下層からの出土であるため今回の図示から省いたが、口径13.6cmという大振りの器で、いわゆる「須恵器模倣坏」の最古段階によく出土する口縁部の立ち上がりが内湾気味になり、口唇部内面に沈線を持つものであるので、陶邑編年ＴＫ23～47型式期に相当するものであろう。Ｈｒ－ＦＡの降下年代の参考資料にはなるであろうが、丸墓山古墳が稲荷山古墳・二子山古墳より新しい時期になりそうだ、という程度の情報にはなっても、丸墓山古墳が６世紀のどの辺の時期まで下るのか、ここからは決定できない。６世紀第１四半期あるいは第２四半期とする説もあるが、それより新しい時期まで埋葬を継続していると見ることもできる。このことについては後述する。

次に最も多くの須恵器を出土した瓦塚古墳（註12）を考えてみよう。すでに詳細な検討をはたしている若松良一氏の論文（註13）によれば、須恵器は高坏型器台２点、無蓋高坏１点、提瓶１点、横瓶１点、脚付壺１点、小型及び中型甕（壺？）６点、大型甕３点、土師器は坏３点、長胴甕１点、坩１点が確認されている。このうち、中型壺と高坏型器台は組合せとして使用されたことが想定できるものである。若松氏はこれらの一群をＭＴ15型式（新）段階とした。しかし、この土器群のすべてが同一時期になるかどうかについては疑問があるので、器種別に検討する。

高坏型器台は、脚部に大きな三角形の透孔が３段透しに開く器形に復元されているであるが、口縁部直下の波状文は１段で、坏部もやや浅くなりつつある器形で、透孔は４段になる可能性が残されている。他の部位も含めると古い特徴を多く持つため、これをＭＴ15型式と考えることは正しいいと思う。しかし、問題は提瓶である。頸部直下が欠失しているため、つまみの形態が不明であるが、断面ナデ肩の胴部になっており、ＴＫ10型式以降になるものである。無蓋高坏も坏部下部に櫛歯刺突文があり、坏部形態自体も半球形風に作られるのは新しい特徴である。これもＴＫ10型式併行期に下るものであろう。土師器坏は、「小針型」あるいは「埼玉型」と呼ばれる地域性の強い土器であるが、埼玉古墳群内では、６世紀前半段階にはまだ出現していないようである（後述）。坩とされている土器も短頸壺の一種と考えうるもので、坏と同じように新しい時期の所産であろう。したがって、瓦塚古墳の土器群は一時期のものとは考えられず、２～３時期に分けることができる。最も古い時期がＭＴ15型式（新）段階の高坏型器台と中型壺等のやや大型の土器群、次にＴＫ10型式段階の無蓋高坏や提瓶、やや遅れて６世紀後半段階の土師器坏・短頸壺等となる。

これに後続する資料は、常識的には鉄砲山古墳の土器群（註14）であるはずだが、発掘区が狭く、供献土器が置かれやすい造出し付近をはずれた場所であるため、わずかな破片しかない。時期確定の困難な須恵器大型甕の破片を除外すると、図示した須恵器坏片１点、甕片１点、土師器坏片２点に限られる。無理を承知で検討する。須恵器坏は立ち上がりが低く、器高もあまり高くないもので、ＴＫ43～ 209型式に相当しそうなものである。また、土師器坏は２点とも口径の復元があまりあてにならない口縁部破片であるが、図よりももう少し開き、口縁部が寝る器形と考えられそうなものである。これも６世紀末～７世紀初頭あたりの年代になりそうなものである。これを土器供献時期の一段階と考えるならば、隣接する中の山古墳との関係を考慮して、鉄砲山古墳への埋葬年代の



第2図　埼玉古墳群出土土器（2）

11～13 瓦塚古墳　　14～17 鉄砲山古墳　　18～24 将軍山古墳

25～31 埼玉2号墳（梅塚古墳）

下限に近い時期と考えられるだろう。

次に、将軍山古墳の土器群（註15）を扱う。東京国立博物館に所蔵されている、横穴式石室内出土の須恵器無蓋高坏はＴＫ 209型式併行期まで下る可能性のあるものであり、追葬期の遺物として考えられるので、今回は取り上げない。平成４～７年度の周堀の調査で、須恵器は瓵４点以上、高坏３点以上、提瓶１点、有蓋長頸壺（台付？）１点、台付長頸壺１点、広口壺３点、甕４点、土師器は坏３点以上の出土が確認された。大部分が造出し付近で出土しているという。このうち、須恵器瓵は４点とも造出しと前方部墳丘の間の狭い場所からまとまって出土しているため、同時の供献土器と考えられる。また、土師器坏もほぼ同じ器形なので同時期のまとまりと考えられる。ここではこの２器種について取り上げておく。

まず、瓵であるが、４点とも頸部が最大規模に延びる段階に属し、ＴＫ43型式あるいはその直前段階、つまりＭＴ85型式あたりになると考えられる。ちなみに、将軍山古墳発掘調査報告書の岡本健一氏の分析はＴＫ43型式説をとっている（註16）。これらのもう一つの特徴は、口縁部を幅狭く作ることである。中村浩氏の大阪陶邑編年第Ⅱ型式第５段階（田辺編年ＴＫ43型式併行期）の土器群（註17）には数種類の瓵が図示されているが、ここでは口縁部幅広の瓵の方が主体となっている。口縁部幅狭の形態は第Ⅰ型式の後半段階からあり、特に頸部が延びて口縁部幅狭になるのはＴＫ10型式から普遍的となるようである。将軍山古墳の瓵は、頸部上半に櫛描波状文が施されるものと集合沈線文が施されるものがあるが、長頸で口縁部幅狭の形態で、口縁部にも波状文が施されている。古い特徴を多く残しながら長頸化する形態から考えるならば、ＴＫ43型式（第Ⅱ型式第５段階）に下る可能性を残しながらも、それよりは古い段階と考えることが可能である。したがって、ＭＴ85～ＴＫ43型式のあたり、６世紀後半でも古い段階と考えたい。

次に、土師器坏であるが、いずれもたいへん口径が大きく、扁平化している器形であり、口縁部外面と内面全体が赤彩される特徴から考えるならば、「比企型坏」のやや新しい段階の一類型として、７世紀初頭以降に下降する時期のものであると考えた方がよさそうである。

ゆえに、将軍山古墳の土器群にも、ＭＴ85型式段階に遡りそうな須恵器瓵から７世紀初頭段階の土師器坏まで、３段階程度の時間幅があることがわかる。

最後に、稲荷山古墳の南に所在していた小古墳群のうち、まとまった土器類を出土した埼玉２号墳（梅塚古墳）の資料（註18）に触れておきたい。この古墳には須恵器の蓋坏が３セット６点、土師器坏２点、土師器坩１点の合計９点は完形になるもので、もう１点須恵器有蓋高坏の脚部片がある。須恵器蓋坏はＴＫ47型式段階の範疇になりそうであるが、稲荷山古墳と比較するとわずかに新しいと思われる。土師器坏も完全な「須恵器模倣坏」になっており、より過渡的な半球形の形態に近い坏を含む稲荷山の土師器群よりわずかに新しい。坩の形態も口径が胴部径より小さくなり、和泉式後半から鬼高式初期にかけての形態となっている。西暦 500年を少し過ぎたころの年代とすることができよう。小古墳の中では埼玉３・４・６・７号墳からも「模倣坏」の出土が知られる。３・４号墳の坏は２号墳例と近似する形態を示すが、６・７号墳例は口縁部がわずかに外反気味に立ち上がる特徴が見受けられる。２号墳よりさらに下降する時期、すなわち６世紀前半代と考えてよかろう。小古墳中では５号墳のみに「小針型坏」または「埼玉型坏」と呼ばれる土器がある。小古墳

群の大半がおおむね6世紀前半代に築造されていたと考えてよければ、埼玉古墳群内では「小針型坏」は6世紀前半代には一般化していなかったか、まだ出現していなかったと考えることができる。この点を、瓦塚古墳出土の「小針型坏」を6世紀後半に下降させる傍証としておきたい。

以上の土器の分析からは、稲荷山古墳以後の古墳築造順序・年代は、愛宕山古墳が丸墓山古墳とほぼ同時期、奥の山古墳が瓦塚古墳とほぼ同時期と考えられそうなので、二子山(墳長 138m)［6世紀初頭前後］→丸墓山（径 105m）［6世紀第1四半期以降］・愛宕山（墳長53m）［6世紀前半］→瓦塚（墳長73m）［6世紀第2四半期～第3四半期］・奥の山（墳長69m）［6世紀半ば前後］→将軍山（墳長90m）［6世紀第3四半期～7世紀初頭］・鉄砲山(墳長 109m)［6世紀後半～7世紀初頭］ということになる。

本稿では、丸墓山古墳を6世紀前半の古い段階を中心とした時期に築造されたと考えておくが、この時期の古墳の埋葬施設は稲荷山古墳と同様の竪穴系埋葬施設と考えるのが常識的であるから、現在の墳頂部の広さから考えるならば、3～5基くらいの多くの埋葬施設が所在していた可能性がある。とすれば、埋葬施設1基あたり10年インターバルとして時間を見積もるならば、最大限50年にも及ぶ期間に亘って埋葬が継続していたとすることもできる。西暦 510年あたりが初葬なら、6世紀後半代まで埋葬時期の下限が下降することになり、瓦塚古墳の埋葬継続期間と大幅に重複することを考慮しなくてはならなくなる。3基30年だったとしても西暦 510～ 540年となり、 550年を射程に置いた時間帯の中には入ってくるであろう。同様に、稲荷山古墳と二子山古墳、瓦塚古墳と将軍山古墳・鉄砲山古墳の間にも重複期間を考慮する必要があることになる。

ともあれ、埼玉古墳群の古墳築造の動向からは、丸墓山古墳から瓦塚古墳に移行する時期である6世紀前半の新しい段階には古墳の規模の縮小が顕著となり、瓦塚古墳・奥の山古墳から将軍山古墳・鉄砲山古墳に移行する6世紀第3四半期段階には再び大型化するという、複雑な築造事情があることを考慮しなくてはならないようだ。

4　北武蔵地域・南武蔵地域・上野地域の大型古墳の動向

本章では、一旦埼玉古墳群を離れ、北武蔵諸地域、多摩川流域・鶴見川流域を中心とした南武蔵地域、上野地域の大型古墳の動向について考察しておきたい。これらの地域に関する古墳の編年及び歴史的考察は、坂本和俊氏（註19)、滝沢規朗氏（註20)、加部二生氏・橋本博文氏（註21)、若狭徹氏（註22）らの業績があり、かつての和島・甘粕・金井塚氏らの編年・年代論、歴史過程論を書き替えつつあると言うことができる。ここでは、西暦5世紀後半前後から6世紀後半のあたりの時期に限って触れておきたい。古墳の内容や築造時期については『集成』東北・関東編における武蔵・上野各地域の記述を中心として、それ以後の個々の論文・報告等を参考に述べることにする。

なお、この章では便宜上『集成』における古墳編年であるいわゆる「共通編年」と和田晴吾氏の古墳編年（註23）を使用することになるが、それぞれ「共通編年」「和田編年」と特記しておく。共通編年では7・8期が5世紀後半、9期が6世紀前半、10期が6世紀後半にあたり、和田編年では8・9期が5世紀後半、10期が6世紀前半、11期が6世紀後半におおむね対応する。

まず、児玉郡地域を考える。4～5世紀に中型円墳が数か所に散在していたこの地域には共通編年

		北武蔵				南武蔵	
	児玉郡周辺	行田市周辺	東松山市周辺	坂戸・川越市周辺	北足立郡域	多摩川下流域	多摩川中流域
1期	↑鶴巻4号墓■25 鷲山■60		山の根■54.8 塩3号■？28				
2期			諏訪山29号■50 塩1号■35 塩2号■29 天神山■57 諏訪山●61		塚本塚山■35+		
3期	物見塚○47 前山1号○35					宝来山●100	
4期	長坂聖天塚○50 前山2号○		A案 将軍塚●115+ 雷電山●84	三変稲荷神社□25	熊野神社○38 高稲荷●75 江川山○	亀甲山●104 新居里●72	砧中学校7号■65
5期	川輪聖天塚○38 金鑽神社○67					野毛大塚○82 尾山八幡塚○35	砧中学校4号○30 白井塚○36
6期	公卿塚○65 生野山将軍塚○60 志戸川○40				殿山○32	天慶塚○30	狛江経塚○35
7期	生野山9号○44 長沖14号○39 美里諏訪山●39	とやま●69 稲荷山●120 横塚山●38+	諏訪山33号○33		白鍬塚山○25	御岳山○40 尾山狐塚○30	狛江東塚○35
8期	千光寺●29	鎧塚●45.5 女塚●45.5 二子山●138	弁天塚●37 おくま山●62	どうまん塚○25 坂戸105号●40	一夜塚○50 柊塚●60	庵谷●54 浅間神社●60	狛江亀塚●40 狛江兜塚○38
FA 9期	生野山銚子塚●58 生野山16号●58 白岩銚子塚●46	丸墓山○102 永明寺●78 愛宕山●53 瓦塚●75	胄山古墳○92 秋葉山●45.5	西原●33 雷電塚●47		多摩川台2号●38	東稲荷塚○34
FP 10期	中新里諏訪山●42 秋山諏訪山●60 大仏二子塚●45 四十坂寅稲荷●54 小島二子塚●60 御手長山●50	鉄砲山●109 奥の山●70 将軍山●95 栢間天王山塚●107 真名板高山●104 中の山●79 小見真観寺●112	長塚●33 伊勢山●41 とうかん山●74 野原●35 B案 将軍塚●115+ 大塚1号●46	胴山●60 塚原3号●32 塚原1号●40 塚原2号●45 南大塚4号●36 牛塚●47	ひさご塚●41 三島神社●50	観音塚●43	飯田塚○30

● 前方後円墳
○ 円墳
■ 前方後方墳
□ 方墳

第3図　武蔵全域の大型古墳編年図（坂本和俊氏による）

7期末～8期初頭に帆立貝型古墳の美里諏訪山古墳（墳長39m）が築造される。それ以後には、本庄市・児玉町・美里町の境界の独立丘陵である生野山丘陵上に生野山銚子塚古墳（墳長58m）・生野山16号墳（墳長58m）の2基の中型前方後円墳が共通編年9期に相次いで築造されたと考えられている。生野山古墳群の中では、共通編年6期の生野山将軍塚古墳（径60m）、7期の生野山9号墳（径44m）の2基の中型円墳があり、一定の首長墓系列を形成していると考えることはできる。神川町域では共通編年9期に白岩銚子塚古墳（墳長46m）、9期から10期にかけて中新里諏訪山古墳（墳長42m）が築造される。やや小さめの中型前方後円墳であり、所在地から同じ勢力の築造した古墳とは考えない方がよいかもしれない。児玉町領域にはあまり大きな前方後円墳が目立たず、長沖古墳群中の墳長30mクラスの前方後円墳を除くと、共通編年10期築造と考えられる秋山諏訪山古墳（墳長60m）のみである。美里町域には、美里諏訪山古墳からやや時期のへだたりがあるが、大仏二子塚古墳（墳長45m）が共通編年10期の築造を想定されている。本庄市域は、古墳時代前期から中期にかけて径40～60mクラスの中型円墳・方墳が築造される地域であったが、共通編年10期に至って小島二子塚古墳（墳長60m）が築造される。

本庄市に隣接する大里郡岡部町域には、共通編年10期に属すると思われる帆立貝型古墳の四十坂寅稲荷古墳（墳長54m）・お手長山古墳（墳長60m）が造られ、その後、内出八幡塚古墳（円墳、

径33m）・前原愛宕山古墳（方墳、一辺37m）が７世紀前半代に築造されるという一系列の首長墓群がある。

児玉地域では特別に傑出した首長墓群がなく、共通編年９～10期に各地に墳長60mクラスまたはそれに近い規模の首長墓が単独に近い状態で形成される。岡部町域は６世紀後半以降というかなり新しい段階に首長墓系列が形成されるが、あまり強い勢力と評価することはできない。

その他の大里地域では、小型前方後円墳がいくつか存在する。たとえば、熊谷市西部にはＢ種ヨコハケの円筒埴輪片を出土して共通編年８期に相当すると考えられる前方後円墳の横塚山古墳（墳長38m以上）がある。埼玉古墳群の所在する行田市域に近い熊谷市北部の中条には、まだ古墳群の実態が十分明らかではないが、帆立貝型古墳がやや多く存在していたことがわかりつつある。鎧塚古墳（墳長44m）は２か所の墓前祭祀跡がＴＫ 208～23型式相当の須恵器高坏形器台を中心としたものなので５世紀後半～末頃の共通編年８期の古墳である。ほとんど隣接区域にあった女塚１号墳（墳長46m）はヨコハケを残す円筒埴輪を含んだ多量の円筒埴輪・形象埴輪を出土しており、やはり８期の古墳として評価されている。南河原村域にも、Ｂ種ヨコハケの円筒埴輪片を出土したとやま古墳（墳長69m）が７期の古墳と考えられている。この４基の古墳はむしろ行田市周辺地域にあるものとして位置付けられる。年代の関係としてはむしろ稲荷山古墳に先行するか同時期と考えてよいであろう。

埼玉古墳群以外の古墳としては行田市周辺で取り上げられるものがどのくらいあるのであろうか。行田市の北東に隣接する羽生市域には大型前方後円墳がいくつか存在する。羽生古墳群の毘沙門山古墳（墳長63m）があるが、横穴式石室の巨石が知られていることから共通編年10期相当と考えてよかろう。東の利根川近くの村君古墳群には永明寺古墳（墳長78m）がある。甲冑・鉄鏃・馬具などから６世紀前半あたり、共通編年９期の古墳とされている。さらにやや下流の加須市域の大越古墳群・樋遣川古墳群にはあまり傑出した古墳がなく、鶴ヶ塚古墳（径30m）、御室神社古墳（径40m）、宮西塚古墳が有力視できるものであろう。元荒川水系の星川・野通川沿いの埼玉古墳群より下流域になる菖蒲町域には共通編年10期後半の栢間天王山塚古墳（墳長 107m）を中心とした栢間古墳群がある。夫婦塚古墳（墳長45m）・東浦古墳（墳長58m）もあるが、細かな時期はわからない。少し上流の位置の小沼耕地１号墳（墳長39m）は帆立貝形古墳であり、やはり10期に属する。行田市より南の吹上町域にも中規模な古墳がいくつかある。三島神社古墳は60mクラスの前方後円墳と考えられ、共通編年10期の古墳であろうが、細かな内容は不明である。

もう少し埼玉古墳群に近い地域にも大型古墳が多い。埼玉より東に少し離れた行田市真名板には、関東造盆地運動のために３m埋没しているため正確な墳長がわからないが、墳長 120m以上はあるだろうと考えられている真名板高山古墳がある。共通編年10期の古墳であろう。埼玉より北に離れた区域の行田市小見には小見真観寺古墳（墳長 107m）がある。方頭大刀・頭椎大刀・銅鋺からは共通10期でもやや新しい段階に属する。この古墳の近傍には虚空蔵山古墳（墳長40～50m？）という10期の前方後円墳があるが、前方部しか存在せず、正確な規模は不明である。埼玉将軍山古墳からわずか 500m程東には若王子古墳（墳長95m）があった。この古墳も共通編年10期（新）段階であろう。埼玉古墳群のすぐ北東側の隣接台地上には若小玉古墳群があり、９～10期に相当する

三方塚古墳（墳長58m）という前方後円墳の所在が判明している。それ以外に愛宕山古墳・荒神山古墳という２基の前方後円墳の所在伝承がある。７世紀前半～中葉段階に下る若小玉八幡山古墳（円墳、径80m）・地蔵塚古墳（方墳、一辺25m）のあたりの時期の方がより有力になる古墳群と考えるべきではなかろうか。

行田市周辺とは荒川本流を隔てて西側になる、比企地域を見ておこう。この地域では、児玉地域と同様に前期古墳の卓越が著しいが、それと対照的に５世紀段階にはほとんど有力な古墳が見当らない。東松山市域で最大の前方後円墳である野本将軍塚古墳（墳長 115m以上）の位置付けが最大の問題となる。前方部の墳丘下に弥生時代末～古墳時代初頭の住居跡らしい遺構の断面が観察されたことがあるため、金井塚氏の指摘（註24）のような５世紀後半～６世紀前半の古墳と考えるよりは４世紀後半～５世紀前半と考えるべきであろう。なお、坂本和俊氏は共通編年４～５期説と10期説を紹介するが、基本的には古いと認識しているようである（註25）。それ以外の古墳を以下に触れていく。共通編年７期には、高坂台地の諏訪山古墳群内の諏訪山33号墳（径33m）が築造される。中規模の円墳であるが、短甲を出土し、首長墓の一群として考えうるという。８期には、北比企丘陵の三千塚古墳群中に弁天塚古墳（墳長37m）、松山台地におくま山古墳（墳長62m）の２基の帆立貝形古墳が築造される。９期には胄山古墳（径92m）のような大型円墳、９～10期には三千塚古墳群に秋葉塚古墳（墳長38m）・長塚古墳（墳長33m）、胄山古墳の近傍にとうかん山古墳（墳長74m）が築造され、首長墓系列が形成される。さらに10期には江南町野原古墳（墳長35m）、熊谷市伊勢山古墳（墳長41m）、大里町大塚１号墳（墳長37m）がある。この地域においても、胄山古墳→とうかん山古墳の系列以外は特に見るべきものがない。

埼玉県南部・西部にあたる北足立・入間地域ではどうであろうか。北足立地域では、共通編年７期前後にさいたま市域南部の白鍬古墳群に径20～30m代の中規模の円墳が数基あるようであるが、ここには今のところ前方後円墳は確認されていない。朝霞市域には共通編年８期末頃の大型円墳である一夜塚古墳（径50m）、９期の古い段階と考えられる前方後円墳の柊塚古墳（墳長60m）がある。桶川市域には10期に属する川田谷ひさご塚古墳（墳長41m）がある。ここでも傑出した大型古墳は限られている。

入間では、坂戸市域に中規模前方後円墳の系列が認められる。共通編年８期後半の入西石塚古墳（坂戸 105号墳、墳長40m）が古く、９期後半の雷電塚古墳（墳長47m）、10期の胴山古墳（墳長63m）という一群は埼玉県南部としては最も有力な勢力であろう。この近傍では勝呂神社古墳（径55m）、浅羽野１号墳（土屋神社古墳、径50m）、成願寺２号墳（径50m）のような大型円墳もあるが、いずれも神社の社殿が乗っており詳細な調査が行われていない。また、三福寺２号墳（塚の越古墳、墳長30m）は10期前半の小型前方後円墳である。さらに、坂戸市から毛呂山町にかけて分布する塚原・大類（苦林）古墳群には、塚原１号墳（墳長44m）・塚原２号墳（墳長40m）・塚原３号墳（墳長30m）の３基の前方後円墳が共通編年10期に属すると考えられ、大類１号墳（観音塚古墳、墳長24m）は時期不明、大類２号墳（墳長30m）が９期である。

川越市域では、共通編年８期に、鏡・挂甲・馬具等多くの副葬品を出土したどうまん塚古墳（径25m）が中規模円墳ながら首長墓的な古墳である。それ以後、帆立貝形古墳の西原古墳(墳長33m)

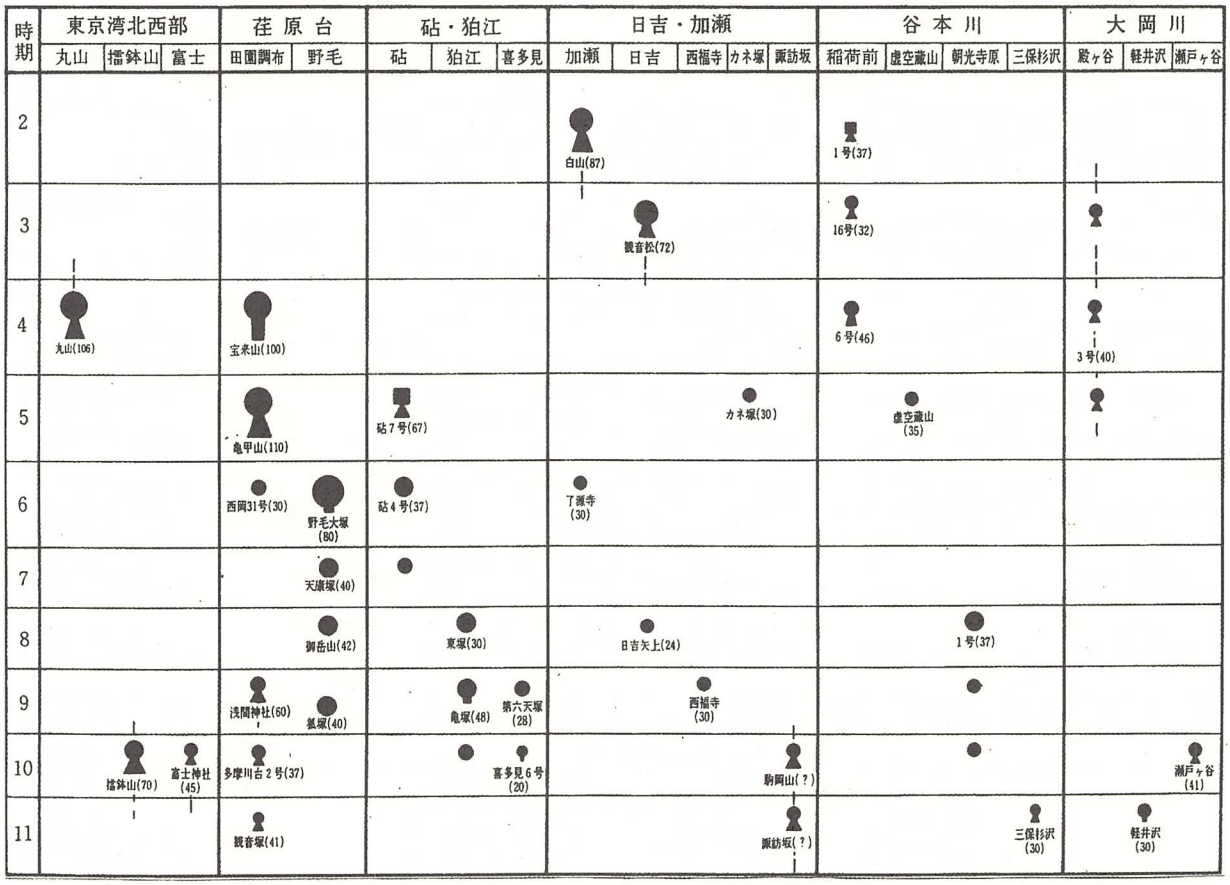
が９期、前方後円墳の牛塚古墳（墳長47m）が10期末頃とされているが、時期不詳の大型古墳が仙波古墳群内に多く存在する。特に、慈眼堂古墳（墳長53m）は大きいため前方後円墳と考えられており、愛宕山古墳（径45m）・浅間山古墳（径38m）もやや規模の大きな円墳である。10期には南大塚古墳群にも４号墳（墳長36m）のような中型前方後円墳もある。

南武蔵地域を考えてみよう。多摩川下流域から触れることにする。近年の調査により、数々の事実が明らかになりつつある大田区多摩川台古墳群とその周辺では、多摩川台１号墳と２号墳が横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳（墳長38m）であったことが周堀の調査で明らかになった。周堀から須恵器蓋8坏・瓹・高坏・長頸壺・甕・提瓶・横瓶、土師器坏等が出土しており、ＭＴ85～ＴＫ43型式に属するとされている。蓋坏に新しい要素が認められることから、ＴＫ43型式（新）段階と考えられており、「570～590年頃」と見積もられている（註26）。しかし、『集成』東北・関東編の今井堯氏はこの古墳を共通編年９期としている。この須恵器の時期を追葬期と見ているようである。滝沢規朗氏も同様に和田編年10期に位置付けている。小稿ではこの見解に従っておく。

また、中流域に位置する世田谷区野毛大塚古墳も調査の結果墳長82mの帆立貝式古墳であることがわかった。埋葬施設の近傍に供献土器と思われる粗製の土師器高坏が出土しているが、和泉式に相当するものであり、多量の石製模造品・短甲等の出土品も持ち、５世紀前半～中葉くらいの時期と考えられるようになった（註27）。

これら以外の古墳も含めて、概観してみよう。古墳時代前期～中期前半については多摩川台古墳群に首長墓系列がたどれるが、野毛大塚古墳以降世田谷区野毛古墳群に移動するようである。和田編年７期（共通編年６期）に天慶塚古墳（径40m）、８期（共通編年７期）に御岳山古墳（径42m）、９期に尾上狐塚古墳（径30m）と、やや規模の大きい円墳の系列が続く。和田編年９期（共通編年８期）に多摩川台で前方後円墳が復活し、庵谷古墳（墳長54m）・浅間神社古墳（墳長60m）が築造される。それに続いて、10期（共通編年９期）に多摩川台２号墳（旧１・２号墳、墳長38m）、11期（共通編年10期）に観音塚古墳（墳長43m）という形で中規模前方後円墳として首長墓系列を維持している。多摩川中流域の狛江市域付近では和田編年８期に東塚古墳（円墳、径35m）、９期（共通編年８期）に狛江亀塚古墳（帆立貝形古墳、墳長40m）・狛江兜塚古墳（円墳、径38m）、共通編年９期に東稲荷塚古墳（円墳、径34m）・慶元寺１号墳（円墳、径30m）、共通編年10期に飯田塚古墳（円墳、径30m）という30～40mクラスの中規模古墳による首長墓系列が維持されている。都内の他地域では、港区芝丸山古墳（墳長 106m）は一時後期初頭と言われていたが、最近は前期古墳と考えられている。上野台地上の台東区摺鉢山古墳（墳長70m）は周囲に数基の古墳群を形成していると言われ、円筒埴輪の出土が確認されていることから共通編年８～10期とされる。文京区富士神社古墳（墳長45m）も同様である。東京都域は規模の縮小傾向があるものの、首長墓系列が維持されている、と考えてよいだろう。

神奈川県域を見てみよう。前期段階に白山古墳（墳長87m）・観音松古墳（墳長72m）という大型古墳を築造していた川崎市域の日吉・加瀬古墳群とその周辺の地域では和田編年８期に日吉矢上古墳（円墳、径24m）、同９期に西福寺古墳（径30m）、10～11期に規模不明の前方後円墳である、駒岡山古墳・諏訪坂古墳があるのみで、前期に比較すると著しく弱体化している。横浜市域で



第4図　南武蔵の大型古墳編年図（滝沢規朗氏による）

は港北区域の稲荷前古墳群・朝光寺原古墳群とその周辺地域でも後期段階は群集墳や横穴墓群の築造が主となってしまう。和田編年８期の朝光寺原１号墳（径37m）以降、朝光寺原古墳群は径20m以下の古墳のみになってしまい、前方後円墳は和田編年11期の三保杉沢古墳（墳長28m）のような小規模なもののみである。また、大岡川流域のグループでは前期段階の殿ヶ谷古墳群の中型前方後円墳の系列を除くと、和田編年10期の瀬戸ヶ谷古墳（墳長41m）・11期の軽井沢古墳（墳長30m）の２基の前方後円墳を指摘できるのみである。

最後に、上野地域に触れる。共通編年７期以降の大型前方後円墳による首長墓系列が認められる小地域は、実に９ないし10地域に達する。したがって、それをこれまでのように記述する紙数はもはやないのでおおよそをまとめる。中期前半に東日本最大規模の天神山古墳を築造した太田市付近の勢力は50mを越えるクラスの古墳をほとんど造らなくなる。代わって、蛇川上流域で共通編年７期に太田鶴山古墳（墳長 104m）・鳥山亀山古墳（墳長58m）、８期に鳥崇神社古墳（墳長70m）が造られる。蛇川下流域には７期に米沢二ツ山古墳（墳長73m）、９期に東矢島観音山古墳（墳長99m）・割地山古墳（墳長 110m）、10期に九合村57号墳（墳長95m）・九合村60号墳（墳長111m）・沢野村 105号墳（墳長55m）が造られる。粕川流域の伊勢崎市・赤堀町周辺地域では７期に丸塚山古墳（墳長81m）、９期に上武士天神山古墳（墳長127m）、10期に五目牛二子山古墳（墳長109m）が造られる。荒砥川流域の前橋市東部地域には、８期の今井神社古墳（墳長71m）の後、９期に中二子古墳（墳長 108m）・前二子古墳（墳長93m）・後二子古墳（墳長82m）が相

	西毛地区									東毛地区							
	鏑川流域（甘楽）	鮎川・神流川流域（緑野・多胡）	碓氷川流域（碓氷）	吾妻川流域（吾妻）	榛名山東南麓（群馬）	井野川流域（群馬）	烏川流域（片岡）	広瀬川流域 烏川下流域（那波）	荒砥川流域（勢多）	利根川上流域（利根）	粕川流域（佐位西部）	早川流域（佐位東部）	石田川・蛇川下流域（新田南部）	蛇川上流域（新田北部）	蛭川流域（山田南部）	矢場川流域（山田東部）	利根川下流域（邑楽西部）	渡良瀬川下流域（邑楽東部）
1期								川井稲荷山●43										
2期						元島名将軍塚■90		前橋八幡山■130	堤東2号■25 荒砥中山A1号■15		薬蔵寺裏山■40		頼母子※？ 富沢7号■28	寺山■60 屋敷内B1号■28 太田八幡山●84		矢場鶴巻山■43 藤本観音山■117	古海松塚■66	西岡神社※？
3期	北山茶臼山西■28 北山茶臼山○20	三本木○？ 堀之内CK－2号■31 堀之内DK－4号■？			本郷大塚○45 行幸田山A－1号□25		乗附長坂○40	前橋天神山●129 軍配山○40 下郷10号■42 下郷天神塚●102					富沢5号□27 朝子塚●124			矢場薬師塚●80		
4期	恩行寺裏山○40	神田○？				下滝御伊勢山○40 柴崎蟹沢○？	浅間山●172 大鶴巻●123 長者屋敷天王山●65 大山○60	文珠山○50 山王大塚○44 箱石朝倉2号□33○20	西堀※20				別所茶臼山●165				亀の子山●？	
5期	神明塚●75	十二天塚北□23 十二天塚□37×27 白石稲荷山●140	下間仁田経塚○30 剣崎天神山○30				下佐野茶臼山○58		上細井稲荷山○25		御富士山●125				女体山○84 太田天神山●210		古海天神山●44	
6期			長瀞西○25				三島塚○30	梨ノ木○44			赤堀茶臼山●59						寄木戸無名※？	
7期			長谷津向山●58		大小路山●？	岩鼻二子山●115			猫見塚●25		剛志村50号●33 丸塚山●81		米沢二ツ山●73～74 中原●56	太田鶴山●104 鳥山亀山●58			古海松塚11号●32 新福寺西之原●35 長柄神社○？	
8期		宗永寺東裏●30 七輿山●146	若田大塚○30 上並榎稲荷山●122 流敵塚●20 平塚●105	石ノ塔○17 机○8	井出二子山●108 遠見山●70 保渡田八幡塚●102 保渡田薬師塚●105	不動山●94 菩賢寺東○20	小鶴巻●88 大応寺弁天山●64	広瀬鶴巻塚●86	今井神社●71	川場村6号●51	磯十二所●35		沢野村63号○40	鳥禁神社●70	焼山●48		古海原前1号○30 古海松塚1号●47	
9期	鬼塚○20 富岡5号○30 御三社●44 高瀬行人塚●49	堀之内FK－1号●31 戸塚神社●64	篠瀬二子塚●78	四戸1号○10	東町□6 王山●72 桃井高塚●65 王河原山●60	栗崎飯王山●27	姥山○30	亀塚山○50 上陽18号○56 上陽24号○25	中二子●108 正円寺●73 前二子●93 後二子●82 阿久山●44 大黒塚●46	鏡石沢口M－1○7号●20 三峰神社裏○10	上武士天神山●127 轟山A号●36 洞山●26 鏡手塚●28	兵庫塚●？	東矢島観音山●99 割地山●110		亀山京塚●22	塚廻り4号●23 塚廻り3号●24 塚廻り2号●24 塚廻り1号●26	原前3号●30	天神二子●58
10期	笹森稲荷●106 太子堂塚●58 桐淵双子塚●51 堂山稲荷●47	白石二子山●66 萩原塚●42 諏訪神社●52 山名伊勢塚●31	八幡二子塚●67 八幡観音塚●96		総社二子山●90 穂積稲荷山●90	浜尻天王山●58 綿貫観音山●97 五霊神社●60	漆山●62 石原稲荷山●？	広瀬長山●52 不二山●50 前橋二子山●104 大屋敷金冠塚●103 ●52 上両家二子山●90	オブ塚●35 桂萱大塚●57 木瀬村10号●？ 丑子塚●49 木瀬村1号●60		雷電山●56 三郷村91号●73 荷鞍山●80 五目牛二子山●109	下谷A号●57 小角田前2号●91 上淵名雙児山●90 雷電神社跡●50	九合村57号●95 九合村60号●111 沢野村105号●55	二ツ山2号●45 二ツ山1号●74 西山●34	吉沢庚申塚●50 毛里田八幡山●33		新福寺観音山●60 新福寺八幡山●47 赤岩堂山●95	道明山●36 舟山●66 筑波山●54
10期以降		多胡薬師塚○25	二軒茶屋○8		南下E号□17 愛宕山□56 宝塔山□54 蛇穴山□39		安楽寺□20		小稲荷6号○30 中塚○38	政所京塚○？ 糸之瀬6号○10	祝堂○30 赤堀村39号□19		沢野村102号○？	北山○22	縦穴山□30			

●前方後円墳　■前方後方墳　○円墳　□方墳　※墳形不明

第5図　上野地域の大型古墳編年図（加部二生・橋本博文氏による）

次いで築造されるが、10期には急速に規模縮小する。前期に 100m級の古墳を３世代に亘って築造した広瀬川流域では、８期に広瀬鶴巻塚古墳（墳長86m）で前方後円墳が復活し、10期に前橋二子山古墳（墳長104m）・大屋敷古墳（墳長 103m）・上両家二子山古墳（墳長90m）が継続する。７期に岩鼻二子山古墳（墳長 115m）を築く井野川流域では、８期に不動山古墳（墳長94m）、10期に綿貫観音山古墳（墳長90m）がある。８期に井出二子山（墳長 108m）・保渡田八幡山（墳長 102m）・保渡田薬師塚（墳長 105m）の保渡田三古墳が築造される榛名山東南麓地域は９期に王山古墳（墳長72m）、10期以降に総社二子山古墳（墳長90m）以下の総社古墳群が形成される。碓氷川流域の高崎市西部・安中市域では、８期に上並榎稲荷山古墳（墳長 122m）・平塚古墳（墳長 105m）、９期に梁瀬二子塚古墳（墳長78m）、10期に八幡観音塚古墳（墳長96m）が造られる。中期に白石稲荷山古墳（墳長 140m）を築造する藤岡市域では８期ないし９期に七輿山古墳（墳長146m）、９期に戸塚神社古墳（墳長64m）、10期に白石二子山古墳（墳長66m）・諏訪神社古墳（墳長52m）を築造する。他にも３か所で10期のみに首長墓系列が見られる。

上野地域では共通編年８期と９期の境に大きな画期があり、10期とそれ以降の間にも画期がある。すなわち、西暦 500年前後と西暦 600年前後が画期である。

5　「武蔵国造」の乱の時期の政治勢力の動向について

前章の分析を経て、ここでは武蔵から上野にかけての各地の大型古墳の築造の推移から考えられる政治的状況・動向を具体的にいくつか指摘しておこう。

これまでの行論で明らかになったのは、大型古墳築造の動向から見る限り北武蔵・南武蔵・上野のすべての地域で画期となるのは、共通編年８期と９期の境、つまり５世紀末葉から６世紀初頭頃、および10期とそれ以後の境、６世紀末葉から７世紀初頭頃であり、細部で見れば多少年代の前後する場合もある、ということである。大型前方後円墳が最大規模になるのは、埼玉古墳群では共通編年９期前半、６世紀以降の上野でも共通編年９期初頭頃、同じく５世紀後半以降の南武蔵では８期である。この画期において武蔵地域・上野地域双方ともそれなりの政治勢力の動揺や退転・交替、つまり首長墓系列としての大型古墳群の築造停止・断絶現象が見てとれるが、６世紀前半から中葉の時期、つまり共通編年９期後半にはあまり大きな変動がない、ということである。

これらの動向を『日本書紀』安閑天皇元年閏十二月是月条に記されている事件に沿って理解できるであろうか。いわゆる「武蔵国造の乱」では、小杵が殺されることになっている。大型古墳が寿陵の原則にもとづいて築造されているとして、小杵本人の墓は大型前方後円墳であったかもしれないが、首長本人を失い、国造職への就任の途を断たれた一族は、その後急速に勢力を失うことになるであろう。とすれば、一連の古墳が築かれた場所で、小杵の後裔首長層が被葬者集団となる古墳群は、その次の世代、つまり６世紀後半代のやや古い段階以降に築かれた古墳が中小規模に転落していなければならない。しかし、埼玉古墳群においては、この段階に築造された可能性の高い古墳である鉄砲山古墳・将軍山古墳のいずれも、90～ 100mクラスの規模を維持しており、古墳群内で、小杵以降の首長層を想定することは無理がある。唯一、坂本和俊氏のように埼玉古墳群内の細かな古墳の規模の変転をそのまま笠原直使主と同族小杵に対応させるという解釈のみにより可能に

なるとはいえるが、これはむしろ特定首長墓系列の古墳群における家族や同族の関係をより複雑に考えることになり、無理な解釈と言わざるをえない。従来どおりの解釈にもとづいて、多摩川流域で考えるにしても、共通編年９期の多摩川台２号墳より、その後の時期の観音塚古墳の方がかえって規模を大きくしており、これも小杵以降の首長層と想定することはできない。虚心に考えれば、この条件に該当する古墳や古墳群は武蔵地域のどこにも見当らないことになる。考古学的に見る限り、「武蔵国造の乱」は虚構である、と考えざるをえない。

6　おわりに

本稿はあくまでも考古学的に「武蔵国造の乱」を考えてみたものである。大型古墳の動向から見た武蔵地域と上野地域の古墳時代政治勢力のありようからは、６世紀前半の時期に「武蔵国造の乱」を想定できるような大規模な政治的変動は見いだすことができず、むしろ５世紀末葉から６世紀初頭頃、および６世紀末葉から７世紀初頭頃の２時期に関東全域あるいは全国規模といってもよい大変動があったことを想定することができる。

大型古墳築造の動向が古代史上の事実の反映があると考えるならば、今後は「武蔵国造の乱」自体が史実であるというよりは虚構に近いものとして取り扱わざるをえないのではなかろうか。そして、実際には本稿で明らかにした２時期の変動期に日本古代の国政史上の画期を求めるべきであろうが、どういう制度の創設や退転に関わるかは検討を要する。別稿を期したいと思う。

註

（１）尾野善裕　1998　「中・後期古墳時代暦年代観の再検討」『第６回東海考古学フォーラム岐阜大会　土器・墓が語る　美濃の独自性～弥生から古墳へ～』　東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会　所収

尾野善裕　2001　「中・後期古墳時代暦年代再論－いわゆる〈武蔵国造の乱〉をめぐって－」『久保和士君追悼考古論文集』　久保和士君追悼考古論文集刊行会　所収

（２）清水久男　1994　「『武蔵国造の乱』への招待」『武蔵国造の乱』（特別展図録）　大田区立郷土博物館　所収

（３）和島誠一・甘粕　健　1958　「武蔵の争乱と屯倉の設置」『横浜市史』第１巻　所収

和島誠一　1962　「古墳文化の変質」『岩波講座日本歴史２　古代２』（旧版）　岩波書店　所収

（４）甘粕　健　1970　「武蔵国造の反乱」『古代の日本　７　関東』（旧版）　角川書店　所収

（５）大塚初重　1970　「東国古墳の成立」『古代の日本　７　関東』（旧版）　角川書店　所収

（６）金井塚良一　1979　「野本将軍塚古墳の謎－武蔵国造の争乱と北武蔵最大の前方後円墳の築造時期－」『歴史読本』５月号　新人物往来社　所収

（７）滝沢規朗　1992　「武蔵における首長墓の変遷」『東京考古』10　東京考古談話会

（８）坂本和俊　1996　「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』６　群馬土器観会

（９）利根川章彦　2002　「稲荷山古墳の築造年代に関する覚書」『調査研究報告』第15号　埼玉県立さきたま資料館

(10) 若松良一　1992　『埼玉古墳群発掘調査報告書第８集　二子山古墳・瓦塚古墳』　埼玉県教育委員会
(11) 田中正夫　1989　「史跡埼玉古墳群保存修理報告　丸墓山古墳保存修理事業の報告」『調査研究報告』第２号　埼玉県立さきたま資料館
(12) 若松良一（註10）文献
　　杉崎茂樹　1986　『埼玉古墳群発掘調査報告書第４集　瓦塚古墳』　埼玉県教育委員会
　　若松良一他　1989　『埼玉古墳群発掘調査報告書第７集　奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』　埼玉県教育委員会
(13) 若松良一　1990　「瓦塚古墳の調査から　造り出し出土の供献土器について」『調査研究報告』第３号　埼玉県立さきたま資料館
(14) 杉崎茂樹　1985　『埼玉古墳群発掘調査報告書第２集　鉄砲山古墳』　埼玉県教育委員会
(15) 岡本健一　1997　『将軍山古墳』　埼玉県教育委員会
(16) 岡本健一　1997　「Ⅴ　確認調査のまとめ　５　土器」『将軍山古墳』　埼玉県教育委員会　所収
(17) 中村　浩　1980　『陶邑Ⅰ』　大阪府教育委員会
　　中村　浩　2000　『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』　芙蓉書房
(18) 杉崎茂樹　1988　『埼玉古墳群発掘調査報告書第６集　丸墓山古墳・埼玉１～７号墳・将軍山古墳』　埼玉県教育委員会
(19) 坂本和俊　1996　「武蔵の前方後円墳」『第１回東北・関東前方後円墳研究会　東北・関東における前方後円墳の編年と画期　発表要旨資料』　東北・関東前方後円墳研究会
(20) 滝沢規朗（註７）文献
(21) 加部二生・橋本博文　1996　「上野の前方後円墳」『第１回東北・関東前方後円墳研究会　東北・関東における前方後円墳の編年と画期　発表要旨資料』　東北・関東前方後円墳研究会
(22) 若狭　徹　2002　「古墳時代の地域経営－上毛野クルマ地域の3～5世紀－」『考古学研究』第49巻　第２号（通巻 194号）考古学研究会
(23) 和田晴吾　1987　「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第２号(通巻134号)考古学研究会
(24) 金井塚良一（註６）文献
(25) 坂本和俊（註８）（註19）文献
(26) 野本孝明　1993　「多摩川下流域左岸の後期首長墓の変遷について」『多摩川台古墳群発掘調査報告書Ⅱ－第1・2・7・8・9号墳の範囲確認調査－』　大田区教育委員会
(27) 寺田良喜他　1999　『野毛大塚古墳』　世田谷区教育委員会　野毛大塚古墳調査会

職人の笊と農家副業の笊

－流通の違いに焦点をあてた製造法の比較－

服部　武

はじめに

私はここ数年、埼玉県南部の竹細工について調査してきた。そこで興味を惹かれたのは、「職人」が生産する竹細工とともに、農家が副業で生産するものが併存していたことであった。

（1）職人が生産して直売する笊

いわゆる「職人」と呼ばれる専業の業者による生産は、県内全域で広範に分布していた。このような生産では、職人が住むムラを中心とした地域が市場となり、そこで用いる生活用具や農業用などの各種竹製品を職人個人やそれに弟子や家族を加えた程度の規模で作っていた。この場合、製品は職人自らの手で直売されているのが一般的で、市などで売られる例もあるが、私が確認できた昭和初期ころの県南部の事例では、店売りが主であった。

「職人」よる生産の場合、同じムラに何十軒もの同業者がいることはなく、近接するいくつかのムラに点在する同業者が集まって「太子講」などを組織し、年に１回から数回集まって技術向上のための祈願を行い親睦を深めるとともに、製品の価格を定めた「法度書き」などを作りお互いの競合をさけていた。

（2）農家が副業で生産し流通過程を通す笊

私が調査した埼玉県南部の川口市赤山周辺の地域[註1]と昭和60年代に内野達矢氏が調査した県南西部の所沢市上安松[註2]では、農家の副業による竹細工の生産が行われていた。両地区での竹細工生産は昭和50年代後半で終了しているが、明治44年頃には川口赤山周辺では100軒、所沢上安松では70軒の農家が副業として竹細工の生産を行っていたという記録が残っている。

両地区における竹細工生産にはいくつかの共通点がある。以下にそれをあげる。

①市場が生産地の外にあった。川口赤山の場合には東京市街地、所沢上安松の場合には東京府下三多摩地区が主要な市場となっていた。

②「職人」のように多種多様の竹製品を生産するのではなく、家によって米揚げ笊専門であったり、味噌濾笊専門であったりというように、単品種の生産に特化していた。特に両地域とも米揚げ笊の生産をする家が多く、それぞれ「赤山笊」「安松笊」という名称で市場に流通していた。

③両地区とも数軒の産地問屋があり、製品を独占的に購入する権利をもっていた。また、両地区ともに産地問屋の中に、地域に竹細工を教えた「職人」の子孫といわれる家があり、産地問屋の出自として「職人」の存在が語られていた。

④職人の場合と異なり、ひとつのムラの中に数十軒の同業を営む家があったが、冬期に限定された農家の副業であり、また売り先も決まっていたためか、生産者同士で太子講のような組織を作って

集まることはなかった。

⑤短期間の副業であるため、1軒あたりの年間生産量は米揚げ笊で30枚程度といったものであるが、地域全体で同種の製品を作るため大量の製品ができ、「埼玉新報」という新聞の明治44年と明治45年の記事によれば明治44年の年間の産額が川口赤山では4千円、所沢上安松では1万1千5百円にのぼっていた。明治45年ころの国会議員の平均的な賃金が年2千円程度であったことを考えると、地域において経済的に重要な意味をもっていたことが伺われる[註3]。

このように川口赤山と所沢上安松での竹細工生産は、いわゆる「問屋制家内工業」的な生産が竹細工でも行われていた事例として興味深いものである。

また、川口赤山の笊生産地域に隣接した蕨市では、明治末か大正始めといわれる時期には、それ以前から副業で竹細工生産をしていた農家2軒により、工場生産的な要素の強い大笊パイスケが作られるようになった。

さらに昭和20年代後半には、所沢上安松の産地問屋2軒を流通の中心として、越生町など県内数カ所でステカゴあるいはカケナガシなどと呼ばれる梱包用の籠が生産されたが、ここでは材料加工の機械化が進められていた。

このように、川口赤山と所沢上安松両地域とその周辺では、通常の職人による竹細工生産ともにそれとは異なる点の多い竹細工生産の事例が見られた。これらの事例は、伝統的な手工業という印象が強い竹細工も、産業社会の発展過程では多様な展開を見せたという資料として貴重なものであると思われる。

第1項　笊の比較

(1) 調査の動機

今回の報告は、職人が作って直売する笊と、農家の副業によって生産され産地問屋などの流通過程を経て販売される笊とを比較することが主題である。

このような主題に関心をもった発端は、数年前に県西部の入間郡越生町在住の竹細工職人長谷重行氏から、農家が副業で作り産地問屋に卸す安松の笊は氏のような職人が作って直売する笊と違い流通コストがかかるので、その分製造コストを節約しているというお話を伺ったことにある。

当時、私は東京の竹製品の卸問屋籠平商店と市川商店のご教示で初めて川口の「赤山笊」の存在を知り、赤山笊の産地問屋であった田中家を紹介していただいて調査を始めたばかりであった。また、昭和60年ころに内野達矢氏が調査した「安松笊」の生産形態や流通形態[註4]が、「赤山笊」の事例と共通する点が多いことに気づき、すでに安松笊と赤山笊の現物を見てはいたものの、それらの笊が以前に見てきた職人の製作による笊と製造原価等が異なるか否かという点にまでは関心が及んでいなかった。

長谷氏にお話を伺った後、改めて長谷氏の作った笊と安松の笊を比べてみると確かに竹籤の皮と内肉の使い方に違いがあることが分かった。ただ残念なことに私の乏しい笊製作技術に関する知識では、両者の違いを詳細に比較できないもどかしさを感じた。そこで、発想を転換し現役の職人である長谷氏に実地に安松笊をはじめとするいくつかの笊を見ていただき、その相違点を記録してみ

ようと考えたのが今回の試みである。

（2）調査に協力頂いた職人長谷重行氏のプロフィール

今回、調査に協力していただいた長谷重行氏は大正15年の生まれで、父親の代からの竹細工職人である。父親の長平氏（明治26年生）は、高麗（現在の日高市）で竹細工職人をしていた叔父に弟子入りした。高麗の親方は背負い籠などを作る大物師であったという。しかし、この親方が早くに亡くなってしまったので、次に深谷の石川という職人に弟子入りした。深谷の職人は笊などの小物や熊手などを作っていたという。このような経緯から長谷家に伝わっている技術は、大物については高麗周辺の技術で、小物については深谷周辺の技術であるという。父親が越生に帰って独立してからは、ずっと店売りで商売をしてきた。重行氏の竹細工技術は父親から習ったものである。

長谷氏は今日まで越生周辺で使われる各種の笊籠を作ってこられ、その一部は県立博物館をはじめとするいくつかの博物館施設でも資料として活用させていただいている。また、先に述べたような職人としての手作りの竹細工生産のみでなく、昭和28年から昭和43年にかけてはステカゴの生産に携わってきた経験ももたれている。ステカゴは、野菜等の出荷に使われる使い捨ての籠で、埼玉では所沢安松の問屋が中心となって県内各地の職人に作らせ、東京の三鷹や練馬の農協などに出荷していた。この籠は職人の手作りではなく、竹剥ぎの機械を使った材料加工と農家の副業による編み作業で作られていた。最も機械化がすすんだ籠であるとともに使い捨てのため材料を節約して合理的かつ廉価に作られた籠である。このように多様な竹細工生産に携わっってきた長谷氏は、職人として技の研鑽に努めてきたとともに、流通を通す竹製品の合理化された作り方にも理解と豊富な知識を持ち、今回の調査で協力を仰ぐには最適の指導者であるといえる。

（3）比較する笊について

今回、比較した米揚げ笊は、職人の笊は長谷氏が作ったもので、農家の副業によるものは安松笊である。笊の寸法はほぼ等しいものを選び、長谷氏の笊（以下「越生の笊」と表記）が直径30cm、高さ18cmで、安松の笊は直径31cm、高さ18cmである。

資料はいずれも埼玉県立博物館の館有品で、昭和50年と昭和51年に埼玉県内各地の竹細工を比較する資料としての目的をもって、特に「仕様が特別なものでなく標準的なものであること」に注意を払って収集されている。このように、客観的な比較を行うためには最適な資料であることから、今回特にお願いし調査させて頂いた。

越生の笊

安松の笊

（4）笊編みの工程

今回は笊の製作工程の順に比較を行った。笊はいずれも底部に網代編みを使った「網代底」の笊であった。比較は笊編みの工程順に見ていった。笊の工程は便宜上次のように大別した。

①網代編み　　笊の底部の中心の網代部分を編む工程。

②七廻り　　四角い網代編みの部分に籤を回して編み、底部を円形に形作っていく工程。籤をだいたい七周廻すのでこの呼び名がある。

③敷編み　　七廻りの周囲の部分に竹を廻して笊の底の外周部分を編む工程。

④腰立て　　平面である笊の底の周辺部を立体的に立ち上げていく工程。

⑤横編み　　立ち上げた笊の立ての籤に横の籤を隙間なく編み込み、編み上げていく工程。

⑥縁巻き　　笊の開口部を閉じる工程。

⑦親骨を入れる　　補強のための太い竹を入れる工程（今回の事例では敷から編み込んでいる）。

（5）越生の笊と安松の笊の比較

①網代編み

a. 網代の組み方

網代は「縦の籤」を縦横に組んで編む。組み合わせる籤が縦横６本ずつであれば「六手」といった呼び方をする。編み方には六手、七手、七手半、七手半八手崩し、八手、九手などのバリエーションがある。

＜越生の笊＞八手（ヤテ）で編まれている。縦の籤は「三枚縦」といって３枚（皮１枚・内肉２枚）に剥がれている。これを６組（皮６枚・内肉１２枚）作り、このうち皮６枚と内肉１０枚を使って網代を編んでいる。内肉の籤は、２枚あまるが捨てている。

＜安松の笊＞九手（ココノテ）で編んでいる。網代は皮４枚・内肉１４枚で組んでいる。このような籤の組み方の場合、越生のように「三枚縦」に竹を剥いで籤を組んだのでは、皮の籤の枚数に対し内肉の枚数が足りなくなってしまう。越生のものより大きめの竹を使って３枚以上に剥いだうえで、一枚の笊で籤の組み合わせを使い切るのではなく、同じ笊を何枚も作って内肉の籤を蓄えている。

b. 一本縦（イッポンタテ）の取り方

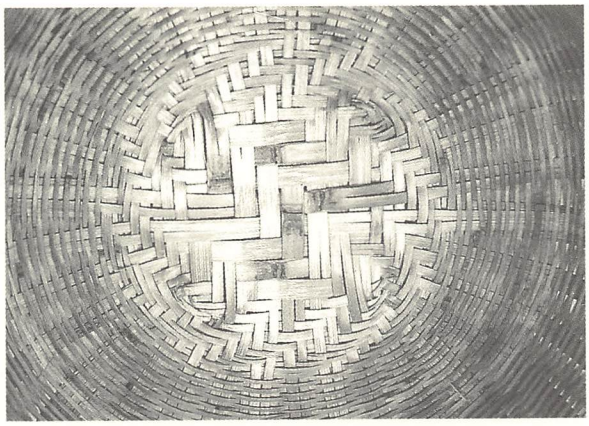
網代を組んだ籤は、七廻りや平編みの籤を廻すときの縦の籤になる。縦の籤の本数は奇数でなければならないが、単純に網代を組んだ場合の本数は必ず偶数になるので、どこかで縦の籤を奇数にする工夫がなされている。これを一本縦という。

＜越生の笊＞網代編みの隅の七廻りのはじめの部分を一本縦にしている。籤は内肉の籤で弱いので、七廻りの後の敷編みの部分から縦の籤を２本接ぎ当てて補強している。

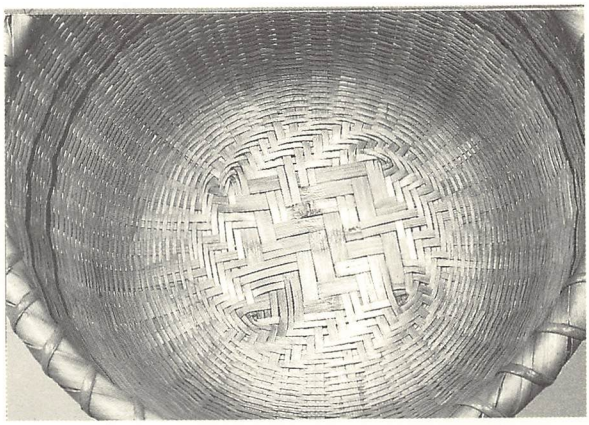
＜安松の笊＞組み始めから２列目の皮の籤を途中から２本に裂き、その内の１本を一本縦にしている。一本縦の籤は皮の籤で補強はせずに１本のまま縦の籤として使っている。

②七廻り

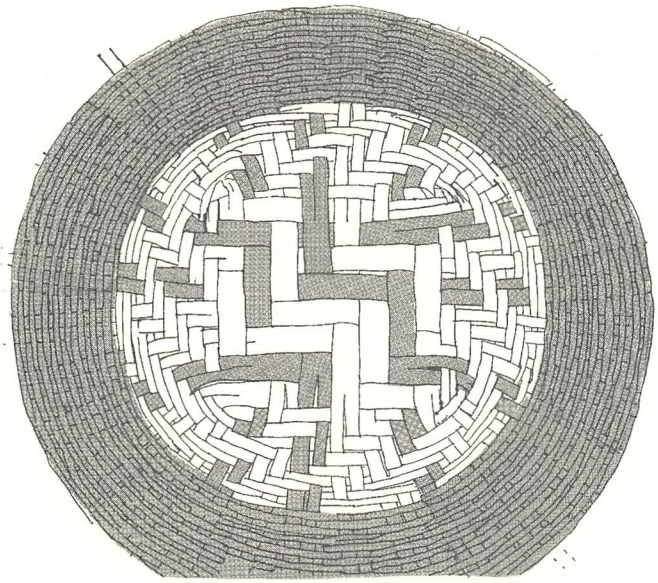
＜越生の笊＞七廻りと次の敷編みで一組の竹を２枚に剥がして使っている。七廻りは内肉の籤で編み、その外周の敷の部分で皮の籤を使っている。最初の３周はモト（竹の根元）部分の幅広の籤を使い網代の四隅で捻って廻り、４周めから幅の狭い籤で廻る。このようにすると籤の間隔が詰まり、



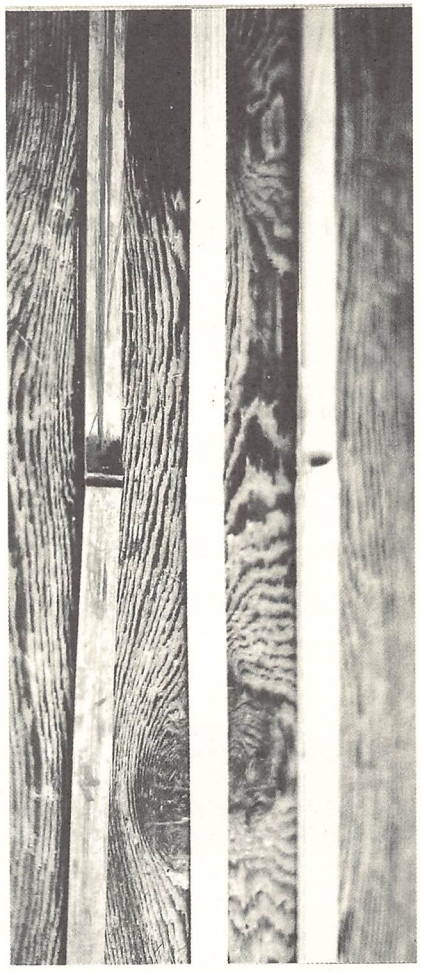
越生の笊の底



安松の笊の底



越生の笊では、敷の部分に丈夫な皮の籤（灰色部分）が使われ、網代でも6本の皮の籤を使っている。



3枚に剥いだ籤。右が皮の籤で、左の2枚は内肉の籤。

安松の笊では、敷部分に皮の籤を用いず、網代での使用本数も4本（灰色部分）と少ない。

目の細かい笊ができる。

＜安松の笊＞竹を２枚に裂き、七廻りと敷き編みに内肉の籤を使い、皮の籤を腰立てにあてている。

③敷編み

＜越生の笊＞七廻りで使ったのと同じ竹の皮の籤を４つ割りにして使っている。廻し始めをウラ（竹の先端部）から始め、次の籤はモトからというように交互に継いでいき、籤の幅の違い（モトからウラにむかって幅が狭くなる）を相殺している。

敷き編みで使う皮の籤の長さは、七廻りで使う内肉の籤よりも長く内肉の籤は余りが出るが、余った内肉の籤は使わずに捨てている。

皮の籤は表皮部分を内側にして使っているが、これには竹の湾曲のくせを逆にして笊の底を平らにする意味と、表皮の面を内側にした方が滑らかで米離れがよいという理由がある。

＜安松の笊＞内肉の籤が使われている。

④腰立て

＜越生の笊＞腰立てと横編みで１組の竹を使っている。

＜安松の笊＞竹の皮の籤を使っている。この皮の籤は七廻りと敷き編みで使っている内肉の籤とで一組となっており、幅を変えて使っている。

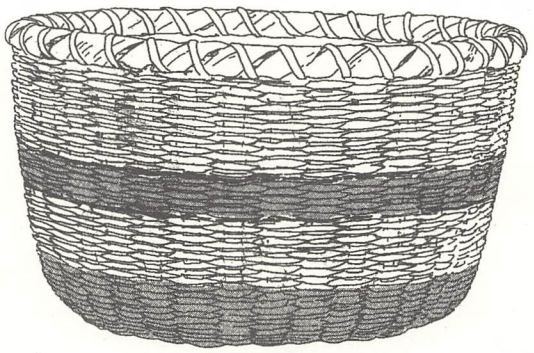
⑤横編み

横廻しは竹の節でへこみや出っ張りがでるので、できるだけ節の手前で折っている。籤の幅は二つの笊に違いはない。

＜越生の笊＞腰立ての後、茶褐色の煤竹１本を挟んで、内肉の籤を廻している。内肉の籤が終わるとまた煤竹を１本挟んで縁まで皮の籤で編んでいる

＜安松の笊＞内肉の籤で編み始め、途中で煤竹を１本挟んで、細い幅で皮の籤を使い再び煤竹を挟んで内肉の籤で縁まで編み上げている。

籤越生の笊　腰立て・開口部・縁巻きに皮の籤（灰色部分）を使用。



安松の笊　腰立て・横網の一部分に皮の籤（灰色部分）を使用。

⑥縁巻き

＜越生の笊＞内肉の籤を右から巻いた上に左から皮を巻いている。

＜安松の笊＞皮つぎの身（内肉）の籤を右から巻いて、左からは藤を巻いている。

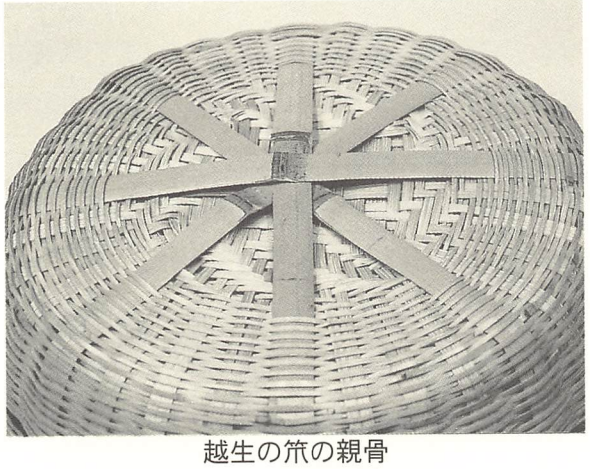
⑦親骨を入れる

<越生の笊>親骨を３本入れている。七廻りが終わって敷き編みから編み込んでいる。腰立てまでは縦の籤と親骨を重ねて編み、腰立ての終わったところで、縦の籤は折ってある。

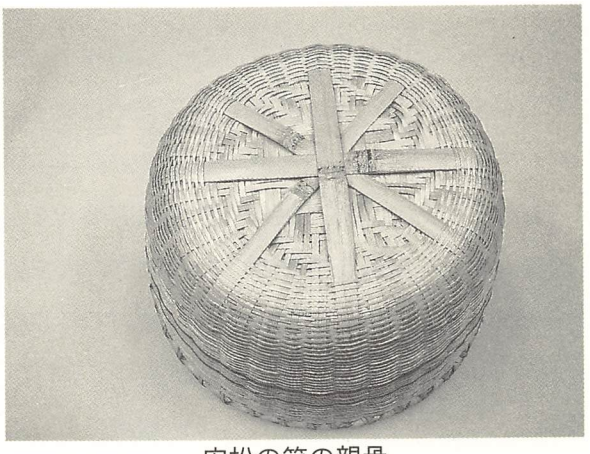
<安松の笊>越生と同様に親骨は３本で敷きから編み込んでいる。

越生の笊の縁巻き

安松の笊の縁巻き



越生の笊の親骨



安松の笊の親骨

（６）比較のまとめ

越生の笊と安松の笊を比較して、もっとも顕著な違いは、やはり安松の笊の方が材料を節約していることであった。以下にその内容を記す。

①笊の編み始めの網代の部分で、縦の籤に越生の笊は６枚の皮の籤を使っているのに対し、安松の笊では４枚の皮の籤しか使っていない。

②越生の笊では、七廻りと敷き編みで１組の竹の内肉の籤と皮の籤を使い、腰立てと横編みの工程でさらにもう１組の竹の皮の籤と内肉の籤を使っていた。これに対し、安松の笊では七廻りと敷き編みそして腰立てまでを１組の竹の内肉の籤と皮の籤とで編んでいる。つまり、内肉の籤の捨て分が少なく、竹の使用本数の節約になっている。

③越生の笊では笊１枚を作る中で、材料の竹の組み合わせ（網代・七廻りと敷・腰立てと横編み・縁巻き）が完結しており、製作過程で余分のでる内肉の籤は強度が弱いということで捨てている。これに対して安松の笊では、１枚の笊の中で竹の組み合わせが完結しているのは、七廻りと敷きと

腰立ての工程の１組だけで、網代編みと横編みと縁巻きについては皮の籤に対する内肉の籤の使用の割合が極めて高く、笊を何枚も作る上で共通の材料をストックしていないと揃えられないだけの量が使われている。

④安松の笊が内肉の籤を多用しているのに対し、越生の笊では網代の工程でも、七廻りと敷き編みの工程でも強度重視の点からあまった内肉の籤を捨てている。

おわりに

今回の調査では、職人が直売する越生の笊と農家の副業で作られ流通過程を経て売られた安松の笊との比較で特に以下の二点が目立った。

①職人が直売した越生の笊では強度を重視して笊の底の部分に丈夫な皮の籤を多用しているのに対し、いくつかの流通過程を経て売られる安松の笊では、内肉の籤を多用することで竹材を節約している。

②越生の笊では竹材の使用が１枚の笊の中で完結しているのに対し、安松の笊では同じ形の笊を何枚も作る場合に初めて成立する部材の使い方をしている箇所がある。

①については、職人が直売する笊の場合は職人に対する「指名買い」となるので、笊の耐久性など品質の高いこと（信用・評判）が製作上で重視されるのに対し、流通過程を経て（つまり流通コストが余分にかかって）売られる笊では製造コストを抑えるための工夫がなされていることがわかる。材料の節約は、また材料加工の工程（手間）を減らすことにも貢献している。

また、②については職人の笊は顧客からの注文で作るため生産の最低単位が１個から始まっているのに対し、流通する笊では同じ規格の笊を複数個作ることが影響していると考えられる。

今回の事例では、同様の用途で使われるほぼ同様の寸法の笊であっても、販売方法の違いによって材料の使い方等に明確な違いがあり、それが製造コストの差別化に反映していることがわかった。特にいくつかの流通過程を経て他地域に販売される笊では、同じ規格の製品を量産するという生産法をとることで材料のストックを作ることができ、製造コスト低減の面で職人の生産法（注文による多品種少量生産）に対し有利に働いていたことは興味深い。

今後は今回の比較と同様の傾向が他の事例についても確認できるか調査を進めていきたい。

最後に今回の調査のために多大な御指導とご協力を賜った長谷重夫氏と埼玉県立博物館資料調査課の皆様に感謝の意を述べてこの稿を終わりたい。

（註1）拙稿「赤山笊についての報告Ⅰ」埼玉県立博物館紀要26号　平成13年
（註2）内野達矢氏　「五里四方の意味」埼玉民俗第15号　昭和61年
「安松笊と所沢会合」所沢市史研究第10号　昭和61年
（註3）安松の笊は文明18（1486）年の『廻国雑記』に記述がある他、明治9（1876）年の『武蔵国郡村誌』にも上安松村で籠笊五千個生産の記録がある。また『武蔵国郡村誌』では赤山笊の生産地下青木村で小笊四千六百個、伊苅村で笊千個輸出、芝村で四千六百二十個輸出の記録がある。
（註4）（註2）に同じ

〈参考文献〉

吉羽和夫　「籠職人」　玉川大学出版部　平成６年
「消える籠職人」　玉川大学出版部　平成７年

調査研究報告　第16号

印　　刷　平成15年3月21日

発　　行　平成15年3月28日

編集・発行　埼玉県立さきたま資料館
〒361−0025　行田市埼玉4834

印　　刷　(有)三共社印刷所

(注19) 新編日本古典文学集成版『太平記』頭注

(注20) 谷垣伊太雄「尊良親王配流譚をめぐって」『太平記の説話文学的研究』 第1章 1989.1 和泉書院

(注21) 「扇面画における伝統と創造―Y家蔵・幸若舞曲等扇面画帖の場合」『風流 造形 物語 日本美術の構造と様態』所収1997.2.26スカイドア刊

(注22) 市古貞次『中世文学史年表 小説・軍記・幸若舞』「Ⅲ幸若舞・舞曲」1998.12東京大学出版会

(注23) 小高恭編『芸能史年表』第三版(2001.10)岩田書院刊

(注24) 赤松俊秀校注 全六巻 鹿苑寺 昭和三十三～四十二年刊、平成九年 思文閣出版復刻

(注25) 『隔蓂記』明暦三年十二月十九日条に「…先年相国寺作絵所故、畳代銀自公儀、相渡也。晴雲軒分今日請取也。畳壱帖付銀子参銭目充之算用也。晴雲軒分畳廿一畳半分、銀六拾四文目（匁）五分也。」とある。4-311

(注26) 岩間香「祇園祭と海北友雪」『寛永文化のネットワーク 『隔蓂記』の世界』所収思文閣出版 平成九年三月

(注27・28) 成澤勝嗣「禁裏絵師・山本友我の活動」『寛永文化のネットワーク』所収

(注29) 真保亨「太平記絵巻 ―十二巻本について―」『図録太平記絵巻』所収

(注30) 真保亨『北野天神縁起絵巻』日本の美術№299 1991.4至文堂

(注31) 小泉和子・玉井哲雄・黒田日出男編『絵巻物の建築を読む』所収 1996.11東京大学出版会

(注32) 根津美術館『根津美術館蔵品選 仏教美術編』平成十三年六月 参照

(注33) 『実隆公記』巻三下七四六頁（続群書類従完成会）

(注34) 相澤正彦「土佐光信―乱世の宮廷画家」新潮日本美術文庫2『土佐光信』平成十年五月

(注35) 前注『土佐光信』14図参照

(注36) 洲兵台については、日高薫『日本美術のことば案内』2003.1小学館

(注37・38) 千葉市美術館『菱川師宣典図録』平成十二年十二月

(注39) 佐藤悟「菱川絵本の諸問題」（注37所収）、ほかに佐藤悟「『私可多咄』の画工は師宣に非ず―万治二年版の書誌的検討」『実践女子大学文学部紀要』第三十号、昭和六十三年 がある。

(注40) 塩村耕「近世文学と師宣絵本」『国文学』1996年3月号

対し、最近でも『私可多咄』を師宣作と認めても良いとする説もある（注40）。『大全』の頼之の行列は、素人目にみても「大名行列」より拙く『私可多咄』により似ている感じがある。『大全』挿絵を「菱川師宣の初期の作か」とする古書目録を見かけるのも私可多咄の挿絵との類似から来ていると思われる。「絵巻」との関連からも専門家の解明を待ちたいと思う。

おわりに

今後の「太平記」の絵画面の研究には、寛文期を中心とする同時期の絵入り刊本の挿絵との比較検討、さらにそれを取り巻く幸若舞・古浄瑠璃・謡曲などの芸能を含んだ江戸初期文化圏の一環としての追及が必要となろう。筆者としては『大全』と無刊記版の挿絵の全体的な検討を次の課題にしたい。

注

（注1）各巻の現所蔵は以下のとおり

原本 第一、二、六、七、十巻　埼玉県立博物館
第三、八巻　ニューヨークパブリックライブラリー
第五、十一、十二巻　国立歴史民俗博物館

模本 第四、九、十二巻　ボストン美術館
第七、十巻　東京国立博物館

これらを写真版で収めたものに埼玉県立博物館編『太平記絵巻の世界』（平成八年）、『図録太平記絵巻』（同九年）、『太平記絵巻第十巻』（平成十四年）がある。

（注2）西口由子「太平記絵巻について」（『太平記絵巻の世界』所収）
（注3）「絵入本の時代―『絵入～』の流行」『国文学』41-4平成八年三月
（注4）日東寺慶治「太平記整板の研究」長谷川端編『太平記とその周辺』平成六年四月　新典社　所収
（注5）加美宏『太平記の受容と変容』第四章第二節『太平記大全』1997.2　翰林書房
（注6・7）注5に同じ
（注8）前掲（注4）
（注9）『軍記物の世界』Ⅱ太平記の展開（1978朝日新聞社　2002岩波現代文庫に収録）
（注10）『「菱川師宣展」図録』123P平成十二年十二月　千葉市美術館
（注11）清水婦久子編『絵入源氏　若紫巻』平成十四年九月
（注12）「寛文期の『平家物語』―寛文十二年版『平家物語』の挿絵をめぐって―」『日本文学』2002年10月№592）
（注13）新日本文学大系本に収録各曲の底本とした寛永整版本（旧刻）の全挿絵を収める。
（注14）新日本文学大系『舞の本』518Pの挿絵参照。なお、両者の場合は史実と異なることが明らかになっている。
（注15）『南北朝の宮廷史　二条良基の仮名日記』臨川書店原典購読セミナー9　平成十五年二月
（注16）注12に同じ
（注17）『源氏物語の鑑賞と基礎知識橋④橋姫』平成十一年一月　至文堂
（注18）ここは『平家物語』六「小督」と同工の展開・同型の挿話と指摘されている。

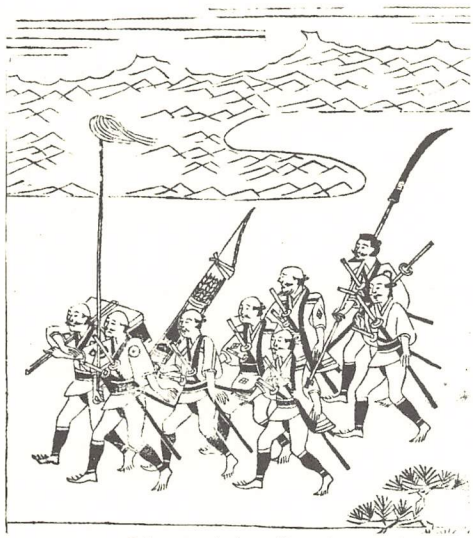


図46『太平記大全』巻四十　57ウ

図45『太平記大全』巻四十　57オ

図48『無刊記版　巻四十　又18ウ

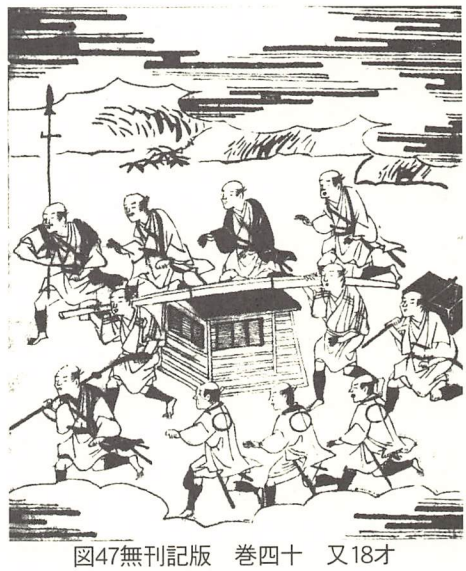


図47無刊記版　巻四十　又18オ

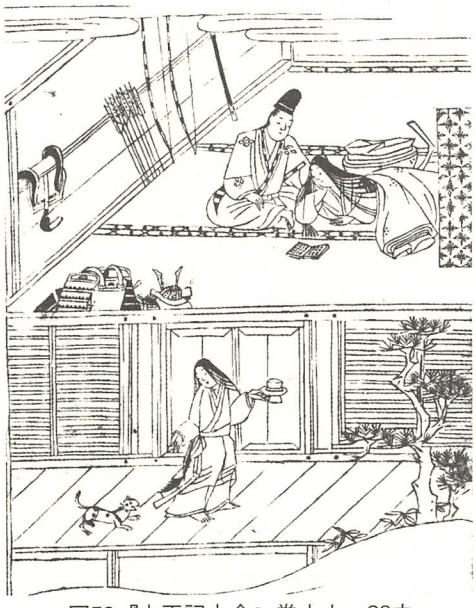


図50『太平記大全』巻十六　23ウ

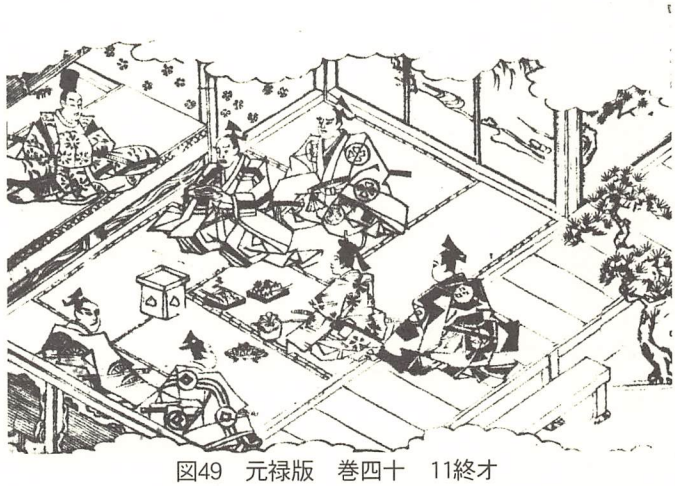


図49　元禄版　巻四十　11終オ

馬に乗る頼之に供侍、槍、沓、籠、衣類(?)の荷物持ちが従い、ウラはその前方に毛槍・挟箱・弓矢・長刀・大刀を持つ侍が先駆けているという、当世大名行列風に描かれている（図45・46）。上下に海の波と家並みに松並木を配して、章段表題の「西国より上洛」する頼之を描き出している。次に寛文頃無刊記版は巻四十の又十九丁でオモテに駕籠で上洛する頼之を、ウラに烏帽子狩衣姿で上段に座し、めでたい洲浜台と作り物の花、が飾られ（注36）、酒肴、三方の盃台が出される中で人々の執事就任祝いを受ける頼之を描いている（図47・48）。元禄十一年版は、十二終丁ウラで無刊記版ウラと左右の向きが変わるだけでほぼ同じ構図を描いている（図49）。洲浜台はなく、三方上の盃は酒を受けるべく人の手にある。その外は頼之以外の人数は両絵とも六人であり、酒肴が出されていることも共通している。元禄版は無刊記版に範を取り改変したと思われる。

二つの祝言的挿絵は、「絵巻」の絵の頼之を描いた部分と共通性を持つと見てよいであろうが、それを除いて版本挿絵と「絵巻」の絵には全く共通性がない。ただし『大全』の別の場面には「絵巻」が引き継いだ「簀子縁」上の猫と侍女が登場する。巻十六「西国蜂起官軍進発事」第二十三丁ウラの挿絵（図50）は、九州へ没落した尊氏が再び勢力を盛り返し、尊氏方に付いた西国勢との決戦を前に愛人勾当内侍との情事にふける義貞を描いている。横になって頬杖をつき本を読む勾当内侍に寄り添う義貞、周囲には甲冑や弓矢刀馬の鞍が懸けられ（寝所の魔除けか）、義貞の優柔不断さを象徴しているようで「絵巻」にはないおもしろい挿絵になっている。部屋の外の廊下にはじゃれる猫と食器を盆に載せ振り向く侍女の姿という弘安本、「絵巻」と同じ姿が描かれている。これは本文の内容と全く関係ない絵柄であるが、作者と弘安本との関連を示しているようで興味深い。

最後に「大全」第五十七丁の上洛する頼之の行列風の絵について一言したい。この絵は同種の無刊記版挿絵と違って、供侍の表現に独特の趣がある。全員が江戸時代の奴風の行装で、馬上の頼之の両わきの供侍はやや中腰になり両手を左右に広げて掌を下に向け広げている。近世大名行列の「下に下に」（警蹕（けいひつ））の形を取っている。『大全』には、巻第三十二「直冬芳野殿御合体付天竺震旦物語事」にも芳野へ向かう馬上の直冬と供の人々の行列を描く似たような挿絵がある（又五十丁オ）。笠をかぶり、二両引紋の長羽織を着た直冬に毛槍、挟み箱、弓矢を担いだ三人が前に立ち、以下馬の轡取りと主人の刀を担いだ一人を含めて五人の供侍が付き従う。掌をしたに向けたものもいる。ところで、この手つきと極めて類似した絵が、菱川師宣にみられる。『私可多咄』の挿絵と「大名行列」と呼ばれる六枚ものの絵（シカゴ美術館）である（注37）。六枚の内容は「供侍・長刀・鉄砲」「供侍・騎馬・挟箱・槍・草履」「篭」「槍・挟箱・草履・御馬」「沓・篭・供侍・長刀」「騎馬・挟箱・槍・沓篭」で最後の一枚左端に「畫師菱川真跡」とある。そのほか同様の絵は個人蔵一点・ベルリン東洋美術館蔵四点の存在が知られている（注38）。いずれも従者の身分差を服装や持ち物にはっきり描き分けている。供侍や何も持っていない奴はいずれも、「大全」挿絵と同じにやや左右に腕を開き両の掌を下に向けた警蹕の形に描かれ、印象に残る。

一方、『大全』巻四十の頼之の行列に極めて似た図を載せる『私可多咄』（国立国会図書館）は万治二年刊の上方版を、版型を大きくして寛文十二年に江戸で再版されたもので、その挿図は水谷不倒以来、師宣の初作と認められてきたが、師宣ではないとする強力な説がある（注39）。これに

紀年銘を持つものを祖本とし、同じ弘安銘を持つ一群をいい、原本が二巻しか残らないのに対して、御物本、防府天満宮本、根津美術館本などは原形をよく残すとされる。防府天満宮本は、「弘安本系の転写による三十三段と、独自に増補した霊験説話二段及び寺社縁起三段」を合わせたもの（注30）で、「松崎天神縁起」とも呼ばれる。小泉和子「絵巻物にみる中世住宅の寝場所」（注31）は、弘安本の一つ「松崎天神縁起」巻五の「銅細工女利生」場面の絵を使って建築上の分析をしている。「…富み栄える国司播磨守有忠の邸、有忠夫妻の居間である。大きな火炉を囲んで刀の手入れをする有忠、寝そべって書き物をする妻、侍女たちがいる。室内は美しく整えられ、棚には見事な食物があふれて、豊かな暮らしぶりをうかがわせている。」「…左が妻戸右は引き違い襖障子…これに続く左手が台所らしく男が食事を運んできて侍女が受け取っていることからしても、ここは北面か少なくとも裏の方である事は間違いない。」と詳細に分析し、有忠の背後の壁に副障子がある事から「この場所が常の居間として固定している…。」と結論づけている。

「絵巻」はこの部分をそっくり転用している。居間空間の有忠夫妻は消されて、人のいない青畳となり、その手前の居間空間手前の庇にいる侍女も消され、替わってそこに義満を抱く侍女を中心に四人の侍女がはめ込まれている。そのほかの建物の構造、調度類、板の間上の雉、台所の食器を受け渡す男女、「簀子」縁上の猫と侍女等の描写はそっくり踏襲されている。又、「太平記絵巻」で頼之が人を迎えて座る部分については、根津美術館蔵の弘安本（注32）では、犬がいるのみで無人であるが、建物構造は柱の本数、板間の板の枚数などを除いて全く同じである。簀の子縁の支柱の束部分までが描かれている点などからむしろこちらの方が「絵巻」に近いといえる「絵巻」は弘安本「天神縁起絵巻」の銅細工娘の話の有忠の邸のめでたい場面を借りて、奥（常居所）で侍女に囲まれる幼い義満と、その補佐としての執事頼之を表に配置して新政権の誕生を「めでたかりし事ども」と祝ったのである。絵入り刊本の挿絵の単純さと比べて、「絵巻」作者のまことに卓抜な構想力を思わせる。

なお、長期にわたって絵所預職の座を占めた土佐光信の作に「北野天神縁起絵巻」上・中・下・三巻がある。三条西実隆の日記『実隆公記』に、旧縁起を紛失した北野神社が、光信に制作を依頼し、文亀元年八月から三年五月に懸けて制作された過程が記載されている。詞書は実隆が依頼された。『実隆公記』文亀元年(1501)十月四日条には「土佐刑部少輔（光信）来、北野縁起絵事相談之」の記事がある（注33）。下巻の最後の絵は、「銅細工女利生」の場面であり、構図は先行弘安本系と違うが、有忠の邸での夫妻と侍女の絵である点は同じであり、猫と侍女も登場する（注34）。

その光信が描いた御伽草子絵巻に「鼠草子」（ハーバード大学サックラー美術館）があり、そこにあの「猫と侍女」の絵が登場する。三方に食器を乗せた侍女が猫を振り返って手をさしのべる、猫は部屋に飛び込み、男に化けて尼公の娘と祝言をあげようとする鼠を見抜いて食い殺すという三段続きの絵である（注35）。侍女と鼠は「絵巻」や『大全』と左右反対。弘安本縁起の猫や犬は描かれる意味が不明であるが、この場合は猫の描写は必須であり、両者の関係は不思議な感じがする。

（2）絵入り版本の挿絵

これに対して絵入り版本の挿絵はどうか。

『大全』は巻四十の五十七丁一丁分を使い、オモテに烏帽子狩衣姿で

かも知れない。

なお、上記⑤において、友雪を「友世姉婿」としている点について触れておく。友世は姓は渡瀬で北野神社目代を勤める。承章のもとに初めて現れたのは、承応二年(1653)二月二十一日であり、北野衆の能貨が同道している。3-287この日以降、友世は北野衆の代表格として承章のもとに頻繁に出入りし、振舞を初め何かにつけて『隔蓂記』に登場する。友世自身も承章らを招いて振舞をすることもあり（たとえば明暦三年十二月十八日4-310）、また前出の西川源兵衛とともに承章のもとを訪れることが多く記されている。『隔蓂記』万治三年四月十日条には「午後源兵衛来也。友世姉婿之源兵衛也。」とあり、友世との関係を語っている。この記述から、この年正月の友雪が友世の姉婿という記述は、「絵巻」と北野天神縁起絵巻弘安本との関係を考えると甚だ魅力的なのであるが、友雪とともに来た源兵衛に掛る記述ではないかと考える。友世と友雪のそれほどの密接な関係を語る記事は『隔蓂記』には見えない。

晴雲軒は承章が父の菩提のために相国寺内に建て、相国寺勤務時の宿所にしたところである。

以上、寛文期前後の幸若舞「新曲」の後水尾院における情況と、海北友雪の同院との関わりを、鳳林承章の『隔蓂記』を通じてみることで、「絵巻」の置かれた文化状況の一端を考えてみた。「日記魔」と云われる承章が残した『隔蓂記』については今後さらに検討したい。

最後に絵巻第十二巻の最終絵と刊本挿絵の問題点を考えてみたい。

三　細川右馬頭西国より上洛の事ー「太平記絵巻」最後の絵を巡って

（1）「太平記絵巻」と弘安本「北野天神縁起絵巻」

「絵巻」の最後の絵第十二巻第十四紙は『太平記』巻四十の最終章段「細川右馬頭自西国上洛事」を描く（図録182p）。「絵巻」第十二巻は国立歴史民俗博物館が所蔵する三巻」（同館での名称は「太平記絵詞」上・中・下）中の一巻である。

この段の絵巻詞書は以下のとおり。

細川右馬頭頼之ハ、西国の管領なりしか、よろつせいたうたゝ（しけ）れは執事の職にふせられ、武蔵守になされてミやこへ、めしのほせられけるに、万民つきしたかひてをもんしけれハ、諸国無為になりて、めてたかりし事ともなり。

絵は、都の幕府の館に伺候し、諸大名を迎えてゆったりと座る新執事頼之を画面右よりに、ほぼ中央から左半分には連続した奥の部屋で宮廷官女風の侍女にかしづかれる幼い将軍義満を描き、庭に松、竹、一対の鶴を配して、絵全体が詞書結びの「無為に（本文では「無為の世に」）なりてめてたかりし事ども」という太平の到来を祝う世界を視覚化している。ここでの主役は本文も詞書も細川頼之であるのに、絵の中心は義満とそれを取り巻く侍女であることは全体の配置から明らかである。室内の調度や動物、「絵巻」が典拠にする事が多い弘安本「北野天神縁起絵巻」（注29）の最終絵「銅細工女利生」（または「銅細工娘受福」）の構図を転用していることが知られている。絵は「継母にいじめられ苦しんでいた貧しい銅細工娘が、北野の加護により播磨守有忠に出会い、有忠は後に大国の受領となり、姉がその妻となり、娘は北方として家門が栄えた」という話に拠っている。

弘安本「北野天神縁起絵巻」は北野天満宮にある伝光行筆弘安元年の

⑥寛文三年(1663)正月四日　海北友雪年初の礼にくる。方丈において羹を出す。

⑦同年　四月二日　海北友雪が延命院同道で北山（鹿苑寺）に来る。対面。来る六日承章を招待しているのでその礼として来寺した。一盞を浮かぶ。5-231

⑧同年　四月六日　海北友雪に招かれ振舞（饗応）を受ける。「…令帰山、則漸及初更。終日種々馳走也。」5-232

⑨寛文四年正月朔日　海北友雪、晴雲軒に（年初の）礼にくる。会う、羹ものを出し盃を浮かべる。5-507

⑩寛文四年十二月二十一日　海北友雪法橋より又音信、吉田権右衛門を使者に返状を遣り、酒大樽一荷と白絹一巻を友雪に投ず。

⑪寛文五年五月二十日　承章、東武出立の暇乞いに参院、拝謁、末広扇［海北友雪絵　常之御扇］ほか拝領する。6-79

⑫寛文六年一月三十日　海北友雪四五日以前、江戸より上京申すの由、年頭のため来る、相対す、予出京之節故、早々友雪帰られる也。6-190

『隔蓂記』には承章が友雪と初めてあったのは、③の明暦二年のことであると思われる。寛文三年四月には、友雪の振舞（饗応）に応じて、承章は等厚西堂等相国寺のメンバーや鹿苑寺での配下の吉田権右衛門・西寿等とともに出掛け、「終日種々馳走」を受けた。「振舞」は『隔蓂記』の世界を理解するキーワードの一つであると思われる。上は後水尾院やその側近公家、承章のようなトップクラスの僧から相国寺末寺・塔頭の主、承章出入りの絵師、商人、北野神社目代などに至るまで、それぞれが茶の壺切りの「振舞」などを主催し、参会者に茶を点じ、酒食のもてなしをする。座敷には唐物や雪舟などの山水図、名家の墨跡などが掛けられ書院道具が飾られる。食後には能や幸若舞が演じられたりさらに書画が振る舞われる承章もしばしば探幽の押絵などを参会者に与えている。「振舞」は当時の後水尾院のサロンを典型例とする人々の文化的集団における必須の潤滑油の役割を果たしていたと思われる。ここに見られる友雪の承章との交流は淡泊である。友雪主催の振舞は『隔蓂記』には寛文三年の一回しか見られない。友雪と対照的な動きを山本友我に見ることができる。

『隔蓂記』にみえる山本友我は、寛永二十一年(1644)十一月五日に初めて承章のもとを訪れ、豊富な資力も使って積極的に承章に接近を図った。友我に興味を持った後水尾院の二度に渉る下問に承章は友我の絵を届け、ついに友我は仙洞御所に呼ばれて院の屏風絵作成を命じられるに至り、しかも絵の完成後は法橋に任じられた。この間の友我の活動ぶりは『隔蓂記』に詳しく記されている（注27）。それに対して承章にあった頃の友雪は、「承応四年の内裏造営には障壁画制作にも参加しており、承章との交流が始まった明暦二年にはすでにひとかどの絵師」になっていた（注28）。友我のように「後水尾院を中心とするサロンで画名をあげること」に京都での活動の中心を置く必要はなかったのであろう。とはいえ、友雪が承章を饗応し、承章は後水尾院に友雪の絵を見せ、院も又友雪の扇絵を餞別として承章に与える等々の動きの中には、友雪もまた、多かれ少なかれ後水尾院の文化サロン圏内に足を踏み入れ、その時代的雰囲気を吸いながら絵を制作していたと言えよう。「太平記絵巻」が友雪の作であるとするならば、それをそのような文化状況の中において考察することが必要であろう。そのとき、第七巻第一紙の「一宮御息所」の絵は、最も濃厚に、その時代の文化的雰囲気を体現しているといえるの

「当所門前之神事祭也」4-715　翌二十七日は幸若五兵衛が来て「舞興行」を催すはずであったが、雨天のため翌月朔日に延引と決まった。4-716「幸若近日越前に赴」くので、それ以前に舞聞くべき首尾相談がまとまったのである。十月朔日　約束どおり幸若五兵衛・千八父子が来寺して志太・新曲の二番を舞った。4-718

翌二日、承章は参院したが後水尾院は灸を据えていて対面がなかったが、幸若五兵衛の舞のことを言上したところ、「叡聞」あって、五兵衛の帰国を留めるべしと仰せがあった。4-719

同七日、後水尾院から承章に明八日晩に幸若を伺候させるべき仰せがあり、承章はその旨幸若父子を連れてきた平山六郎左衛門平六に申し遣わした。4-721

同八日　雨天であったが、承章の周到な手配のもと、仙洞御所において、秉燭の頃敦盛・伏見の二番を舞った。舞のあと、院は簾中に承章を呼び、今一番「新曲」を所望し、承章は五兵衛にそれを伝え、五兵衛父子は新曲を舞った、承章は、「仙（千）八郎一段音曲出来也」と記している。舞後、振舞いと拝領品を受けた五兵衛親子は礼に、長袴を着し、小刀を持って舞った後退出した。院は、承章等の参会者に「舞一段可然之旨」と賞美した。4-722

同十日、五兵衛父子は承章のもとに一昨日の舞の礼に訪れ、承章の所望により、和田宴を一番舞った。みるものは承章と北野神社目代の友世、上月三左衛門の三人だけであった。4-721~723

これらの『隔蓂記』の記述から、後水尾院のサロンともいうべき仙洞御所における幸若舞の上演において、新曲が占める位置の大きさがある程度知ることができよう。もちろん、仙洞で行われるのは能の方が遙かに多かったのであるが。「絵巻」第七巻冒頭の一宮の垣間見の絵に対する嗜好は、院とそこに集まる上層階級の人々の間にある「新曲」愛好の気分を共有するものがあると言えよう。

（3）『隔蓂記』での海北友雪　『隔蓂記』は、前記の探幽等狩野一族のほかにも、土佐光起、山本友我や伊藤長兵衛等の絵師、蒔絵師の幸阿弥、陶工の野々村仁清、粟田口作兵衛などと承章の広く多彩な交流を語っているが、承章自らも詩文はもとより、画賛に筆をふるうばかりでなく自らも絵を描き、書画の鑑定もする多彩多能な人物であった。とくに相国寺が絵所となったこともあり（注25）、当代の画家との縁が深かった。「太平記絵巻」の作者に擬せられている海北友雪が承章のもとを訪れる絵師の一人であったことは、既に指摘されている（注26）。

『隔蓂記』に現れる友雪は以下のとおりである。

①明暦二年（1656）三月九日　承章はこの年初めて後水尾院に対面しゆるゆる雑談をして、「海北友雪筆之三幅一対式三番之絵」を叡覧に供した。4-34

②明暦三年二月二十五日　海北友雪法橋が延命院と同道でやって来たが承章は他出していたので対面しなかった。4-197

③同年　八月二十六日　海北友雪畫師が（相国寺西堂の）等厚首座の案内で相国寺内の晴雲軒にやって来る。「細筆山水・人形の押絵拾弐枚」をもらう。4-111

④明暦四年正月二日　海北友雪が新年の礼に来る。相対、浮盃。4-323

⑤万治三年(1660)正月二十一日　（西川）源兵衛・友雪が来る。友雪は（この年）初めて来る。（北野目代）友世の姉婿である。相対、浮杯。4-619

ることはいえるだろう」とされ、当初想定した「本作品は、…おそらくは一七世紀前半、寛文頃の物語扇面画の動向を現すものではないか」という考えを肯定する結論を出している。長信は承応三年(1654)七八才で没している。

(2) 演じられた「新曲」　「新曲」の上演については『中世文学史年表』を探ると『証如上人日記』に天文二十三年(1554)四月十一日条に記録があるほか、永禄十二年(1569)四月九日（二条宴乗記）、天正二十年(1592)三月五日（『言継卿記』）、慶長九年(1604)五月十日（同）などの記録が知られる（注22）。元和・寛永以降については『芸能史年表』により検索すると、「太平記絵巻」が作成されたと推定される寛文期前後については、松平直規の『松平大和守日記』、鳳林承章の日記『隔蓂記』に「新曲」の上演が散見する（注23）。

『隔蓂記』は鹿苑寺僧録の鳳林承章(1593~1668)の寛永十三年(1636)から寛文八年(1668)、七十六才で没するまでの日記である（注24）。承章は勘修寺家の出身で晴豊の子、叔母晴子は後陽成天皇の生母で新上東門院の院号を宣下されて朝廷内で重きをなした。承章は後水尾(1596-1680)院の又従兄弟にあたり年齢も近かったので院の帰依と信頼を得て仙洞に出入りし、上皇を中心とする寛永文化の一端を担った。慶長十三年(1608)師の西笑承兌の死により鹿苑寺金閣の住持となり、寛永二年(1625)には相国寺住持になっている。

『隔蓂記』に幸若舞「新曲」のことが登場するのは早く、寛永十四年(1637)正月二日である。前年十月に幕府から「五山末寺各別、御朱印有之衆」に対する継目朱印状受取のため江戸へ出頭せよとの命令がだされ、十一月二十一日に江戸に着き、そのまま江戸で新年を迎えていた。この日承章は、僧録金地院に年始のあいさつの後松倉右近（重利）の茶湯の席に加わり、幸若伊右衛門が「信（新）曲」を舞うのを「聴聞」している。1-47（数字は刊本『隔蓂記』の巻・頁数を示す。以下同じ。）早くも「新曲」が登場することが注目される。続いて同月十四日には、旧朱印状を幕府に返納した後、狩野采女（守信）の所に「幸若之舞」を聞く約束で赴いたが、幸若が来ないので閑談した。承章は守信の請により大の字を書し、守信は梅と荷葉の絵を描いてくれたことも記されている。狩野采女守信は後の探幽であり、『隔蓂記』の記述から承章は京都生まれで江戸に下り幕府御用絵師となった守信を中心に狩野家と終生極めて緊密な交流を持っていたことが知られている。五年後の寛永十九年四月晦日にも承章は、前年来上洛して幕府の内裏造営による障壁画制作に従事していた探幽のもとを訪れ、幸若小八郎弟子の七兵衛の「舞舞」をみている。幸若七兵衛とは「初成知人」と記している。1-377

次に「新曲」が「隔蓂記」に登場するのは慶安四年(1651)十一月二十九日で、この日仙洞で幸若太夫息女の「盲女之舞」があった。「新玉・八嶋」の二番であった。「新玉」は新曲であろう。3-90 翌慶安五年七月二十六日に仙洞御所で寺沢次太夫と「越前幸若一類之者」の二人で、孰（敦）盛・新曲・伏見常磐の三番が舞われている。3-186

続いて承応二年(1653)十一月十七日にも新曲・満仲の二番が舞われた。舞手はこの十三日に敦盛・伏見常磐の二番を舞ったのと同じであった。3-403

次に万治三年(1660)には、後水尾院の御所で新曲が舞われる経過を詳細に知ることのできる記事がある。

同年九月二十六日は、鹿苑寺門前の北山天神社の神事祭りであった。

の展開を無刊記版の挿絵17図に合わせながら追えば以下のようになる。

④一宮の見初めた女性には許嫁があったことが知らされ（図29）、⑤相手が身を退いて両者は婚姻する（図30）が、⑥「天下の乱」（元弘の乱）により、一宮は土佐の畑に流され、警護の有井庄司の計らいにより手紙と「衣一重」を御息所に送る（図31）、⑦一宮の使者秦武文は京で荒れ果てた御所にいる御息所を捜し出し手紙と布を渡し（図24・25）、⑧土佐へ向かって尼崎まで連れて来るが、横恋慕した筑紫人松浦五郎に宿を襲われ奮闘するが（図32・33）、⑨誤って松浦の船に御息所を乗せてしまった武文は小舟で追うが、追いつけず憤怒して呪詛のことばとともに腹掻ききって海底に沈む（図34・35）。⑩船は鳴戸の渦に巻き込まれて進まなくなり、鎧や御息所の布を投げ込んで難を逃れようとする（図36・37）。⑪効果がないので松浦は御息所を海に投げ込もうとするが、同船の僧侶に止められ、僧侶の読経により「不思議のもの（武文の怨霊など）」が現れ（図38・39）海は静まる。⑫御息所は船頭一人と小舟に乗せられ「淡路の武嶋」に着き、島の人々に助けられて土佐に行くこともならず武嶋で年を送る（図40・41）。⑬土佐の一宮は、警護の武士の話から鳴戸を通る船に引っかかった衣の袖を取り寄せ、武文に持たせたものと確認し、御息所が死んだと判断し、忌日を定めて霊を弔う（図42・43）。その後、↓幕府の滅亡により後醍醐が隠岐から還り、一宮も京へ戻り、御息所の消息を知って武嶋から迎える。↓「又天下の乱」により、一宮は越前金崎で自害する。首は京に送られ、夢窓国師により厚く葬られる。悲しみに暮れる御息所も一宮の四十九日前にこの世を去る、という形で『太平記』の本話は幕を閉じる。

2 寛文期における「新曲」―後水尾院のサロン

『太平記』巻十八の「一宮御息所事」は、室町後期の幸若舞曲に最後にできた幸若舞曲という意味から「新曲」という名で取り入れら、一条兼良作と伝えられる「中書王物語」も同じ材料に拠ることが知られている。「新曲」は、ほとんどそのまま『太平記』に拠っているが、結末だけは武嶋から都へ迎えられた御息所は一宮と幸せな日々を送ったとハッピーエンドに改変している。

(1) 描かれた新曲

幸若舞の舞曲集『舞の本』の挿絵については、全十図有り、第一図は一宮が歌会で優婆塞宮の娘の絵を見ている場面、第二図は庭で絵盗み見る一宮に気付いた御匣が琵琶を置いて去った場面、第三図は御匣が和歌の短冊を読むのを廊下から垣間見る一宮を描き元禄十一年版と同じである。「絵巻」と『大全』が描く「車中からの垣間見」は見られない。また、佐藤みどり氏により、「新曲」を題材にした三十一面に及ぶ扇面画帖の存在が報告されている（注21）。絵の数は無刊記版本挿絵を上回るが、ここでも一宮の車中からの垣間見は描かれていない。同画帖は全六十面で、「新曲」のほか、幸若舞「大織冠」、古浄瑠璃であったと思われる「大橋の中将」を収めている。佐藤氏は扇面画と「新曲」詞章を詳細に対照解読し、同画帖に納められた他曲と対比して「新曲」は、「戦闘や海上の情景という偏愛する図様の集積と源氏絵など古典的なイメージの型どりによってストーリーを追う」ものと分析している。前述の無刊記本と通じる性格と言えよう。なお、同扇面画は、京に還る一宮で終り、御息所との再会は描かれず、ハッピーエンドで終る「新曲」としては不十分さを感じさせる。作者については、扇面画の狩野長信筆という伝承を踏まえ、慎重な留保を付けながら「長信様式の工房作であ

図33　無刊記版　巻十八
又40ウ

図32　無刊記版　巻十八
又40オ

図31　無刊記版　巻十八
又36ウ

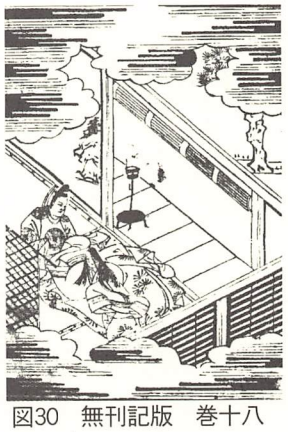


図30　無刊記版　巻十八
又36オ

図37　無刊記版　巻十八
又46ウ

図36　無刊記版　巻十八
又46オ

図35　無刊記版巻十八
又44ウ

図34　無刊記版　巻十八
又44オ

図41　無刊記版　巻十八
又50ウ

図40　無刊記版　巻十八
又50オ

図39　無刊記版巻十八
又48ウ

図38　無刊記版巻十八
又48オ

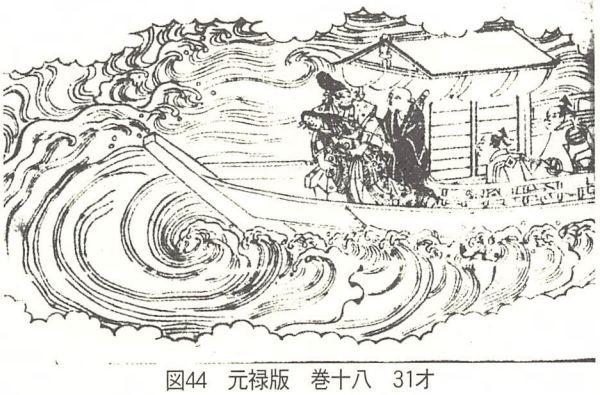


図44　元禄版　巻十八　31オ

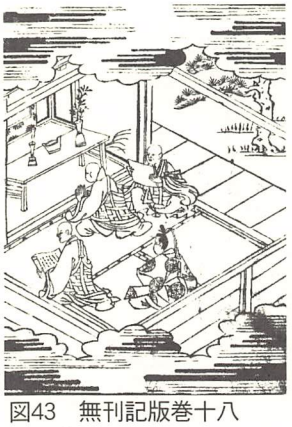


図43　無刊記版巻十八
又52ウ

図42　無刊記版巻十八
又52オ

挿絵としている。「絵巻」の一つの豪華な絵だけを通じて章段内容全体を代表させる技法と対照的に多数の絵により物語りの展開を楽しめるという版本の利点を発揮したものになっている。絵巻詞書は二人の出会いしか描かれていないから、これを十分楽しむためには、長大なこの物語を語って聞かせることがあり、また後述する幸若舞の「新曲」によりこの内容が絵巻を楽しむ階層には周知であったのかも知れない、つまり絵巻と版本はメディアの違いによる享受の仕方の違いがあったということも考慮に入れなければならないだろう。また無刊記版本で、又三十九丁は一宮の書状をもった武文が琵琶の音を頼りに荒れ果てた御所を探し当てる場面を表裏に描き（図24・25）、垣間見的シーンを再現し（注18）、元禄版もまた第二十五丁オモテ（図26）で同様の挿絵を描いていることは、当時の版本を楽しむ人々の嗜好の動向を物語っているようで興味深い。いずれにしても『太平記』のこの章段が、「一貫した御息所物語を、一宮の悲劇を彩るためにはめ込」んで、「『源氏物語』などの王朝物語、和歌、漢詩の世界をふんだんに取り込んだ物語となって」いること（注19）を、「絵巻」は必要最小限の詞書と一枚の絵で集中的に表現し、『大全』挿絵も、（直前に王朝的というには相応しくない絵があるが）『絵巻』同様、垣間見に絞るという措置により同様の効果を上げているのである。ただし、その後に続く御息所を奪おうとする松浦五郎と守ろうとする武文の「葛藤を描いた活劇的場面」（注20）、武文の憤死、怨霊、御息所の数奇な流浪などの劇的・非日常的要素もこの物語の重要な側面となっている。無刊記本の20場面に及ぶ挿絵は、その側面に対する当時の享受者の嗜好に応えるものであったろう。

「一宮御息所物語」とでも呼ぶべき「太平記」中のこの挿話の③以後

図24　無刊記版　巻十八　又39オ

図25　無刊記版　又39ウ

図27　無刊記版　巻十八　又28オ

図28　無刊記版　巻十八　又28ウ

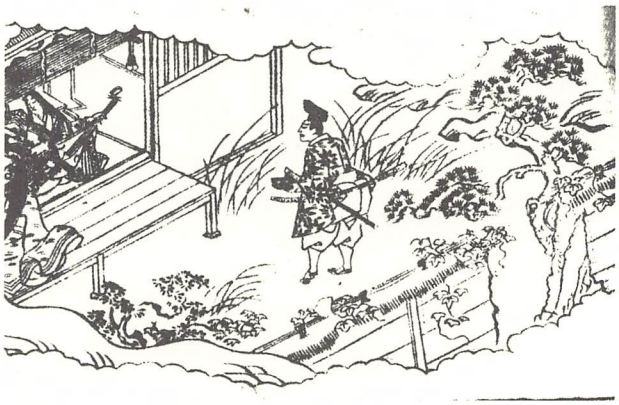


図26　元禄版　巻十八　25オ

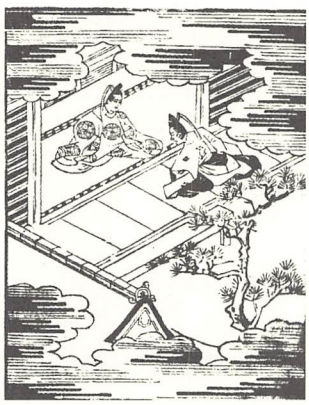


図29　無刊記版　巻十八　又32ウ

洗川であろう。本文に「暮れ居る空の月影の、時雨の雲間より、ほのぼのとあらわれ出でたる」とある月は描いていない。

この場面は「絵巻」の数ある絵の中で最も王朝的要素の濃厚なものということができよう。話の発端となる歌合わせでの絵姿は源氏物語「橋姫」で薫が優婆塞宮（八宮）の琵琶を弾く娘たちを垣間見る場面によること、御手洗川の歌が伊勢物語第六十三段をふまえていること、なによりも車から女房をみる一宮の姿は「橋姫」ばかりでなく、伊勢物語第一段以来、「物語に恋愛の始発として発展する機縁となる働きをする」（注17）とされる垣間見の形を取っているところにこの絵の王朝的側面が如実に現れている。「源氏物語絵巻」以来、近世の源氏物語画帖、版本の絵入り源氏物語でも繰り返し「橋姫」の垣間見場面は描かれている。

この「一宮御息所」は、『太平記』絵入り版本ではどう描かれているだろうか。「絵巻」の絵や『太平記』本文の記述と比較しながらみていきたい。

まず、『大全』では、巻十八第八十四丁で表に、義貞の首を求めて金崎城辺の淵で、船に乗った武士の一団が海士に海を探らせる姿を描く（図20）。この章段冒頭の本文「義貞・義助二人の首（を）…海士を入れてかづかせけれど」によった絵柄である。同裏に一宮の車上からの垣間見を描く（図21）。御簾を掲げて庭に向かって琵琶を弾く女房は一人で、「絵巻」に二人目の女性が描かれるのと比べて本文に忠実であると言える。一宮は車の御簾を上げて女房の方を眺めていて、「絵巻」が御簾をおろしたままのと異なる。「絵巻」の方が垣間見的であると言えよう。一方、『大全』は、山の端に日暮れの月を描き込み、本文の情趣を表現している。この場面の月は伝統的にはむしろ欠かせない要素であろう。また、『大全』は、「絵巻」にない荒れた築地垣を描き、その崩れを通して車中の一宮が女房を覗いている。本文に女房の住まいが「垣に苔むし瓦に松生ひて、年久しく住み荒らしたる宿の物さびしげなる」という描写を表現したものとみられるが、「絵巻」には垣が描かれないばかりか必ずしも住み荒れた様子は見えない。「絵巻」の絵師が恋の世界を美しく描くことにつとめたせいだろうか。もとより当時の御匣は没落していないはずだからこちらの方が正しい解釈かも知れない。両絵の一宮が乗る車はともに八葉の車に描かれている。

次に無刊記版の挿絵は、どうか。同版は各章段複数の挿絵を持つが、この段はとくに多く全部で十丁分二十図に及ぶ。そのうち前記の内容に関わるのは、又二十八丁表に、義顕らの首と一緒に護送される春宮を乗せた「張輿」を描き（図27）、裏に夢窓国師のもとに送られた一宮の首を描く（図28）。続いて又三十二丁表で、垣間見の場を描く（図22）が、前二者と違って、車から降りて築山の松の木陰からみようとする一宮と、それに気付いて、琵琶を几帳の傍らに置いて内へ入ってしまう女房という「絵巻」詞書きの次の本文シーンを描く。琵琶をおいて立ち上がる主人公のほか二人の女性が描かれ、雰囲気的には「橋姫」の透垣越しに優婆塞宮の姫君たちを垣間見る図に最も近いが、月は描かれていない。

元禄十一年版は、巻十八の第二十丁表に、歌会にかこつけて、御匣の住む西の対の屋にはいり廊下から、短冊を読む彼女を眺める絵が描かれる（図23）。上に月を描き込む。同版では、出会いの垣間見は描かれていないことになる。

無刊記版の挿絵は、両者と違って車を出てからの垣間見になっているが、垣間見までの三図のあと、この物語の主要場面を十七図にわたって

図19「太平記絵巻」第七巻　第一紙

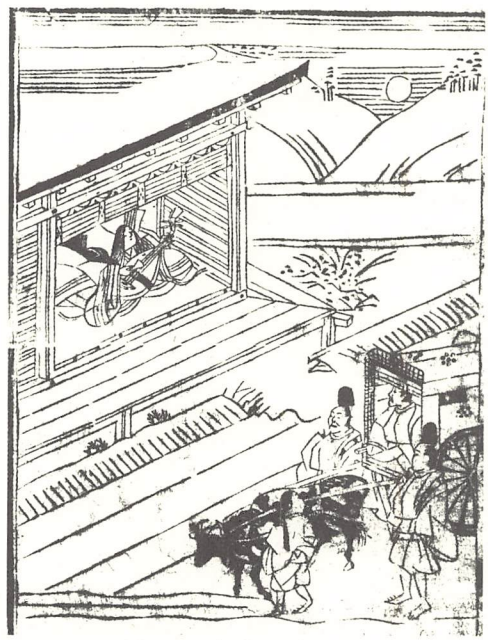


図21『太平記大全』巻十八　84ウ

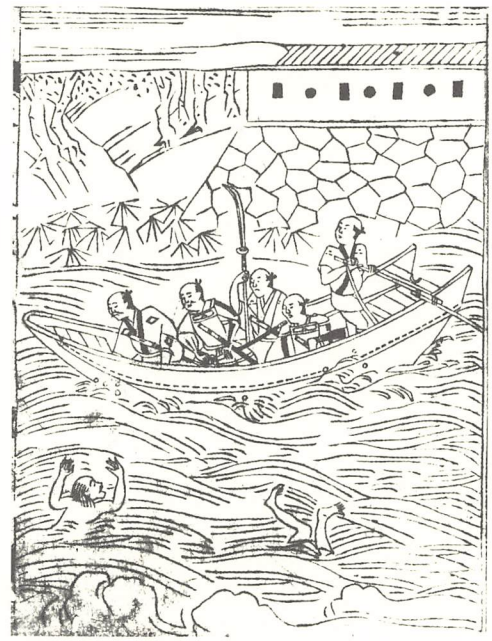


図20『太平記大全』巻十八　84オ

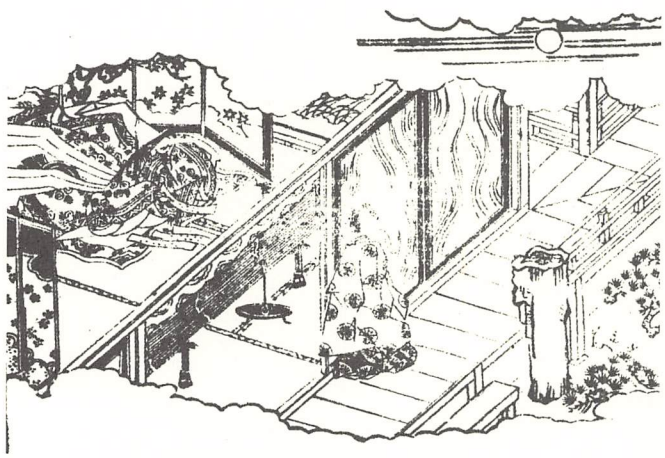


図23　元禄版『太平記大全』巻十八　20オ

図22　無刊記版　巻十八　又32オ

る公武の思惑に係わるものではないが、尊氏を頼朝になぞらえる一般的な考え方から由来しているとみることは許されよう。

また、出口氏が指摘するように（注16）、『舞の本』「木曾願書」には、願書を書く覚明と本文にはない読み上げる覚明の二つの挿絵が描かれている。しかし、『平家物語』が謡曲や幸若舞、古浄瑠璃等に多数の題材を提供したのに対し、『太平記』のそれは幸若舞「新曲」のほか極めて少ないのもまた事実であり、題材の共通性ではなく絵の共通性を探ろうとするには困難が伴う。

以上を前提に、次に『太平記』から唯一題材を採った幸若舞曲「新曲」を取り上げ、「絵巻」と絵入刊本挿絵、『舞の本』挿絵などに描かれた「新曲」、鳳林承章の日記『隔蓂記』に現れた「新曲」の上演状況を検討し、併せて『隔蓂記』に登場する海北友雪の動向を検討し、寛文期前後の文化状況の一端を探りたい。

二　「太平記絵巻」と幸若舞曲「新曲」

1　一宮御息所の物語―「絵巻」第七巻第一紙

太平記絵巻」第七巻第一紙は冒頭の詞書に続いて、『太平記』巻十八の「春宮還御事付一宮御息所」の章段に題材を取った絵を描く（図19）。

この章段は、後醍醐天皇の第一皇子尊良親王と今出川右大臣公顕の娘との哀話を「一宮の悲劇を彩るためはめ込んだ」（注14）ものとされる。既に直前の章段「金崎城落事」で自害した後醍醐の一宮尊良親王と御匣殿の哀話を叙述の流れを溯って挿入したものである。『太平記』は、この段冒頭、捕らえられた春宮が、新田義顕らの首とともに都に送られ、一宮の自害を聞いた御匣殿（一宮御息所）の嘆きが語られた後、「この御匣殿の一宮に参り初めたまひしいにしへの御心尽し、世に類ひなき事こそ聞えしか」として長大な「一宮御息所物語」の幕を開ける。

「太平記絵巻」第七巻の詞書きは本文をほぼ受けて二人のなれそめを次のように語る。

①後醍醐の天皇第一の宮うゐかふりめされて、ひとゝならせ給ふか、春宮にたゝせ給ひなんとときめきけるに、関東のはからひにて後二条院の御子春宮にたち給ふ。一のミやハよろつうちしほれ給ひて、たゝ詩歌のミちに御心をよせ給ふか、

②あるとき関白の家にて絵合のありしに、洞院の左大将の出された る絵に、源氏のうはそくのミやの御むすめひわをしらへけるかたをいふはかりなく筆をつくしてそ、かきたりける。宮この絵を御らんして御物おもひに成、

③せめて御心をなくさめ給ハんため、鴨のたゝすのミやに、まふて給ひて

いのるとも神やハうけんかけをのミみたらし川のふかきおもひを、となかめさせ給ふに、日もはや暮ぬとて御車を一条をにしへすき給ふか、あれたるやとに、はちをとけたかくひわのねきこゆ。御くるまをとゝめて御らんすれは、よはひ二八はかりなる似絵にすこしもたかハぬ女はうの秋のわかれをしたふひわをそしらへける。

これに対応する絵は、詞書き（①・②を前提として）③の部分を一紙全部を使って、賀茂の糺すの宮（下賀茂神社）に詣でた帰途の一宮が車の中から、かねて心を奪われていた絵姿とそっくりの女性が「御簾を高く掲げて」「青海波」（本文、本文は新潮日本古典集成版による。以下同じ）の琵琶を弾くのを垣間見る場面として描かれている。右上の流れは御手

出口久徳氏は寛文十二年版『平家物語』の挿絵がそれ以前の明暦版を改変したなかで、巻七「木曽願書の事」の挿絵がそれまでの神前で願書を書く覚明の姿から願書を読む姿へと変えられた事を取り上げている（注12）。同氏はこの変化について、寛文三年頃刊の古浄瑠「ともへ」さらに阪口弘之氏の研究に拠りながら、寛文期の人々の浄瑠璃などにおいて願書読みを好む風潮があった事を指摘され、「寛文版の挿絵を媒介にして、謡曲・浄瑠璃・名所・兵法などが『平家物語』と結び」つき、「読者は、挿絵から寛文頃の様々なテキストや芸能へとイメージをふくらませていくものと思われる。」と寛文期の文化の中で挿絵を位置づけている。

義貞が綸旨を拝する図は、寛文十二年版の『平家物語』巻七「義仲願書の事」で覚明が願書を読み上げる構図（図18・ただし寛文十二年版の覆刻である天和二年版による）にほぼ同じでこの絵も（無刊記本の挿絵も含めて）、また「絵巻」の絵も綸旨を「拝する」のではあるが、そのスタイルから「寛文期の願書読み」嗜好の流れに属するとみてよいと考える。「絵巻」の絵を近世初期の文化の中で考えようとする場合、『太平記』に限らず、『平家物語』や『曽我物語』、『義経記』などの絵入り軍記物刊本、軍記物以外の同時代絵入り刊本、さらにさかのぼって幸若舞や古浄瑠璃などの芸能に関わる刊本の挿絵等にまで比較の対象を広げなければ豊かな成果は得られないという事を感じざるを得ない。一例を挙げれば、『舞の本』の挿絵（注13）をみると「和田酒盛」の馬に鞭当て兄の十郎の元へ駆けつける五郎の挿絵は「絵巻」の落馬しようとする義貞の挿絵を彷彿とさせるし、「夜討曽我」や「景清」に描かれる将軍頼朝の姿は「絵巻」第五巻第六紙（図録79P）の中先代の乱鎮圧に鎌倉に向かう尊氏に極めてよく似ていることに気づく。ここで尊氏は、甲冑を着けず、狩衣・烏帽子で供の侍に傘を差し掛けられる馬上姿で描かれている。供のものも鎧を着しているのがわずかに一騎で、この絵全体が出陣の絵としては不可解な様相を示している。詞書には「主上則征夷将軍になされ、主上の御諱尊治の尊の字を給ハる。」とあり、絵巻が『太平記』本文を受けて、尊氏の征夷大将軍の地位奏請が許されないまま出陣した史実を無視し、尊氏を将軍として描いたためではないかと考えられる。その際、「夜討曽我」で尊氏の宗家に当たる鎌倉幕府の将軍頼朝が「御寮（頼朝）の其日の御装束、青狩衣に立烏帽子、尾花葦毛の逸物に白鞍置かせ、召されける。」という描写に基づく挿絵（注14）が「絵巻」の作者に採られたと推測できるのではないか。つまり将軍尊氏の絵としてのモデルを将軍頼朝を描いた「夜討曽我」の挿絵に求めたのではないかと思われるのである。

尊氏を頼朝になぞらえることについては既に尊氏の同時代の二条良基の『小島のすさみ』や、尊氏上洛の先陣を勤めた武士の手になる軍記物語『源威集』（序では嘉慶年間(1387-9)成立）にみられる。小川剛生氏は、良基が『小島のすさみ』で、文和二年(1353)美濃垂井に遷幸した後光厳天皇のもとに鎌倉から参内した尊氏を、建久はじめの頼朝の上洛・参内になぞらえ、「朝廷や天皇に対し仁義をわきまえ恭順で」あった両者に武家政権のあるべき姿を見ていることを指摘している。『源威集』で尊氏の上洛について、「昔頼朝の文治・建久の路次の如く、京入りの儀式を調え」られ、「…参内のこと鎌倉において治定」と記すことに、良基のような見方が「それなりの説得力を持ち…武家の間にも受け入れられたことを推測できる」とされている（注15）。

「太平記絵巻」と『舞の本』の挿絵の類似はそのような武家政権を巡

図14　無刊記版　巻十　又4ウ

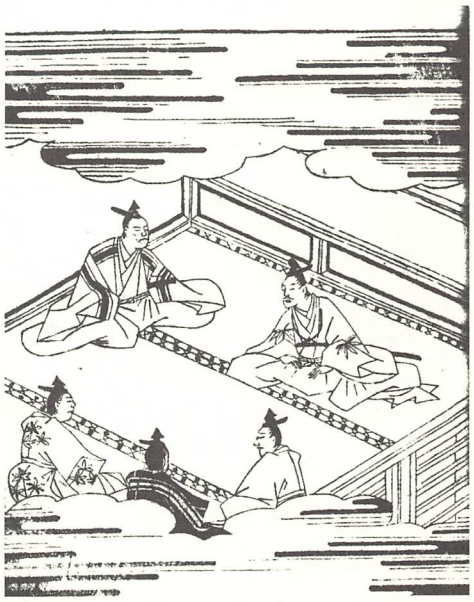


図13　無刊記版　巻十　又4オ

図16　無刊記版　巻十　又６ウ

図15　無刊記版　巻十　又6オ

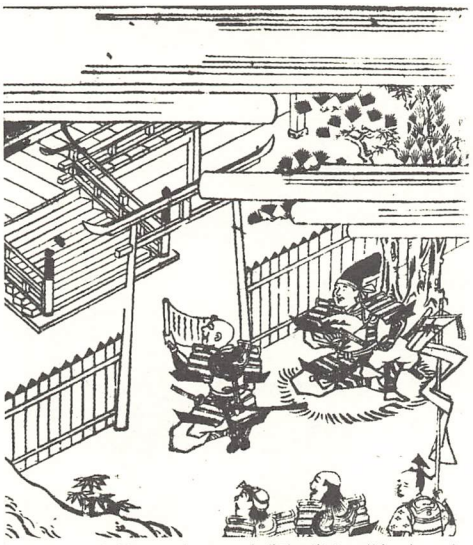


図18『平家物語』（天和二年版）巻七（絵の）2オ

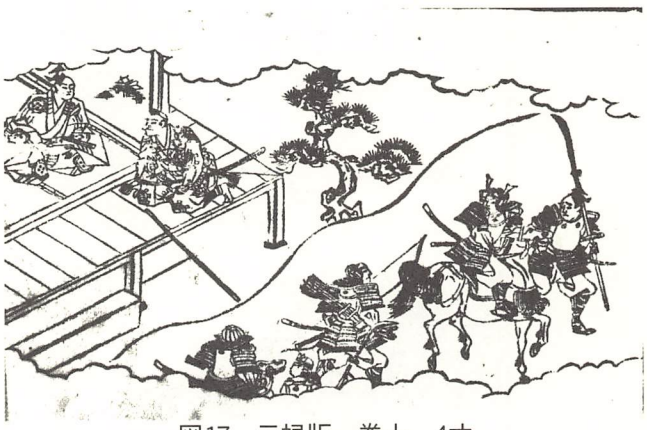


図17　元禄版　巻十　4オ

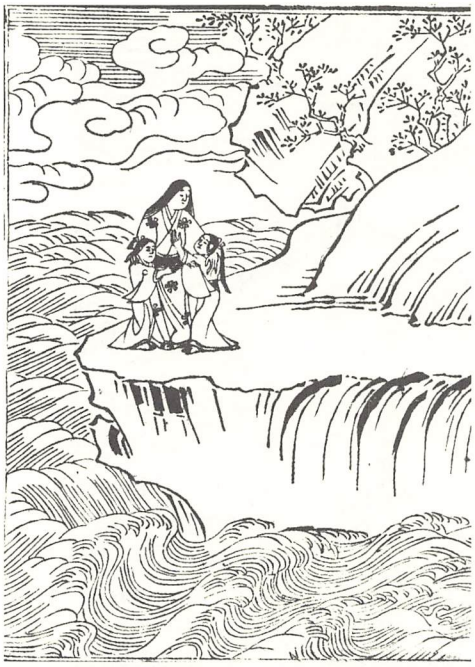


図8　『太平記大全』巻三十三　56ウ

図7　「太平記絵巻」第十巻　第十二紙（部分）

図10　無刊記版　巻三十三　又17ウ

図9　無刊記版　巻三十三　又17オ

図12　『太平記大全』巻十　11ウ

図11　『太平記大全』巻十　11オ

上げるが、助かりそうもないので、三人を背と前に抱えて淵に飛び入りともに空しくなった、という題材を描く。

これを描く「絵巻」第十巻第十二紙（図7）は、右半分を使って二人の子とともに途方に暮れて淵にたたずむ女房と子供を描き、左上に侍に打擲される夫を配する。「大全」は夫の姿は描かないで淵にたたずむ女房を描く（図8）。無刊記版は、川岸に倒れて嘆く母子、それを見やる通行人をオモテ丁に、ウラには打擲される夫を描く。子供は一人しか描かれていない（図9・10）。『大全』の絵が描く川淵の様子、淵を背に立つ母子の姿は子供の位置を別にすればほとんど「絵巻」と同じである。『大全』の挿絵に無刊記版ウラ丁の挿絵を繋げば、ほぼ、「絵巻」との絵の構図になるといえる。

永積安朗氏は、この章段には内乱の犠牲者たちの惨状が冷ややかに見据えられ、続く「武家人富貴ノ事」の段（「絵巻」第十巻第十三紙　図録11P）が「財宝を蕩尽し…日夜遊び狂う成り上がり武家たち」を批判的に描くのと表裏をなし、「南北朝五十年戦争の内実が鮮明に表現されている」と位置づけられている（注9）。「絵巻」の連続する両紙の絵と詞書にも両段の内容の対比性が込められていよう。なお、元禄版にはこの章段の挿絵はない。

「飢人投身事」の『大全』と「絵巻」の強い類似性は、（1）でみた中世絵巻のような第三項は今のところ見出せない。ただし、「絵巻」第十二巻第十紙（図録178P）に、崖上から川をのぞき込む人物が描かれた部分は詞書の内容に全く無関係であるが、崖の表現が「飢人投身事」とほとんど同じである。せり出した崖の上から下をのぞき込むという構図は、師宣風」とされる寛文十年刊記『観音経和談鈔』（東北大学図書館蔵）（注10）にもみられる。また、承応三年刊の絵入『源氏物語』の「若紫」巻に、源氏が北山で修行する聖を山中に訪ねる場面の挿絵（注11）が類似した表現を持つ。これらには何らかの原型を成した絵（漢画系か）の存在が考えられる。

（3）「義貞謀反事」

「絵巻」第三巻（ニューヨーク・パブリックライブラリー蔵）第十二紙（図録56P）は、本文巻十の「新田義貞謀反事付天狗催越後勢事」を描く。

「絵巻」は画面右上に千剣破城攻めから虚病で東国に帰り一族と謀議を計る義貞→中央に倒幕の挙兵を決意した義貞が生品神社神前に跪いて護良親王の綸旨を拝する場面→左上には謀反を触れ回る天狗山伏→その下にはそれを聞いて援軍に駆けつける越後の新田一族を描く。すなわち第十二紙はこの章段内容を四つの画面に分けそれを巧みに構成して本文内容を凝縮した詞書きの内容をほぼ余すところなく表現している。

絵入り版本の挿絵はどうか。まず『大全』の当該場面の挿絵（図11・12）は（巻十第十一丁）、オモテ・ウラをそれぞれ上下に分け「絵巻」と同じ四つの場面を配している。画面の上下と丁をめくる事で本文の全内容を挿絵で追えるようになっているのであり、一丁を広げればそのまま「絵巻」の構図と同じになるのである。ここにも「絵巻」と『大全』挿絵の間にある親近関係をうかがえるのである。つぎに無刊記本は巻十又四丁のオモテに義貞一族の謀議を、ウラに神前の義貞を描き（図13・14）、飛んで又六丁のウラ・オモテを使って越後の一族の集結と義貞の元へはせ参じる姿を描いている（図15・16）。綸旨を拝する義貞の姿は他とほぼ同じ。元禄版は、「大全」のウラ丁と同じ内容を描く（図17）。

で、義貞同様矢を射られて跳ね上がる馬上の武士を挿絵にしている(図6)、弓矢は持たず右手に持つ太刀の切っ先が馬の頭部の後ろに覗いている。

中世の先行する「平治物語絵詞」、「男衾三郎絵詞」、「蒙古襲来絵詞」などの著名絵巻にも、これに似た騎馬図がある。「平治物語絵詞」(ボストン美術館)の「三条殿焼討」巻に疾走する馬上から矢を射ようとしている二人の武士と、後ろ脚を蹴上げた馬に弓をつがえた武士という二つの類似した姿が描かれており、両者を併せると、ほぼ「絵巻」の義貞の姿に重なる。

「男衾三郎絵詞」(東京国立博物館)には、大番勤務で京都へ上る途中の吉見二郎一行が山賊に襲われた場面で賊に薙刀で腹を突き刺されて血を吹き出し後脚を跳ね上げる馬に乗る武士、馬上で敵を振り返って睨み、左手は弓を持ち右手は腰の刀の柄を握って将に抜こうとしている姿を描く。「蒙古襲来絵詞」(宮内庁書陵部)は、文永十一年(1274)十月二十日の合戦に加わった竹崎季長が敵地に先駆けたものの乗馬を射られ窮地に陥っている姿が描かれている。左手は弓を持ち右手は馬の首越しに左の手綱をしっかり握っている。馬は腹から血を吹き出している。

ここでまでの各図をまとめてみると次のようになる。

	(馬)	(騎馬者右手)	(騎馬者左手)
平治物語絵巻	1 疾走・尾上る	手綱	弓矢
	2 跳ねる・尾下	手綱	弓矢
男衾三郎絵詞	跳ねる・尾下・腹血	太刀の束	弓
蒙古襲来絵詞	跳ねる・尾下・腹血	左手綱	弓
太平記絵巻	1 跳ねる・尾下・腹血	挙げる	手綱
	2 跳ねる・尾下	手綱	弓矢
太平記大全	1 跳ねる・尾下 腹に矢	挙げる	弓矢
	2 跳ねる・尾下	太刀	手綱

(注「絵巻」「大全」の馬1はともに義貞)

これをみると、騎馬武者が、戦闘で傷ついた馬が後ろ脚を蹴上げて跳ねるという図柄は中世合戦絵巻以来の伝統的描写であることが知られる。「絵巻」・『大全』が、ともにこの伝統線上にありそのヴァリエーションであることは確かであろう。「太平記絵巻」は直前の第八紙で「平治物語絵詞」同巻から兜のあごひもを結ぶ若武者の姿を義貞の姿に転用しているので(図録p97)、「平治」1・2をモデルに、義貞を描き本文にない弓矢をはずして転用したことは考えられる。『大全』は弓矢を描き込んでおり、本文からすれば過剰な表現となっているであるが、そのことからかえって、やはり「平治」等の模本・粉本類との関係を考えざるを得ない。しかし、「絵巻」・『大全』と中世絵巻との具体的関係をこれだけから明らかには出来ない。さらに詳細な比較検討が必要となろう。ここでは、上表からも明らかなように、右手を挙げているのは「絵巻」と『大全』のみであり、両者の近縁性が伺えることを指摘しておきたい。

(2)「飢人投身事」について

「絵巻」第十巻第十二紙 「太平記」巻三十三

この章段は、もと兵部少輔という没落官人が動乱の中で都を食い詰めて妻と七才の女児と九才の男児とともに丹波を目指す途中、思出川の川岸に妻子をおいて物乞いをしたところ、その家の侍十数人に物盗りか宮方の回状を持つ者かと疑われて打擲・拷問された。夫を待つ妻は、彼が殺されたと聞いて悲観し子供と友に身を投げて死んでしまう。やっと釈放された夫は川岸へ戻って井関に引っかかった瀕死の妻子を見つけ救い

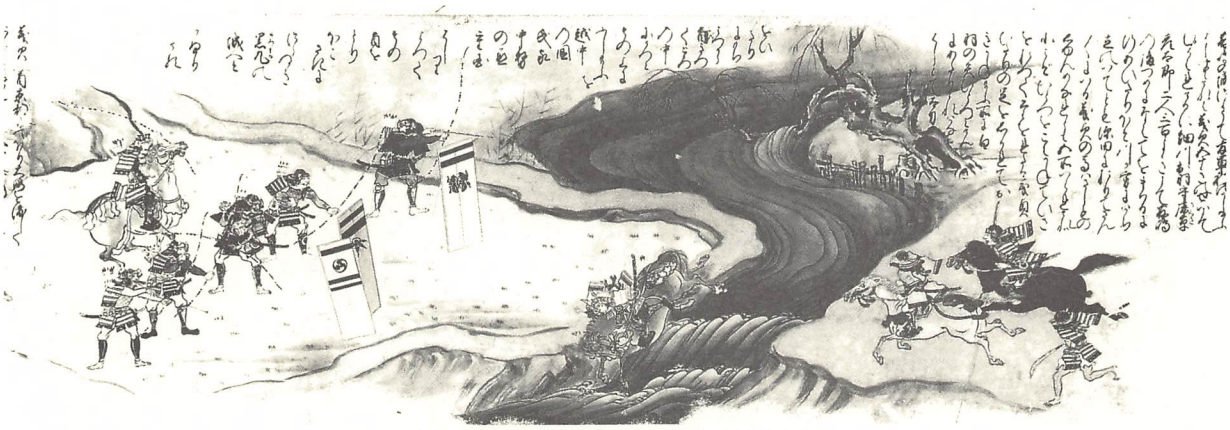


図1　「太平記絵巻」第七巻第九紙

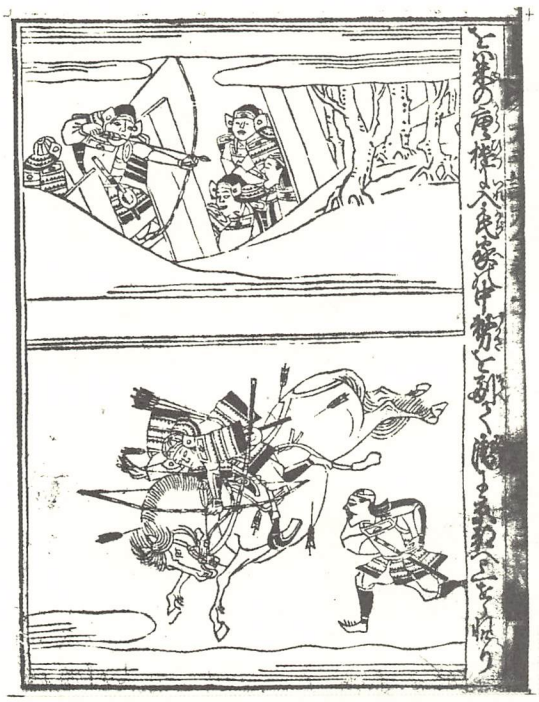


図3　『太平記大全』
巻二十　53ウ

図2　同上（部分）

図6『太平記大全』巻三十九　55オ

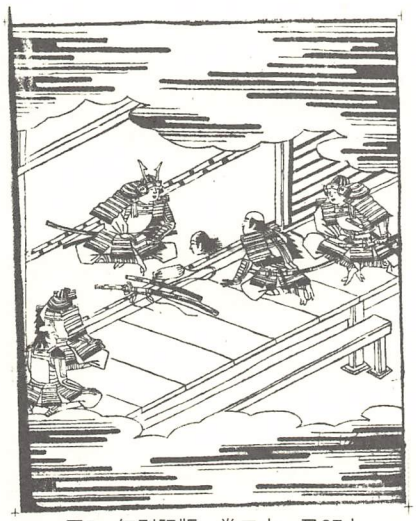


図5　無刊記版　巻二十　又27ウ

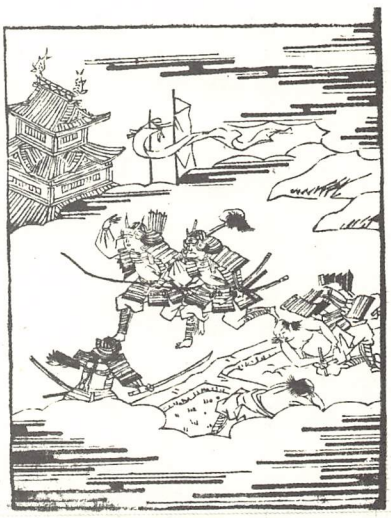


図4　無刊記版　巻二十　又27オ

開板」

本来、「絵巻」と同時期に刊行されたと思われる二種の絵入り刊本挿絵と「絵巻」の絵との関連を探るには、両者のすべての絵を逐一検討すべきではあるが、さしあたり本稿では、類似性の問題を含めていくつかの特徴的な絵を中心に問題点検出につとめ、今後の検討の基礎としたい。（なお、本稿に掲載した図版は「太平記絵巻」は埼玉県立博物館提供の写真を使用したほかは架蔵の版本挿絵によった。また、文中の「絵巻」の絵は『図録太平記絵巻』の該当頁を示した。）

2　「絵巻」と版本挿絵の類似性

『太平記』の絵入り版本の挿絵をみていると、とくに『大全』の挿絵がその絵柄・構図において「絵巻」と類似性を持つことに気付く。そのうちここでは、とくに類似性の強い三つの場面について検討したい。

（1）　「義貞自害事」

『太平記』巻二十「義貞自害事」は、新田義貞が延元三年閏七月、越前藤島の戦いに、馬を敵軍に射られて落馬負傷し自害する事を記述する。これに対応する「絵巻」第七巻第九紙（図1）の詞書は、（詞書は「図録」の読みによる、以下同じ）

（前略）ほそ川か方にハ、かち立のいてとも深田におりてさん〳〵にいる。義貞の馬ハさしものしゆんめなれとも、五所いられけれハ小ミぞひとつをこえかねて、ひさをおつてたおれたる。義貞ひたりの足をしかれて、おきかね給ふ所に白羽の矢ひとつミけんにあたりけれハ、かなはしとて太刀をひたりにもちミつから首をきつてところの中にうつミその上にふしたまふを越中の国氏家中務の丞重国はしりよつてその首をとりほこさきにつらぬき黒丸の城へそかへりける。

絵は、矢を受けて「小溝」に落ちる馬からまさに落ちようとする義貞を中央に左に矢を射掛ける敵、右に義貞を追ってきた味方の手勢が画面全紙をフルに使って描かれている。これに対して『大全』の挿絵は、ほぼ同じ姿勢で落馬しようとする義貞と上部に弓を構える敵兵という構図になっている（図3）。無刊記版は義貞の首を刀の切っ先に突き刺して黒丸城に掛け戻る氏家重国と田圃の中で割腹する義貞家臣を描く（図4）。元禄版は矢を受け岸下に落ちた馬と落馬して眉間に矢を受け抜刀している義貞を描く（十七丁オ）。三者三様に「決定的瞬間」を図化しているのであるが、図版からも明らかなように、「大全」の挿絵の義貞は「絵巻」のそれ（図2）と酷似といってよいほど同じである。尾を後ろ足の間に垂らして落ちていく馬の姿勢、鐙を踏み外し右手を挙げている馬上の義貞。両者の違いを挙げれば、『大全』の挿絵は義貞の兜に前立がないこと、馬の受けた矢が本文どおり五本描かれているのに対し、「絵巻」では詞書に五本とあるものの、二本の矢のほかは流れ出る血で傷を表現していること、そして最大の違いは、義貞の右手はともに斜め上方にあげられているのに左手は「絵巻」では手綱を握り『大全』は本文に記述のない矢をつがえた弓を持っている点である。

このほかに「絵巻」と『大全』には同じ構図の絵がそれぞれ一箇所ずつある。絵巻第三巻第十一紙（図録55P『太平記』巻九「千葉屋城寄手敗北事」）、六波羅探題陥落により、千剣破城攻囲を解いて南都へ落ちる幕府軍の中に険しい山道から落ちようとする騎馬が描かれている。右手は手綱から離れて斜め上にのび、矢の入った箙を負うが手綱を握る左手に弓は持っていない。『大全』は巻三十九「小清水合戦付瑞夢事」の章段

字内外、「鈔」以下は片仮名交じり十五行二十三字。挿絵は子持匡郭で、27㎝×16.4㎝、挿絵の丁付は前後連続。題簽は、「太平記大全　幾」。　刊記は尾題の後に「万治二己亥年仲夏吉辰板行之」

なお、冊数が五十冊なのは、巻十・十四・十六・十七・二十四・二十六・三十三・三十五・三十九の各巻が上下に分冊されているため。一巻一冊で合計四十一冊の版もある（注6）。

加美宏氏によれば（注7）、『大全』現存版本はいずれも上記と同じ刊記を持つが、各巻目録の箇所にその巻の収載年月日の始めと終わりを記しているものといないものの二種があり（架蔵のものは記載なし）、『大全』万治二年(1659)版本がどのように板行・流布したかはなお、精査の必要がある、とされているが、その上で、同氏は『大全』目録箇所の記載は、寛文八年(1668)に刊行された『大全』と同様の注釈書集成『太平記綱目』が同じ記載をするのに「先行するという関係は動くまい。」とされている。とすれば、『大全』は、万治二年から寛文八年以前に現在見る形になっていたとすることができ、その本文部分は最初の絵入り『太平記』になっている、といえよう。

次に、(2)無刊記版本の書誌を以下に記す。

四十巻、付惣目録・剣巻が第一冊、絵入り大本四十一冊。巻一初めに序、各巻首に目録あり、次に本文。十一行二十三字内外、平仮名交じり。挿絵は単界、匡郭は縦21㎝×横16.5㎝、一丁分で本文と別刷り、基本的にはオモテ・ウラ別図、丁付は「又幾」。各章段に挿絵を複数丁持つ。挿絵の一丁前は丁数の上または下に「ヱ」を付す（ないものもある）。　題簽「太平記　幾」。尾題の下に「此一書者理兵衛書之」と記す。

日東寺慶治氏は、本刊本を「挿絵・文字・版式等から寛文期のものか」とされ（注8）、新編日本古典全集本『太平記』は挿絵として、長谷川端氏蔵の同版本を「寛文頃絵入整版本」としてその一部を掲げ、『太平記絵巻』（河出書房新社刊）も「江戸時代の絵入り本で比較的古い板（寛永～寛文頃）と考えられる」として同版から一部を掲載している。これらのことから本無刊記絵入り版本は寛文期頃の刊行と見なしてよいであろう。ただし、市古夏生氏は、明暦二年に刊行された絵入り『平家物語』挿絵の「又　幾」という丁付形式は、「見開きの構図は使えない。また柱刻の形式・字体が本文の丁と挿絵の丁とでは相違する」ことなど、「どう見ても同一時期に彫刻したものとは思えない。」とされている。このことは当無刊記版本の「又幾」の丁付にもそのまま当てはまるのであるが、同氏が「最初は絵がなくても不都合は生じなかったのであるが、数年後に絵入り本の流行によって、誂えて補入したと考えていい。」と続けられている（注3に同じ）ことから、挿絵も含めて寛文期の枠に収まる刊行と考えて差し支えないものと判断した。

以上の二種に対して、(3)、(4)はいずれも元禄期であり、(3)は未見であるので必要に応じ(4)の挿絵を参考にみることにしたい。(4)の書誌は以下のとおり。

四十巻、十一冊。序・惣目録・剣巻が第一冊、絵入横中本。巻一より四巻ごとに一冊。各巻首の目録の箇所にその巻の収載年月の始めと終わりを記し、続いて各章段名とその大意を記す。十九行二十二字内外、平仮名交じり。挿絵はほぼオモテ半丁、時に見開きにする。匡郭は縦11.5㎝×横17.5㎝、挿絵丁付は通し。子持枠題簽「𢘅　太平記」。刊記は跋の後に「元禄十一年／戊寅正月十一日／洛陽書林等

「太平記絵巻」と寛文期文化の一側面

―絵入り版本と幸若舞「新曲」―

谷澤　孝

はじめに

埼玉県は平成十三、十四年に相次いで「太平記絵巻」第十巻、同第六巻を海外オークションで購入した。これにより、県はこれまで購入済みの第一、二、七巻と会わせて現存する同絵巻一〇巻のうち半数を所蔵することとなった。また、原本・模本ともに所在の知られていなかった第六巻の出現により、「太平記絵巻」全一二巻の全容がほぼ明らかになり、今後の同絵巻研究の進展に大きな手がかりがもたらされた(注1)。

「太平記絵巻」については、先行する「北野天神縁起絵巻」（弘安本）、「芦引絵巻」、「融通念仏縁起絵巻」などの著名絵巻から構図を転用し、合戦場面でも「平治物語絵巻」などから多数転用していることが指摘され、作者である絵師の家柄・地位を推測させる手がかりとなるとされている(注2)。

ここでは、寛文期頃から現れ始めた『太平記』の絵入り版本の挿絵、鹿苑寺住持鳳林承章の日記『隔蓂記』に現れる幸若舞「新曲」の上演の様相、及び海北友雪の動向等々を通じて、「太平記絵巻」を寛文期という時代の文化的様相の中に置いて考えてみたい。なおここで「寛文期文化」と題したのは、いわゆる「寛永文化」の下限を成す「明暦―寛文」頃を指すものとして考えている。

一　「太平記絵巻」と絵入り刊本の挿絵について

1　絵入り刊本三種の書誌

寛永期には挿絵のなかった軍記物にも『平家物語』の絵入り平仮名本が明暦二年に刊行されたのをはじめ、「絵巻」が作成された寛文期前後には、『太平記』にも絵入り刊本が現れ始めた。これらはそれまでの片仮名本に対して、平仮名本であった。

『太平記』の絵入り版本が刊行され始めた時期については、従来必ずしもはっきりしていない。市古夏生氏は、「寛文前後かと思われる。」(注3)とされている。筆者は、万治二年(1659)の刊記を持つ『太平記大全』を現在知られる最初の絵入り版本としてよいと思う。同書は、前半が『太平記』本文と挿絵、後半が『太平記』の注釈書類の集成というスタイルのため一般の『太平記』として扱われてこなかったが、前半だけみれば立派な絵入り太平記である。これを含めると、『太平記』の絵入り刊本には、(1)万治二年刊『太平記大全』、(2)無刊記（寛文頃）刊本、(3)元禄十年刊本、(4)元禄十一年刊本、などが知られている（注4）。このうち、「絵巻」作成期と推定される寛文期に近い刊行の(1)及び(2)の挿絵を中心に「絵巻」の絵と比較検討してみたい。

『大全』は、『太平記』古活字本の盛行によって現れた『太平記評判秘伝理尽鈔』に代表される注釈書や評判記・秘伝書を集成するとともに筆者西道智の独自な見解を加えて編纂・刊行され、「太平記読み」の台本・ネタ本となったものである（注5）。以下に簡単な書誌を記す。

四十一巻、大本五十冊。第一冊は太平記序・剣巻・惣目録。第二冊以降は各巻首に目録、次に本文、本文末に挿絵一丁を挟み「鈔」「評」「伝記」の注釈集成部分が続く。本文は平仮名交じり、十二行二十

本文は再生紙を使用しています。